

熊本三州会記念誌



西南の役 第100回慰霊祭記念

明治十年、国内で最大・最後といわれた西南の役から百三十八年の歳月が流れた。今日の日本の繁栄は明治維新の礎が有った事を忘れず、更に後世に語り継ぐべく熊本三州会は意を同じくする役員・会員を初め、関係諸氏に浄財を募り第百回慰霊祭を記念して此処に眠りし西南の役薩軍戦没者(確認した八二八名)の銘碑を建立する。

平成二十七年 四月吉日

熊本三州会会則抜粋

第2条 会員は熊本在住三州（薩摩、大隅、日向）鹿児島県、宮崎県出身及びそのゆかりの者、そのほか本会への入会を希望する者とする。

第3条 本会は西南の役戦士の志を引き継ぎ、会員相互の親睦と会員の発展向上を目的とする。

第5条 本会は目的達成の為、次の事業を行う。

- 1) 毎年、熊本市川尻町延寿寺と熊本市段山において西南の役戦没者の慰霊祭を行う。
- 2) 毎年、山鹿口（山鹿市）、田原坂（植木町）、南洲神社大祭（鹿児島市）などの慰霊祭に代表者を派遣する。
- 3) 年1回、親睦会を行う（会員家族、知人等参加）。

熊本三州会記念誌



西南の役 第 100 回慰霊祭記念



第 100 回慰霊祭に想う

熊本三州会会長 柏 木 明

巨大な自然石の「西南の役薩軍戦没者墓碑」が、熊本三州会によって川尻の延寿寺に建立され、招魂祭が行われたのは大正 5 年 6 月であった。

爾来毎年欠くることなく行われた慰霊祭は、平成 27 年第 100 回を迎えた。この年互いに会員たり得た奇縁を喜び、来し方の 100 年を回顧し国を憂えつつ異郷に散った若者達に思いを馳せその霊をお慰めする会員の心を誌に纏めて発行することは節目の記念事業に相応しく慶賀に堪えません。

西南の役は今を去る 138 年前、西郷隆盛率いる薩軍の東上により明治 10 年 2 月より 7 ヶ月に亘り、同胞相討つ熾烈な我国最後の内戦でありました。就中、肥後では城は落ちず田原坂の嶮また我に組せず、山野を血で染め凄愴悲惨の極を尽し死傷者続出し、薩軍の兵站基地であった川尻に運ばれた。延寿寺の住職伝弘応和尚は後難を恐れず埋葬地を提供され、今日迄歴代住職により懇ろに供養されて来られたご芳志に深い感動と感謝の念を捧げるものであります。

年移り郷里に引き取られた遺骨もあり、墓域荒廃せるを大正 5 年熊本三州会の先人達により整備され墓碑が建立され、第 1 回慰霊祭が挙行されてより一世紀に亘り終戦前後の混乱期にも拘わらず年毎に慰霊の至情を捧げてこられた会員他関係各位に畏敬の念を覚えぬにはおられない。

西南の役では多大なご迷惑をお掛けしたものの、親しく薩摩墓と呼び見守って下さっている地元川尻の町内会の皆様へも心から感謝申し上げ度い。

本会会則は西南の役戦士の志を引継ぎ会員相互の親睦と会員の発展向上を目的としその達成の為延寿寺並びに段山の慰霊祭を挙げている。熊本三州会は更に第 200 回慰霊祭に向け歩み始めるのであるが、冀くば熊本在住の三州出身の方々には拳って一人でも多く入会参加して頂き、会発展の推進力になって頂き度いと願って居ります。

最後に、ご多忙の中資料収集編集に当られた崎元達郎記念誌編集部会長、坂口寛治編集委員長始め編集部の方々のご苦勞と他の記念事業を含め、物心両面に亘りご協力頂いた役員並びに会員他多くの関係各位に深甚の謝意を表し、第 100 回慰霊祭を機に熊本三州会の益々の発展を祈念致します。



南洲遺訓

道は天地自然の道なるゆえ、
講学の道は、敬天愛人を目的と
し、身に修するに、克己を以て
終始せよ。

道は天地自然の物にして、人
は之を行ふものなれば、天を敬
するその目的とす。

天は人も我も同一に愛し給ふ
ゆえ、我を愛する心を以て人を
愛する也。

人を相手にせず、天を相手に
せよ。

天を相手にして己を尽くし、
人を咎めず、我の誠の足らざる
を尋ね可し。

敬天愛人



「敬天愛人」という語はいつ頃から用い始められたか、的確にはわからない。前半生にはみあたらずに後半生である。思うに、後半生、特に島津斉彬公の急死、月照上人との入水蘇生、五年間に及ぶ大島流たくと死生大義の難関に直面し、その間の体験、思案、学問や修業から自然に悟りの人生に徹せられた。天理人生学の心境であろう。つまり西郷の真の心の結論である。さて、この語の原典について一応考えてみると、「敬天」の語は「詩経」「書経」にもあり、「愛人」の語は「礼記」「論語」にもある。また「尊天愛人」は漢書にもあり、「畏天愛民」は大西郷が親近愛読された陳竜川の著述にもある。しかし「敬天愛人」と統一表現したのは、やはり大西郷独特の至誠道からにじみ出たものであろう。大西郷の学問思想としては、儒学、特に王陽明の影響が大きい。陽明学では「前後内外なく、渾然一体、未発表のもの」が本源であり、実在であり、天理である。

この天理が天地万物の性であり、道である。この天然自然の道に従う人の良識は天の絶対至上の命令であり、その明德を明らかにし、民親しむ心すべてはここにもとづく、そしてその心は己の我意我欲に克ち独りを慎む工夫に始まり、己を修め、人を治むるの、すべての道に通ずる。

すなはち「敬天愛人」の道は天地万物の一切に対して極めて敬いと至誠の純情に徹し、明朗親愛の温情をもって事に当たる人間最高の理念である。まさに千古の哲理であり、またいずれの人にも適用できる実践道でもある。

西郷は、この「敬天愛人」の実践道の行者として無私無欲、天意を受けて万民の心に徹することに情熱を傾け、努力し、続けた人であることは、その生涯の行動を見れば、自ずから会得されるだろう。

熊本三洲会記念誌

～西南の役 第100回慰霊祭記念～

第100回慰霊祭に想う	熊本三洲会会長 柏木 明	1
西郷南洲先生の写真とことば		2

第一章 祝辞

熊本県知事	蒲島 郁夫	10
鹿児島県知事	伊藤 祐一郎	11
宮崎県知事	河野 俊嗣	12
熊本市長	大西 一史	13
西郷隆盛公奉賛会理事長	西郷 隆文	14
衆議院議員	木原 稔	15
西南の役従軍者遺族会会長	桂 久昭	16
荘内南洲会理事長	水野 貞吉	17
熊本在住鹿児島県人会会長	池 満 淵	18
熊本在住宮崎県人会会長	二見 郁男	19

第二章 第100回慰霊祭

経過報告		22
西南の役薩軍戦没者銘碑除幕式		22
慰霊祭次第		23
会長祭詞		23
慰霊祭 終了後の催し		24
新聞記事		25

第三章 記念事業報告

記念懇親会	会長代行・副会長	崎元達郎	28
記念銘碑建立計画に携わって	理事・事務局長	瀬戸口章三	29
熊本協同隊主幹崎村常雄の墓修復			
	理事	坂口寛治	30
西南の役、熊本市内史跡巡り	副会長	梅北兼弘	31
懇親ゴルフ	理事	黒木三治	32
記念誌の刊行	会長代行・副会長	崎元達郎	33

第四章 第100回慰霊祭・記念事業写真集

第100回慰霊祭	36
第100回慰霊祭記念懇親会	41

第五章 第100回慰霊祭記念座談会

～西南の役・薩軍戦没者慰霊祭・熊本三州会を語る～

西南の役第100回慰霊祭記念座談会	46
-------------------	----

第六章 100周年を迎えて

大正5年第1回慰霊祭に思う		林半次	64
「西南の役 第百回慰霊祭」に向けて	衆議院議員	木原稔	65
薩州墓の思い出	顧問	木村仁	65
第百回慰霊祭を迎えて	延寿寺三十七世住職	藏原恒海	66
延寿寺にある西南役関連の碑		記念誌編集部	67
「西南の役 第100回慰霊祭」にあたって			
	熊本市議会議員	倉重徹	70
慰霊祭100年に寄せて	理事	木村良子	70
90周年記念誌を読んで記憶に残ったこと	理事	是枝仁	71
100周年慰霊祭をお迎えして	正会員	右田重生	72
「第百回薩軍戦没者慰霊祭」に出席して	遺族	池田京子	72

お礼のことば	遺族	野間清光……	73
御礼	遺族 福山	亨・正子…	73
第百回三州会慰霊際に参列して	遺族	湯田秀生……	74
お礼	会員・遺族	島卓郎……	75

第七章 西南の役に係わる特別寄稿

西南の役と鎮西の守り	陸上自衛隊西部方面総監陸将	番匠幸一郎……	78
西南の役に想う	陸上自衛隊第8師団長陸将	山之上哲郎……	79
霊峰山 岳林寺の沿革について	岳林寺住職	工藤征英……	80
大叔父佐々友房の賭けた想いと	崇城大学学長	中山峰男……	81
「西南の役 第百回慰霊祭記念誌」寄稿			
	鹿児島県人会八代おほら会副会長	松山和紀……	81
西南の役と川尻	川尻町文化の会名誉会長	西輝喜……	82
語り継ぎたい川尻の歴史と文化	川尻文化の会会長	荒金鍊一……	83
古写真に見る西南戦跡・熊本城攻防戦			
	熊本市文化財保護委員・熊本城顕彰会理事	富田紘一……	84
徳富蘇峰の見た西南の役	徳富記念園元館長	藤川博昭……	85
田原坂・熊本城・川尻町—西南戦争の点と線—			
	熊本市役所文化振興課	中原幹彦……	86
大西郷という人	在熊宮崎県人会会員	上米良恭臣……	87

第八章 西南の役との係わりを語る

三州人の想い	前会長	西郷恵一郎……	90
西郷隆盛の国づくりに懸けた想いに寄り添う	顧問	三浦一水……	91
薩軍兵士の墓地に佇みて	熊本在住鹿児島県人会会長	池満淵……	92
西郷南洲翁 没138年を迎えて	熊本在住宮崎県人会会長	二見郁男……	93
勇将 篠原国幹を偲ぶ	会長	柏木明……	94
西南の役に学ぶ	会長代行・副会長	崎元達郎……	97
熊本三州会の過去、現在そしてこれから	副会長	竹内義雄……	98

薩軍戦没者慰霊碑は語りかける…	副会長	脇田五典	99
菊陽町における西南の役	副会長	梅北兼弘	100
私と熊本三州会の関わり	理事・事務局長	瀬戸口章三	101
薩摩隼人について祖父との思い出	理事	柴田章子	102
『 ^{あま} 天の古道』と『西南の役』	理事	樋口信夫	103
熊本城攻防と熊本三州会の段山慰霊祭	理事	寺地靖	105
西南の役、激戦地の丘で思う	理事	鬼崎行男	106
西郷隆盛翁と祖父母との御縁	理事	中野揚子	108
さつま隼人にささえられた私の半生	理事	吉津俊子	109
心惹かれる西南の役あれこれ	理事	有村謙一	110
明治10年「西南の役」に見られた人間愛	理事	坂口寛治	111
川尻にある西南の役の足跡	正会員	島田稔	113
曾祖父と木葉の戦い	正会員	島卓郎	113
私と熊本城	前熊本在住宮崎県人会長	川越忠信	114
西郷隆盛とウィリアム・ウィリス	会長	柏木明	115
第37回 西南の役薩軍戦没者段山慰霊祭		記念誌編集部	116
西南戦争一銃器の視点から		記念誌編集部	117
旧細川藩医鳩野宗巴と11名の医師達が向き合った西南の役 ～戊辰の役・横浜軍陣病院での英国医師達との出会いを起点として～		記念誌編集部	119
西郷小兵衛の戦没地碑に纏わる人々について ～妻松子を軸にして～		記念誌編集部	121
熊本協同体主幹崎村常雄について－天性の民主主義者－		記念誌編集部	125

第九章 熊本三州会沿革

熊本三州会沿革	128
現在の熊本三州会の活動	133
第99回までのあゆみ（写真集）	135

第十章 関連団体の紹介

関連団体の紹介	142
---------	-----

第十一章 会員名簿・会則

熊本三州会役員名簿	156
熊本三州会会員名簿	157
熊本三州会会則	158

資料

記念銘碑に刻まれた戦没者名簿	162
第100回慰霊祭参列者	165
記念事業募金趣意書	167
記念事業寄付者名	168

編集後記	169
------	-----

協賛広告

第一章

祝 辞



大西郷像



祝 辞

熊本県知事 蒲 島 郁 夫

西南の役戦没者慰霊祭が記念すべき 100 周年を迎えられましたことを心からお祝い申し上げます。

熊本三州会の皆様におかれましては、大正 5 年に第 1 回招魂祭を挙行されて以来、激動の昭和の時代も毎年絶やすことなく慰霊祭を続けてこられました。1 世紀もの長きにわたり御霊を慰めてこられた皆様の御努力に、深く敬意を表します。

西南の役は、県内各地でも激戦が繰り広げられ、多数の死傷者を出した日本最後の内戦です。その後、日本は近代化の道を歩み、不幸な大戦も経験しましたが、めざましい発展を遂げ、今日の繁栄を築いてきました。日本の歴史、とりわけ日本の近代化に大きな意味を持つといわれる西南の役を後世に伝えていくことは、大変意義深いことです。

県内には、延寿寺や田原坂公園をはじめ、西南の役当時の様子を偲ぶことができる場所が数多くあります。また、西南の役で存在感を示した熊本城や、西南の役の後、明治時代の近代化を支えた「万田坑」「三角西港」など、世界に誇る歴史・文化遺産に溢れています。

県では、「県民一人ひとりが幸せを実感し、住み慣れた地域で夢を持ち誇りに満ちた暮らしが送れる熊本」をめざす取組みの中で、熊本の 100 年後を見据え、熊本の宝である優れた歴史・文化、自然や景観、地下水などを守り、更に磨きをかける取組みを進めています。熊本三州会の皆様におかれては、今後も慰霊祭をとおして、先人達の智恵と努力の結晶を未来に引き継いでいかれることを期待します。

我が国は、東日本大震災からの復興はもとより、日本経済の再生、人口減少問題への対応、更には国・地方を通じた危機的財政状況への対応など、様々な課題に直面しています。特に、地方においては、人口減少問題、地方創生への対応が待ったなしであり、迅速かつ大胆な取組みが求められています。

今年は、蒲島県政 2 期目の最終年であり、総仕上げの年となります。国が進める地方創生の動きを追い風にして、取組みの更なる「加速化」、「成果の見える化」、そして「核心を突く」政策を進め、これまでに種を蒔き、芽が出てきた取組みについて、花を咲かせるようしっかりと取り組んで参りますので、今後とも一層のお力添えを賜りますようお願いいたします。

最後に、熊本三州会のますますの御発展と、会員の皆様の御活躍・御健勝を祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。



祝 辞

鹿児島県知事 伊 藤 祐一郎

熊本三州会が設立 100 周年を迎えられましたことを心からお祝い申し上げます。

また、関係の皆様多数御参集のもと、第 100 回薩軍戦没者慰霊祭が開催されるに当たり、謹んで哀悼の意を表します。

熊本三州会におかれましては、大正 5 年の設立以来、「西南の役薩軍戦没者慰霊碑」の建立をはじめ、薩軍戦没者の慰霊や遺族の皆様による親睦交流など様々な活動が続けられ、特に、毎年 4 月の第 2 日曜日に行われる延寿寺慰霊祭や 11 月 10 日に行われる段山慰霊祭など、西南の役でお亡くなりになった英霊の鎮魂とその功績を顕彰するため、たゆみない活動を続けてこられました。

このたび、100 周年という節目を迎えられましたのも、柏木会長をはじめ、歴代の会長並びに会員の皆様の長年にわたる御尽力のたまものであり、深く敬意を表しますとともに、心から感謝を申し上げます。

本年は、薩摩藩英国留学生がいちき串木野市の羽島港から渡英して 150 年を迎えます。海外渡航という国禁を犯し、生命を賭して異国の地へ渡った若者たちは、明治維新後に教育や外交、実業など様々な分野で活躍し、近代日本の礎を築きました。

そして、3 年後の平成 30 年には明治維新 150 周年の節目を迎えることから、当県では現在、専門家の意見も踏まえながら、新たな史料等の調査、考証に取り組んでおり、当時の人々の生き方について整理・取りまとめを行い、明治維新の意義を改めて考える契機としたいと考えております。

また、明治維新の原動力となった若者のように、次世代の鹿児島の担う青少年を育成するため、鹿児島の教育的風土や伝統を生かして、青少年の自立の精神と豊かな感性のかん養、国際的感覚やふるさとを愛する心の醸成を目的とした「郷土に学び・育む青少年運動」を推進し、知性と豊かな心を兼ね備えた国際人として通用する人材の育成に努めているところです。

島津家中興の祖・島津日新斎忠良の「いろは歌」は、「いにしへの道を聞きても唱へてもわが行ひにせずばかひなし（昔からの立派な教えを聞いても、また口先で唱えても、自分で実行しなければ何の役に立たない。）」に始まり、その教えは後の薩摩独特の気風に大きな影響を与えました。

私としましては、すべての県民が郷土に夢と誇りを持ち、生涯を安心して暮らせるような「力みなぎる・かごしま」、「日本一の暮らし先進県」の実現に向けて、今後とも全力で取り組んでまいりますので、皆様におかれましても、御支援・御協力を賜りますようお願い申し上げます。

終わりに、熊本三州会のますますの御発展と皆様の御健勝・御活躍を心からお祈り申し上げます。



祝 辞

宮崎県知事 河野 俊嗣

西南の役戦没者慰霊祭が100回の節目を迎えられますことを心よりお祝い申し上げます。

西南の役には、宮崎県からも4千人が参加し、多くの若い命が失われたと伺っています。その後、大正5年に先人達によって「西南役薩軍戦没者墓碑」が建立され、第1回の慰霊祭が行われて以来、100年の長きにわたり、終戦時の混乱期にも途絶えることなく、志半ばに倒れたこれらの方々を慰霊いただいております。これもひとえに、歴代会長をはじめ会員の皆様の御尽力の賜であり、深く敬意を表しますとともに、心より感謝申し上げます。

さて、宮崎県は、幾多の先人の御尽力により本県が再配置されて、一昨年で130年を迎えました。県民があらためて地域の宝を見つめ直し、郷土への誇りや愛着を深める機会になったのではないかと考えております。

このような中、本県では、これまでの先人の努力の上に、着実に飛躍の芽が出始めています。

東九州自動車道につきましては整備が着々と進んでおり、今年3月には、宮崎市から福岡県豊前市までが一本の高速道路で結ばれました。これにより、熊本、大分、鹿児島、宮崎の南九州4県を循環する高速道路網が完成し、広域的な波及効果が期待されます。今後は、未整備となっている県南区間や、熊本と延岡を結ぶ九州中央自動車道等の整備が促進され、熊本、鹿児島両県との結びつきがさらに強くなることを期待しております。

また、同じく3月に、3つ目の国際定期航空路線として宮崎－香港線が新設されました。これまでの鹿児島－香港線と合わせて、南九州での周遊性が増し、東アジアとの経済交流、誘客促進に一層弾みがつくものと考えております。

さらに、スポーツキャンプでは、今春から新たにオリックスバファローズが加わりました。プロ野球、Jリーグ、トライアスロン・ラグビー日本代表など、多くのチームが「スポーツランドみやざき」でキャンプを実施していただいております。今後とも、本県のスポーツ環境はもちろんのこと、宮崎牛をはじめとする本県自慢の新鮮な海の幸・山の幸、「宮崎のおもてなし」など、本県の魅力をしっかりと発信してまいります。

本年は、こうした成果を礎に、活力にあふれ、国内外に開かれた「みやざき新時代」を築いていくため、県民の皆様とともに、誰もが安心して暮らすことができ、将来に夢や希望を持てる地域づくりを進めてまいりますので、皆様方の一層の御理解と御協力をよろしくお願いいたします。

終わりに、熊本三州会のますますの御発展並びに皆様のますますの御健勝と御活躍を心からお祈り申し上げます。



祝 辞

熊本市長 大 西 一 史

まず、はじめに、熊本三州会によります西南戦争戦没者慰霊祭が、節目の100回目の開催を迎えられるにあたり、故人を偲び、平和を祈念され祭祀を継続してこられた皆様方のご努力に対しまして、心から敬意を表する次第でございます。

さて、西南戦争は、明治10年に起こった維新の偉人西郷隆盛翁を中心とする薩摩軍と、発足間もない新政府軍が衝突した国内最後の内戦で、日本の近代化の礎を築く産みの苦しきともいえる戦いでした。

薩軍には西郷隆盛翁のほか、鎮西鎮台の司令官を勤めた桐野利秋や篠原国幹など維新の功労者が数多く顔を揃え、新政府側にも、大久保利通内務卿はじめ、熊本鎮台の樺山資紀参謀長や征討軍の黒田清隆参軍など多くの鹿児島出身者が関わっており、既知の間柄であった人達が、立場を異にしての戦いに、辛い思いで臨んだことは想像に難くありません。

ここ熊本では熊本城籠城戦や田原坂の戦い等の激戦が繰り広げられましたが、この戦闘の中、鳩野宗巴など地元の医師らにより敵味方関係なく負傷者の治療・看護が行われたほか、征討軍本営であったジェーンズ邸において、日本赤十字社の前身である博愛社の創設が許可されたこともあり、熊本は、後世に続く人道・博愛主義の先駆の地、そして「日赤発祥の地」ともなりました。

また、薩軍の兵站基地であった川尻では、寺院等が死傷者を収容・看護する野戦病院としての役割を果たし、延寿寺においては戦死者850余名が葬られました。その遺骨の多くは、後に遺族により故郷に帰還されたとのことで、今では安らかにお眠りのことと存じます。

現在、本市は、九州の中央に位置する拠点性や熊本城に象徴される歴史文化、江津湖等の豊かな自然、(仮称)熊本城ホール(MICE施設)整備等による中心市街地の賑わい、バランスのとれた都市環境といった強みを生かしながら、その魅力を国内外にアピールすることで、観光客をはじめとする交流人口の増加に向けた取り組みをすすめているところであります。

特に、この西南戦争に関連する田原坂西南戦争資料館につきましては、平成27年11月のオープンに向けて改築を進めているところであり、西南戦争に関する史料展示のほか、日赤発祥の由来などを発信する、「近代日本の夜明けを学び伝える歴史学習施設」を目指すとともに、西郷隆盛翁をはじめ参戦した将兵、地域の人々など、西南戦争に関わった多くの人々の思いを伝える、恒久平和を願う場にしたと考えております。

そして、今後は、共通の背景である西南戦争をキーワードに、田原坂や川尻、熊本城、ジェーンズ邸などの歴史遺産もストーリー性を持たせ連携させることで、多くの市民や観光客に触れていただき、更に深く理解して頂けるよう顕彰してまいりたいと考えております。

最後に、本慰霊祭を100年間脈々と続けられました会員の皆様方の情熱と真心に対しまして、改めて心から敬意を表しますとともに、皆様方の今後ますますのご健勝を祈念申し上げます。



祝 辞

特定非営利活動法人
西郷隆盛公奉賛会
理事長 西郷 隆文

西南の役薩軍戦没者第100回の慰霊祭が厳かに開催されますことを心よりお祝い申し上げます。

この100年という時の流れを振り返りますと、我が国日本は、政治経済の急激な変動、東日本大震災をはじめとする幾多の自然災害、また、先の大戦では、大都市圏はもちろんのこと、九州も福岡、長崎、鹿児島等、壊滅的な被害を受けました。

しかし、御地熊本は、幸い爆撃をあまり受けずすんだと伺っております。

このことは、西南の役で、西郷軍は、熊本にはずいぶん迷惑をおかけしましたので、同役の戦没者の英霊の皆様によるご加護の賜物であるのではないかと考えております。

また、特に戦時中並びに戦後の復興の際の本慰霊祭の挙行につきましては、「親睦と地域社会への貢献」を趣旨とされている熊本三州会の皆様方の並々ならぬご苦勞とご尽力があったことと拝察申し上げます。

同会が、このように大きく力強く発展して来られましたのも、会員各位の堅い結束と情熱の賜物と深く敬意を表する次第です。

古来、西郷家も熊本の出自であることもあり、悠久の昔から、深い御縁のある土地柄で、歴史や文化につきましても相通ずる部分が多いと思います。

また、熊本の皆様は、かつて西郷軍が西南の役の際に多大なるご迷惑をかけたにも関わらず、鹿児島同様、西郷南洲の信奉者が多く、当奉賛会といたしましても、大変心強く感謝申し上げますの次第です。

当方も四元義隆先生の御縁により推薦をいただき、本慰霊祭に参列させていただくようになりまして久しく、大変感謝申し上げますとともに感慨深いものがございます。

つきましては、今後とも「敬天愛人」の心を大切に、尚一層、貴会との交流を密にさせていただき、相互の親睦を深めさせていただきますとともに郷土の発展に寄与することができれば幸いです。何卒末永く格別のご指導並びにご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

終わりに熊本三州会がこのたびの第100回の慰霊祭を契機に益々飛躍されますとともに会員の皆様方の御健勝、御活躍を心からご祈念申し上げます、お祝いのご挨拶とさせていただきます。

平成27年4月吉日



祝 辞

衆議院議員 木 原 稔

「西南の役戦没者慰霊祭」が記念すべき100回目を迎えられることを心からお慶び申し上げます。

「西南役薩軍戦没者墓碑」の落成式を兼ねて大正5年に延寿寺で開催された慰霊祭が、墓碑の建立者としてその名前が記された「熊本三州会」により、その後一世紀もの長きにわたり、戦時中や戦後の混乱期にも中断することなく、毎年開催されていることに対しまして、深甚なる敬意を表します。

まもなく明治維新から150年が経とうとしている現在、西郷隆盛の存在の大きさを改めて感じます。西郷がいなかったならば、幕末の混乱は長引き、近代国家としての日本の幕開けは遅れたことでしょう。

「南洲翁遺訓」には、「道というものはこの天地のおのずからなるものであり、人はこれにのっとって行うべきものであるから、何よりもまず天を敬うことを目的とすべきである。天は、他人も自分も平等に愛したもうから、自分を愛する心をもって人を愛することが肝要である。」と人生の教えが記されており、ここからは、西郷の広い心を読み取ることができま。す。「敬天愛人」をはじめとする西郷の精神は、西郷を慕う西南の役の戦士にも広く行き渡っていたことと思います。

熊本三州会は、慰霊祭の挙行などを通じ、西郷の叡智、勇気、人柄と「敬天愛人」の精神を伝え、他の寺が埋葬地の提供を拒む中で薩軍戦没者を手厚く埋葬した延寿寺の住職伝弘応師の毅然とした態度を語り継いで来られました。昨今、過疎化や少子高齢化などの影響により、地域社会におけるコミュニティの衰退や人間関係の希薄化が問題とされておりますが、貴会の活動のおかげをもちまして、当地においては、地域の絆や、郷土とその歴史を愛する心が脈々と受け継がれているものと誠にありがたく存じております。

今後も、この貴重な活動を長く続けられ、これまでの積み重ねの上に、より一層大きな役割を果たされることを、さらには、貴会の活動だけでなく、皆様が現在活動に注いでいる情熱や真心も、世代を超えて引き継がれていくことを期待しております。

また、貴会には、平素より私の活動にもお力添えをいただき、深く感謝しております。私は、かねてより「子供たちが郷土愛と人間道徳を育む仕組み作り」を政治理念の1つとして掲げており、今後も国政の場で理念の実現に向けて邁進する所存ですので、引き続き皆様の御指導、御鞭撻をいただきますよう、お願い申し上げます。

最後に、熊本三州会の益々の御発展と皆様の一層の御活躍、御健勝をお祈り申し上げ、私の祝辞とさせていただきます。



祝 第100回慰霊祭

西南の役従軍者遺族会会長
公益法人 西郷南洲顕彰会理事長
桂 久 昭

大正五年九月九日付の鹿児島新聞（現南日本新聞）に次の記事が掲載されています。

「丁丑役戦死遺骨」大正五年九月九日 熊本より到着し本日南洲祠堂に改葬

明治丁丑役に於ける薩軍の将士にして熊本県御船町、健軍町等にて戦死せる遺骨は在熊三県出身会委員西元清氏擁護の下に八日午前十一時八分の鹿児島駅着汽車にて着鹿南洲祠堂委員其他関係者諸氏の出迎を受け白布を以て包める二個の納骨箱は同駅より直に二台の人力車に移し南洲祠堂事務所へ送致されたるが同事務所にては同霊地域内にある合葬墓に合葬する筈にて同日は午後より岩切神官を請じて合葬墓へ報告を為し更に九日午前より岩切神官を請し愈々合葬墓へ改葬さるる筈なり。其当日、改葬さるべき戦死者諸氏出身地氏名は、次の如し。（出身地、氏名省略）

尚、前記遺骸の鹿児島駅着の際には來鹿中の在熊三県人会委員長新納三十郎憲兵少佐を始め島津隼彦男、山本南洲祠堂委員長以下、河野、永井、永田、桐野の各委員其他諸氏は遺骸に対し夫々拝礼を行いたり。（以上鹿児島新聞記事から）

熊本三州会によって集められた、植木（39名）、御船（3名）、今塚（1名）で戦死された43名の遺骨は、それまで南洲墓地にあった田原、高瀬、御船、川尻、保田窪、城山などで戦死された241名の仲間と同じ合葬墓に40年ぶりに眠ることができました。

それから100年、今年で熊本三州会が100周年慰霊祭を迎えられますことを心より御祝い申し上げます。

その後、熊本三州会では段山の慰霊碑、西郷小兵衛戦死の地碑、玉東町の西南の役薩軍戦没勇士の墓などの建立・慰霊祭等々、西南の役戦歿者の慰霊顕彰の事業を行っていただきました。また最近では西合志、坂本などの無縁墓についての情報を知らせていただいて御遺骨を平成13年に南洲神社境内に建立した慰霊碑に納めることができました。いずれも熊本三州会のおかげでございます。

また、延壽寺に「西南の役薩軍戦没者墓碑」を建立して第1回の慰霊祭を大正5年4月3日に挙行、以来、太平洋戦争中も、戦後の混乱期も休むことなく慰霊祭を執り行われ、今年で100回を迎えられましたことに敬意を表しますと共に感謝申し上げます。

なお、第100回記念事業として銘碑を建立していただきましたが、遺族が延壽寺にお詣りすることが更に多くなり、有難いこととございます。厚くお礼申し上げます。

最後に次の100年に向けて熊本三州会の益々のご発展と、会員皆様のご健勝とご活躍をお祈り申し上げましてお礼とお祝いの言葉と致します。



祝 辞

公益財団法人 荘内南洲会
理事長 水野貞吉

第100回『西南の役薩軍戦没者慰霊祭』並びに『記念懇親会』の挙行、誠にありがとうございます。

荘内南洲会会員共々、衷心よりお祝い申し上げます。

大正5年から一世紀にも及び慰霊祭を挙行されておられる熊本三州会会員並びに関係者の皆様に、まずもって深甚なる敬意を表します。

荘内南洲会では、例年『西郷先生の遺徳を訪ねる旅』として鹿児島南洲神社の正式参拝を行って参りました。今年は2月28日に参拝させて頂きましたが30回目の節目の年でありました。

平成20年2月実施の遺徳を訪ねる旅では、貴熊本三州会のご配慮をいただき、100回目慰霊祭の挙行される川尻延寿寺を訪問、参拝させて頂いております。

その際、ご住職様から800余年連綿として続いてきた延寿寺の由来、西南の役当時の傳弘ご住職様の偉業についてご講話いただいております。

そして、戦死者、戦傷没者の供養、埋葬された諸士の場所・月日・姓名等の記された過去帳をお見せいただきました。

ご住職の講話をお聞きしながら、そして『西南の役薩軍戦没者墓碑』等を参拝しながら当時を偲ばせていただきました。

西南の役には、荘内藩士の二青年が参戦しております。

鹿児島南洲墓地の西郷南洲翁墓碑のすぐ前に、二青年の墓碑があります。伴兼之と榊原政治であります。

伴兼之は熊本・植木を転戦し田原坂の激戦で戦死し、榊原政治は重傷を負い延岡の病院で若い生涯を閉じております。

遡れば、戊辰元年『鳥羽伏見の戦い』を発端とする戊辰戦争が繰り広げられました。

新潟長岡藩の降伏、福島会津藩の降伏に続き9月には荘内藩の帰順降伏となりました。

荘内藩は官軍に激しく抵抗した為、厳しい敗戦の処置を覚悟しておりましたが、西郷南洲翁の公明正大な極めて寛大な処分になりました。

この西郷南洲翁の大徳に感じ、明治3年から8年にかけて旧藩主・藩士が鹿児島に赴き教をいただいております。

明治22年の帝国憲法発布時に、明治天皇が西郷南洲翁の賊名を解かれ、正三位を贈位されております。

旧藩主・藩士は大喜びすると共にその教を纏めた『南洲翁遺訓』を編纂刊行したのであります。

『南洲翁遺訓』は明治23年1月に完成し、旧藩士達によって全国頒布されております。

西郷南洲翁の天地自然の道として実践された『敬天愛人の精神』、『南洲翁遺訓』を全国の多くの方々から学んでいただき、より良い社会、人づくりに向け邁進して参りたいと考えております。

今後共、ご指導ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

最後に、西南の役で戦病死された先人のご冥福を心からお祈り申し上げます。



祝 辞

熊本在住鹿児島県人会
会 長 池 満 淵

熊本三州会が、このたび熊本市川尻の延寿寺において、西南の役薩軍戦没者第100回慰霊祭を盛大に実施されましたことを心よりお祝い申し上げます。熊本三州会におかれましては、大正5年に延寿寺境内に西南の役薩軍戦没者墓碑を建立以来、先の大戦など時代の混乱期にも中断することなく毎年慰霊祭を実施してこられました。このほか、熊本市段山においても昭和52年に薩軍戦没者慰霊塔を建立し、慰霊祭を毎年実施してこられるとともに、山鹿口、田原坂、南州神社（鹿児島市）における慰霊祭など熊本県内外の西南の役関連行事にも代表者を派遣してこられました。更に、このたびは、薩軍戦没者で延寿寺に埋葬された方々の銘碑も延寿寺境内に建立されました。慰霊祭や銘碑建立は、西南の役において、時勢を憂えて決起し、志半ばで戦陣に散っていかれた先人達の御霊安かれと祈るとともに、その志を後世に伝えて行くうえで大変意義深いことと存じます。また、熊本三州会におかれては、これまで周年記念誌・小冊子の出版、講演会の実施などにより、西南の役に対する啓発や西郷南州翁の「敬天愛人」の精神の伝承にも努め、成果を挙げてこられました。私どもは、こうした熊本三州会の長年に亘る真摯なご活動に深く敬意を表する次第でございます。また、延寿寺においての慰霊祭には地元町内の代表の方々が参列され、山門近くでは戸毎に国旗を掲げておられるなど、地域住民の皆様の格別の追悼の意にはいつも感銘を受けておりますことを申し添えます。

今年は、先の大戦から70年目の節目の年であります。我が国の平和国家としての今日の繁栄は、西南の役やその後の第二次大戦に至るまでの数次の戦争における先人達の尊い多くの犠牲の上にあることを忘れてはならず、二度と戦争はしないという固い決意が必要であるとの思いを強くしている次第です。戦争記憶が年々遠のいて行く中、戦争の実情、先人の志を後世に伝えて行く活動の必要性は益々高まって行くものと存じます。これからも熊本三州会が次代を担う若者たちへとしっかりと引き継がれ、慰霊祭が150回、200回へと更に続いて行くことを祈念申し上げ、お祝いのことばといたします。



祝 辞

熊本在住宮崎県人会
会 長 二 見 郁 男

西南の役戦没者慰霊祭 100 周年記念にあたり、在熊宮崎県人会を代表致しまして、慰霊祭の御盛会を心よりお祝い申し上げるとともに、戦没者の方々のご冥福を、慎んでお祈り申し上げます。

多くの困難を克服し、人道博愛の精神により 100 年もの永きにわたり、慰霊祭を営々と継続して頂きました事に対し、延寿寺様はじめ先輩諸氏に、深甚の敬意を表する次第であります。

また、慰霊祭にあたり、町内の皆様方が、国旗を掲げ、敬意を表して頂いている事に感謝し、そして、感動するところであります。

この度の 100 周を記念して、戦没者全員の氏名を刻した立派な記念碑もできました。今後は、この記念碑が、三州会会員のみならず、ご遺族の方々も多数お参り頂けることに繋がるのではと思います。

私も、日頃は、のんびりとした生活をしておりますが、この慰霊祭や、熊本城や田原坂に参りますと、西郷隆盛翁率いる薩軍と官軍が、それぞれの信念と使命に従い、ここ熊本の地において、命を懸けて戦ったことに思いを馳せ、老骨ながら、熱きものを感じます。

話は、かなり遡りますが、私が子供の頃、郷里の都城には、宮崎交通のバスと市営バスと三州バスが走っておりました。親父に「三州とは何か」と尋ねたところ、「日向、薩摩、大隅のことだ。西郷隆盛と言う偉い人が居て、近代日本を造り、日露戦争にも勝つほどの一等国になったんだ…等々」と聴かされました。これが、私が三州の事を、初めて知った時でした。この時より、もっと以前から慰霊祭が行われていたわけですから、あらためて先輩諸氏のご尽力に敬服する次第です。

最近では、県人会に加入する人も少ない傾向にありますが、この歴史ある慰霊祭を三州会活動の支柱としながら今後も末永く三州会が継続発展できます様、私も皆様と共に、微力ながら努力したいと思います。

最後ではありますが、重ねて三州会の発展と皆様のご健勝、ご発展を記念して、お祝いの言葉と致します。

第二章

第100回慰霊祭

第100回慰霊祭記念事業実行委員会

委員長 柏木 明 事務局長 瀬戸口章三 会計 樋口信夫

事業部会名	事業内容	部会長	副部会長	部会委員	
総務	来賓企画 募金活動企画 記念誌広告企画 記念銘碑建立	竹内義雄	崎元達郎	米丸義行 杉本統美 亀田輝也 濱田善記	木村良子 脇田五典 梅北兼弘
記念誌編集	記念誌発行企画	崎元達郎	脇田五典	坂口寛治 二見郁男 鬼崎行男	中野揚子 柴田章子 瀬戸口章三
慰霊祭	慰霊祭企画	脇田五典	崎元達郎	寺地靖一 山中省桂	木通啓子
総会・祝宴	式典企画 懇親会企画	米丸義行 (瀬戸口章三)	梅北兼弘	是枝仁盛 後藤祐力 倉重	満岡泰子 吉津俊子
交流事業	史跡めぐり 旅行企画 記念ゴルフ大会	梅北兼弘	竹内義雄	有村謙一 黒木三治 後藤俊	徳留和憲



延寿寺本堂

第 100 回慰霊祭報告

1) 経過報告

平成 27 年 4 月 19 日（日）午前 9:30～11:00 延寿寺（熊本市南区川尻町 5-5-1）において、西南の役薩軍戦没者銘碑の除幕式と第 100 回慰霊祭を実施した。銘碑は、後の事業報告で詳述するように 100 周年事業最大の事業としてすでに 3 月に完成を見ていたものである。

戦没者の感涙であったか、夜来の雨も、開会に合わせてびたりと止み、町内の方々の 100 年続く奉仕をいただき、参道にはためく日の丸の旗のもと、西郷南洲翁の写真・供花・供果に飾られた碑前・熊本三州会第 100 回慰霊祭の旗も高々と来賓・遺族・町内の方々、三州会会員 230 名（参列者は資料参照）の参加を得て、慰霊祭次第のすべてが滞りなく肅然と執り行われました。戦中、戦後の混乱の中も、熊本三州会の先人の至誠・遺徳が受け継がれ 100 回に至ったことに、深い感銘と感慨をおぼえるものであった。

2) 西南の役薩軍戦没者銘碑除幕式

平成 27 年 4 月 19 日（日）午前 9 時 30 分より延寿寺境内銘碑前で、1、竹内副会長の開会の辞 1、柏木会長の挨拶 1、司会者有村理事による除幕者ご氏名読み上げ 1、除幕 1、司会者による除幕式終了の言葉どおり遺族の方々をはじめ多数の参列者が肅然と見守る中、滞りなく執り行われました。

碑面には、

熊本三州会の先人達により 大正 5 年墓碑が建立され、春風秋雨、国の行く末を案じ乍らも、雄國空しく異境の地に戦い倒れた勇士達の非運を悼み、その苦難の途を忍び 年毎に欠くる事なく行われた慰霊祭は、本年第 100 回を迎えた。之を記念に 当初此処延寿寺の寺域に眠り 850 余柱に 满腔の至情を捧げ、その名を刻み 後世に伝え 御霊の永遠に安らかならん事を祈って銘碑を建立する。

春巡り延寿の庭に眠りて
夜毎夢見む 故郷の山

平成 27 年 4 月 19 日
熊本三州会

と会長の碑文が刻されている。

除幕は 柏木明会長、西郷隆文西郷隆盛公奉賛会理事、桂久昭西南の役 従軍者遺族会々長、木村仁（元）参議院議員、番匠幸一郎陸上自衛隊西部方面総監、蔵原恒海延壽寺住職、西郷恵一郎（前）熊本三州会々長 中村亮一 川尻校区自治会連合会々長 竹内義雄熊本三州会副会長、瀬戸口章三熊本三州会事務局長の 10 氏によって執り行われました。

第100回慰霊祭の記念事業として 柏木会長の強い意志により、企画推進され会員の総意を以て建立の運びとなった。

会長をはじめ会員、遺族の方々、西南の役或いは薩摩、大隅、日向の三州に係わる多くの方々から、多額の寄付が寄せられ、竹内副会長（竹内工務店会長）の設計、施行、管理により、形容、品格に秀れ、瀬戸口事務局長の多方面の資料から数ヶ月に及ぶ 戦没者氏名の労多き確認作業を至て、鮮明に刻字された銘碑が墓碑に寄り添って建立されている。

3) 慰霊祭次第

- 1、開会の辞 会長代行・副会長 崎元達郎
- 1、国家斉唱
- 1、黙祷
- 1、導師入場
- 1、読経
- 1、会長祭司 会長 柏木 明
- 1、薩摩琵琶 奉納 薩摩琵琶龍洋会 山下 剛 様
- 1、追悼の言葉
鹿児島県副知事 布袋嘉之 様
宮崎県副知事 稲用博美 様
熊本県知事公室室長 田嶋 徹 様
- 1、焼香（読経）
- 1、感謝状贈呈 延寿寺住職 蔵原恒海 様
- 1、遺族代表 挨拶 西郷隆盛公奉賛会 理事長 西郷隆文 様
- 1、閉会の辞 副会長 脇田五典

4) 会長祭詞

新緑の葉桜が、清々しい春風に揺れる本日、ご遺族初めご来賓他多くの方々をお迎えして、西南の役、薩軍戦没者慰霊祭を挙げるに当たり、墓前に額付き謹んで慰霊の詞を捧げます。

此処、延寿寺に熊本三州会の先人達により、大正5年墓碑が建立され、兩来その志を受け継ぎ、毎年欠くる事なく行われた慰霊祭は本年記念すべき第百回を迎え、遠路各地より縁ある方々相集い戦いの苦難の道程を偲んで居ります。

省みますと今を去る138年前の明治10年2月より、熊本城そして田原坂を初め此処熊本の各地に於いて、薩摩、大隅、日向、三州出身の方々が、敵味方に分かれて骨肉相喰む熾烈な戦いが繰り返されました。その鮮烈な戦いの有様は忘れ去られる事なく数々の物語として、語り継がれております。

今、墓碑の前に立ちます時、烈しい銃弾の行き交う中、降り続く雨に袖を絞り、霞む陣屋の月に故郷を想い、或時は桜吹雪の中、薩摩緋の若者達が、示現流の白刃を翳し阿蘇の野山を跋涉されたお姿が、彷彿として目に浮かびます。

薩軍の一番隊長篠原国幹も倒れた田原坂に連なる吉次峠の激戦を熊本隊の佐々友房は、その著戦袍日記に、記しました。

吾見ずや 吉次の峠は城よりも峻なり 一朝警を伝え 笑いの相待たば
忽ち聞ゆ 千軍万馬の声 硝烟雲となり 丸雨となる 壮士の一命 鴻毛より軽し
呐喊の声 巨砲に和して響き 山叫び谷吼え 乾坤重く
砲声絶ゆる処 松風寂し 一輪の皎月 陣營を照らす

と政府軍の猛攻を退けた味方将兵の奮戦高揚ぶりを格調高く詩い上げております。また、阿蘇立野の一角に建てられた薩軍故山恋哭碑に「大阿蘇の山懐に眠れども すずろ恋しき桜島山」と刻まれたこの句は、肥後の野末に散った三州の方々への挽歌でありその心情に思いを馳せる時、万斛の涙なくしては誦することができません。

この戦いで両軍共に憂国の春秋に富む蓋世の人材を多く失ったことは、我国とりましても誠に惜しむべきことであります。

当時川尻には薩軍の本営が置かれ兵站基地となっており、住民の方々には多大なご迷惑をお掛けした処であります。後難を恐れ逡巡する中に在って、此処延寿寺の第三十代住職伝弘心和尚は、これらの戦いで倒れた薩軍の埋葬地を提供され死傷した、月 日、場所、姓名を記録して丁重に埋葬その数 850 余柱に及んだと記録されております。

その後、今日迄 延寿寺歴代御住職のご高配により、墓は立派に守られており、地元では町内会長さん始め皆様にも毎回慰霊祭にご参加頂き又戸毎に国旗を掲げ格別の追悼の意を表し頂いておりますことに心より感謝申し上げている処であります。

此処に眠る皆様方々と運命を共にして故山岩崎谷に散った西郷南洲翁は、敬天愛人を信条に広く内外に通じ、その先見性は夙に知られておりますが、翁が体得実践された知行合一の生涯は、混沌たる現世に於て、私共の貴重な行動の指針とすべきではないかと思ひます。

この度、第百回の慰霊祭に当り、『先人達が墓碑を建立し、100年に亘り年毎に続けて来られた回向に深い敬意と感動を覚えると共に、その志を受け継ぎ後世に伝えるべく当初此処延寿の寺域に眠られた皆様のご尊名を碑に刻み墓前に建立、満腔の至情を捧げるものであります』

国を憂え乍らも志成らず異郷に散った皆様の御霊の永遠に安らかならん事を心よりお祈りして祭詞と致します。

平成 27 年 4 月 19 日
熊本三州会 会長 柏 木 明

5) 慰霊祭 終了後の催し

町内の方々に参加いただき、居合を鑑賞し、音楽演奏を楽しみ、憩いの時を過ごしました。演奏終了後、長年にわたって毎年演奏していただいた陸上自衛隊西部方面音楽隊に対して熊本三州会柏木会長より、感謝状を贈呈し、感謝の意を表しました。

居合道奉納 居合道教士 7 段 上村博隆 様

演奏 陸上自衛隊西部方面音楽隊

曲目：田原坂、ひえつき節、鹿児島おはら節、サンバおてもやん 他

6) 新聞記事

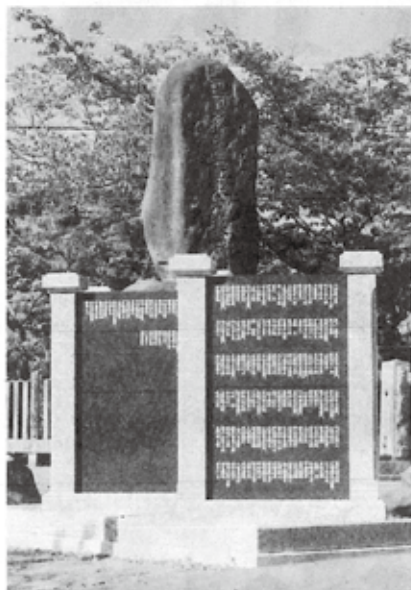
慰霊祭後、報道された新聞記事2件を掲載する。

5/4

熊本北 2015年(平成27年)5月4日(月曜日)

(第3種郵便物認可)

薩軍戦没者の名刻む碑



西南戦争(1877年)の薩軍戦没者850人余が埋葬された熊本市南区川尻5の天台宗延寿寺境内に、埋葬者の名前を刻んだ石碑が建てられた。1916年(大正5年)から途切れずに続いている慰霊祭が今年100回目を迎えたのを記念し、旧薩摩藩領出身の県在住者らでつくる熊本三州会が建立。慰霊祭に合わせて除幕した。
(丸茂克浩)

石碑は黒御影石で造り、
・86㎝、厚さ13・9㎝。事
土台は白御影石製。びょう
業費約350万円は九州内
ぶのように折れ曲がった形
の個人や企業・団体から浄
財を募った。昨年6月に基

慰霊祭100回目を記念 熊本・延寿寺に建立

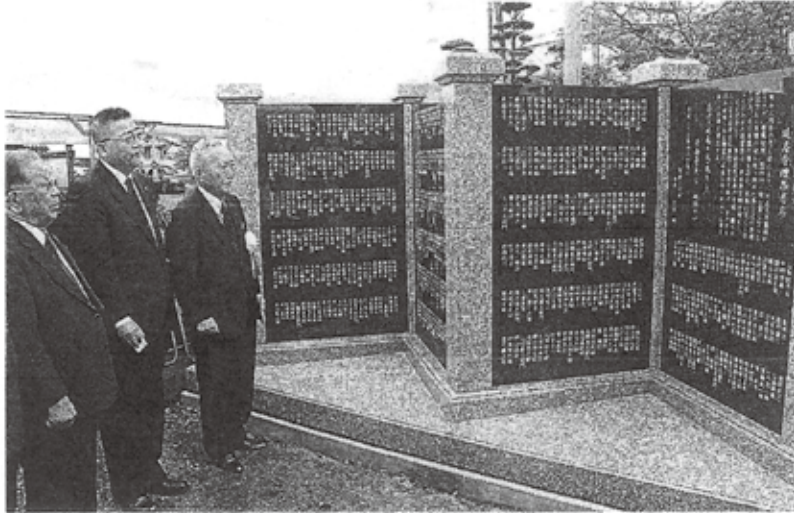
▲ 墓碑(中央奥)のそばに建てられた埋葬者の石碑

礎工事を始め、同年12月、境内にある薩軍戦没者墓碑(1916年建立)のそばに完成した。
名前が刻まれたのは828人。延寿寺に残る埋葬者名簿をもとに、熊本、鹿児島両県の様々な記録と照合して確認が取れた分という。同会の瀬戸口章三事務局長(74)によると、100人以上の名前が名簿と記録で完全に一致しなかったが、鹿児島市に住む西南の役従軍者遺族会の桂久昭会長(84)に連絡を取り、西郷隆盛ら薩軍将兵が眠る同市の南洲墓地で墓碑を調べてもらうなどして確定した。

延寿の庭に眠りいて 夜毎
夢見む 故郷の山「も刻ま
れ、除幕されると涙を流す
遺族もいた。鹿児島、宮崎
両県の副知事と熊本県の知
事公室長がそれぞれ追悼の
言葉を述べ、西郷のひ孫の
陶芸家、西郷隆文さん(87)
(鹿児島県日置市)があい
さつした。
西郷の盟友だった薩摩藩
家老、桂久武のひ孫でもあ
る遺族会の桂会長は「食べ
るだけで精いっぱいだった
戦時中や戦後間もない時期
も欠かさず、慰霊祭を10
0年も続けてこられたこと
に敬意を表す。立派な碑
もでき、感謝の思い以外な
い。延寿寺の歴代主任職と、
慰霊祭の日に国旗を掲げて
くれる近隣の家々のお気持
ちもありがたいと話した。
延寿寺は、熊本城を攻め
た薩軍が最初に本営を置い
た場所。薩軍戦没者の遺骨
の多くは西南戦争後、遺族
によって郷里に改葬され
た。

読売新聞 平成27年5月4日

薩摩軍の戦没者を刻んだ銘碑を見つめる西郷隆文さん
(左から2人目)ら＝熊本市南区



西南戦争 100回目の慰霊祭

南区・延寿寺 戦没者の銘碑披露

西南戦争で戦死した薩摩軍の兵士をしるべき100回目の慰霊祭が19日、熊本市南区川尻の延寿寺であり、戦没者828人の名を刻んだ銘碑が披露された。鹿兒島、宮崎出身者でつくる熊本三州会(柏木明会長)が、毎年開いてきた慰霊祭の節目を記念して建立した。

1877(明治10)年の西南戦争で、薩摩の野戦病院となった延寿寺には、853人が埋葬された。熊本三州会は墓碑が建立された1916(大正5)年から慰霊祭を開催。新たに建てた銘碑には、判明している戦没者名を記した。

元住民ら約130人が参列。西郷隆盛のひ孫で陶芸家の西郷隆文さん(67)＝鹿兒島県日置市＝が、「過去を謙虚に振り返り、平和で豊かな日本を次世代に引き継ぐことが、犠牲となった先人に報いることとなる」と述べた。

(後藤仁孝)

慰霊祭には遺族や地

第三章

記念事業報告



延寿寺正門

記念懇親会

会長代行・副会長 崎 元 達 郎

4月19日、延寿寺にて、記名銘碑除幕式に次いで慰霊祭が厳粛なる中に挙行された。

その後会場を熊本市中央区城東町に位置するホテルキャッスルのクリスタルホールに移して、記念懇親会を開催した。

会は、西村直子（民謡歌手）さんの司会で始まり、竹内副会長の開会の辞に続き、まず、山下剛氏（薩摩琵琶龍洋会）と上村博孝氏（居合道教士7段）に、柏木会長から、表彰状と記念品が贈られた。

次に、会長挨拶があり、蒲島郁夫県知事と番匠幸一郎西部方面総監から、来賓祝辞をいただいた。

その後、崎元啓子さん（崎元会長代行・副会長夫人）の歌曲披露が、後藤百合さんのピアノ伴奏のもとであった。初めての朝、庭の千草、初恋、カッチーニのアヴェマリアの4曲であったが、格調高く、ホールに響き、聴きいる全ての人を魅了した。

そして、木村仁先生（元参議院議員）の乾杯の音頭で宴に入った。その後、司会による祝電披露、脇田副会長による来賓紹介があった。アトラクションとしては、藤間富士斎社中の日本舞踊と藤川いずみさんの琴の演奏があったが、牛深ハイヤ踊りのころには、宴も最高潮で、知事、総監、会長もステージで、一緒に踊る姿が見られた。さらに、その後、山之上哲郎氏（陸上自衛隊第8師団団長）と桂久昭氏（西南の役従軍遺族会会長）のテーブルスピーチがあり、梅北副会長の閉会の辞で15時頃お開きとなった。



記念銘碑建立計画に携わって

理事・事務局長 瀬戸口 章 三

薩軍戦没者第100回慰霊祭を記念して延寿寺に銘碑の建立が計画され銘碑に刻む戦没者の名前の確認作業を依頼され実施致しました。

先ず初めに総務部会の竹内副会長と2人で、延寿寺に保管されている過去帳（以下原簿と言う）と川尻町史に記載されている820数名の照合作業を蔵原ご住職立会いの下行なった結果、このままでは銘碑に名前を刻む事が出来ない状態でした。

その理由は次の様な事です。

1. 明治10年、延寿寺に埋葬された戦没者は永年853名と聞いてきた。
2. 原簿に記載されている戦没者数は名前不詳を含め829名であった。その後、鹿児島より遺族の方が延寿寺を訪問され延寿寺に埋葬されたとの報告が有り、現ご住職が原簿に5名の名前を追加記入されたが2名の方は既に原簿に名前が記載されており実質3名の追加と成ったので、現在の原簿総数は832名が記載されている。
3. 原簿と川尻町史の照合では姓名違い、読み方は一緒でも漢字の違いが80数名判明した。また川尻町史に記入漏れが10名判明した。
4. 原簿記載のうち、姓不詳1名、名前不詳2名、姓名不詳11名、合計14名。調査の状況を鹿児島の遺族会会長、桂久昭様に相談、その結果会長所持の熊本県立図書館蔵戦没者名簿、南洲神社保管戦没者名簿、薩南血涙史等を送付して頂き約3ヶ月を要して再度全員の名前の照合作業を実施、更に桂会長より変更者一覧表を作成送付していただき、送付名簿全てを参考にして名簿を作成した。

主な内容は下記の通り。

1. 姓の変更…本通は木通、岩功は岩切、津田は津曲、伊知地は伊地知、脇部は服部など原簿より19名、姓の変更をした。
2. 延寿寺原簿の姓名不詳のうち、姓のみ記入の方2名の正式名前が判明した。
3. 鹿児島の南洲墓地にある墓（延寿寺に明治10年埋葬者）のうち遺族が建立した個人墓はその墓碑銘を優先した、墓碑銘優先者は33名となった。
4. 読みは一緒でも漢字の違いは原簿を優先した。ただ熊本県立図書館蔵の名簿には死亡日時、死亡場所、所属部隊、階級、出身地、年齢が詳細に記入された人もいるとの事で、延寿寺原簿と異なる人は桂会長の判断で県立図書館の漢字に変更した。
5. 5～6名の方については桂会長が市町村史と照合、確認された。
6. 上記の様な調査の結果、延寿寺名簿の姓名変更者は（漢字の違いも含む）総員102名となった。

全員の名前の照合作業が終り、桂会長の了解を得て作業が終了しました。

銘碑に刻まれる名前は、田原坂、鹿児島南洲墓地に既に刻まれている戦没者名と重複する方もおられる訳ですが、一部のお名前に相違があるかも知れません。

一世紀前より埋葬者853名と言われ、蔵原ご住職も確信されておりますが、最終的に銘碑に刻む戦没者総数は828名と成りました。

当時の名前は西郷隆盛翁が幼少の頃小吉、通称吉之介、吉兵衛、六助、吉之助、また奄美大島では菊池源吾と呼ばれたように、戦死者の中にも二通りの名前を持った方がいたのではないかと調査しながら思った次第です。

今回の建立計画に対し、石材業者の選定、交渉と、また詳細に渡り何回も打ち合わせされ最後まで責任を持って建立に携われた竹内副会長、名簿照合の為、資料を提供して下さいました桂会長に心より感謝申し上げます。

熊本協同隊主幹崎村常雄の墓 修復

理事 坂口 寛治

崎村常雄 1846（弘化3） - 1877（明治10）年行年31歳 時習館に学ぶ
熊本協同隊長と名乗らず「主幹」を押し通した崎村宣言を今から138年前に高々と宣言した人である。官軍に降伏して後懲役刑を受け大分監獄 に収監され、獄中で肺を病みて死す。時は明治10年8月17日。



修復前の状態

その人の墓石が今や無縁墓（桜ヶ丘病院「熊本市北区池田町3丁目53」近くの富尾山墓地の藪にあり）となり倒壊して一部土中に埋もれていることを、今は亡き田原坂顕彰会 副会長中村稲男さんに案内されて、知ったのは平成8年4月7日の事でした。今から19年前のこと。その折副会長の中村さんが云われました。「坂口さん 何とか熊本三州会の会員だとも聞いています

が、改修に力を貸してもらえませんか。このままでいいはずはない」託されたことが何時も心にありました。

その後意識的に熊本協同隊の戦記を読み、崎村常雄を深く敬慕し、墓の修復を念じながらも歳月は徒に流れ入っていった。

この度熊本三州会100周年慰霊祭を迎えるに当たり熊本県玉名市永徳寺平にある西郷小兵衛戦死の碑の整備が話題になり出向いた折に、碑が木板から石碑に建て替わったこと。西南の役六十周年に因んだ行事で、西郷小兵衛の命日に熊本三州会と地元民の手でなされた。更に同じく薩軍一番大隊長篠原国幹の戦没の地碑も彼の命日の日付で西南の役六十周年を記念してして熊本三州会で建立されていることを知った。



修復された墓

であるならば、薩軍に加担した党薩隊の一つ、熊本協同隊主幹の墓をかかると知った上は上記の通り立派な武人をこれ以上熊本三州会として放置出来ないと思い、同会100周年慰霊祭の為に会長・副会長を軸とした役員会に趣意書を何度も提出し・説明をさせていただき記念行事の一つとして工事を認めることを承認を頂いた。

右上の写真の如く、平成27年2月27日に改修工事がなされたことを報告する。



西南の役、熊本市内史跡巡り

副会長 梅 北 兼 弘

慰霊祭 100 周年記念行事の一環として、4 月 22 日に、日帰りで史跡巡りを実施致しました。午前には、田原坂、七本薩軍墓地及び同官軍墓地を、午後には、熊本城、花岡山の薩軍砲台跡、官軍墓地等に行き参りました。

当初、予定しておりました県外の方々の参加が無く、熊本の会員だけの少人数での史跡巡りでしたので、ほとんどの方が、田原坂や熊本城には、過去に行かれたことが有る方ではありますが、他の所は、初めての所、あるいは、かなり以前に行った所等々もあり、新たな発見や懐かしさで、有意義な 1 日を過ごす事ができました。

田原坂のガイドの方の話によりますと、山口県や福島県からの見学者と三州・熊本県の見学者では、見学所感に、かなりの差があるとのことでした。

また、感心したことは、鹿児島県の小・中学校から、年に、40～50 校の見学があること、そして、子供達が、慰霊塔の前で一礼し、静粛に説明を聴いているとお話があったことです。

私のような高齢者は、ややもすると、つい、「最近のワケモンは、困ったもんだ……」などと言いがちですが、ガイドさんの話をお聴きして、やや、大げさにはなりますが、このような子供達や先生方が居られるならば「日本の将来は、大丈夫だろう」と、爽やかな気持ちになりました。天候にも恵まれ、少人数ではありましたが、史跡巡りを実施して良かったと思っただ次第です。



懇親ゴルフ

理事 黒木 三治

「西南の役第100回慰霊祭」行事に併せて、「懇親ゴルフ」を去る4月20日に、チサンカントリークラブ御船にて行いました。

不安定な天候が続く中、雨天のゴルフを覚悟しておりましたが、予想に反して、足場は悪い状態ながらも曇りベースで行うことができました。

参加者は、熊本三州会会員の他、在熊鹿児島県人会（錦江会）会員等の皆様の参加を得て、何とかコンペに見合う5組・19名（年齢50代～80代・女性1名）の開催となりました。

午前9時40分、崎元会長代行の開会挨拶と幹事によるルール説明、集合写真撮影の後OUT 1番ホールティーグラウンドにて、会長代行と紅一点の木山富子様始球式でコンペを開始しました。

チサンコースは、自然との調和が取れたフラットな18ホールズですが、前日来の雨で足場が悪く、またキャディーなしのためグリーンでのパターがむつかしい状況でしたが、各組コース経験者の適切なアドバイスに助けられ、各組共和気合い合いで、それぞれのレベルに応じ楽しみ優先でプレーされておられました。中には、年齢差を感じない程、元気に、清々しいプレーを發揮した人もおられました。

プレーを終了した組毎に懇親の後、全員集合して表彰パーティ開始。クラブからの商品提供があり、飛び賞・努力賞を追加。優勝・準優勝・3位・7位・ブービー賞・ベストグロ賞・ニアピン賞、追加の飛び賞・努力賞の順で表彰しました。ニアピン賞の中でも、OUT 8番ホールは、距離のあるホールのためかワンオン者は、一人だけでした。

最後に、優勝者の長尾東市様のスピーチ・会長代行の御礼の挨拶で懇親ゴルフコンペを終了しました。

皆様、ご協力頂きありがとうございました。



記念誌の刊行

会長代行・副会長 崎 元 達 郎

記念事業の一つとして記念誌を編纂することとし、鬼崎行男、坂口寛治（編集長）、崎元達郎（部会長）、柴田章子、中野揚子、二見郁夫、脇田五典（副部会長）が部会委員に選出された（平成24年4月8日総会）。

平成24年7月の第1回会議から、平成27年9月末の発刊まで17回の会議を実施し、3年強を費やして完成した。第13部会より瀬戸口章三理事・事務局長が委員に加わる。部会の取り組みの概要を下に記す。

○第1回部会（平成24年7月3日、放送大学熊本学習センター講義室）

- ・編集基本方針、記念誌の体裁、仕事の内容と分担、スケジュール等について意見交換。編集基本方針を以下とする。

「第100回の慰霊祭を基軸に、世界の偉人西郷隆盛翁の叡知と勇気と人柄により残された「敬天愛人」の広い心、西南の役の足跡、そして、熊本三州会100年の歴史を辿れる資料とするとともに、100年脈々と続けてきた熊本三州会の活動と会員諸氏および関係者の情熱と真心を伝える」

○第2回部会（平成25年2月21日、放送大学熊本学習センター講義室）

- ・90年誌が155ページ、700部、75万円（印刷費）であったので、200ページ、800～1000部、100万円程度で計画する。
- ・坂口委員を編集長にお願いすることとする。

○第3回部会（平成25年11月13日、放送大学熊本学習センター講義室）

- ・印刷費100万円、取材費・事務費を50万円とし、計150万円を1ページ5万円×30ページの広告費で購う。
- ・90年誌を参考に、目次と内容を決める。記念座談会を目玉企画として、実施する。
- ・この回を含め、これ以降の部会には、二見氏は欠席。

○第4回部会（平成26年2月12日、放送大学熊本学習センター講義室）

- ・座談会の計画
- ・「100周年を迎えて」寄稿依頼文書の作成（会員全体と指名執筆依頼者）
- ・「西南戦争に関わり」寄稿依頼と取材記事の確定
- ・「関連団体の活動」原稿依頼先リストの確定
- ・寄付・広告を求めるための趣意書等の確認

○第5回部会（平成26年3月12日、放送大学熊本学習センター講義室）

- ・三役・理事への寄稿依頼（執筆者とのテーマの選定）
- ・「関連団体の活動」原稿依頼文作成
- ・座談会のタイトルを「西南の役・薩軍戦没者慰霊祭・熊本三州会を語る」とする。

○第6回部会（平成26年4月25日、放送大学熊本学習センター講義室）

- ・会員向け原稿依頼状の文章確認
- ・三役・理事等への寄稿依頼状について
- ・関連団体への原稿依頼について

○第7回部会（平成26年5月14日、放送大学熊本学習センター講義室）

- ・会員向け原稿依頼状の文章確認

- ・三役・理事等への寄稿依頼状について
 - ・関連団体への原稿依頼について
 - ・発送作業
- 第8回部会（平成26年10月7日、放送大学熊本学習センター講義室）
- ・9月締切原稿の受け取り状況報告と今後
 - ・11月12日に実施する予定の座談会の準備状況の報告と今後会場は、KKRホテル熊本、経費は、20万円程度、坂口と崎元がシナリオを作成し、パネリストに郵送する。
 - ・知事等来賓挨拶の依頼方法・依頼時期・入手方法について
- 第9回部会（平成26年11月20日、放送大学熊本学習センター講義室）
- ・座談会を終えて 収支報告 総費用¥159,123、座談会活字起こし原稿の校正（各パネリストに送付）、写真選別
 - ・原稿受け取り状況と今後
 - ・知事等来賓挨拶文と顔写真の入手方法について
 - ・役割分担の確認
- 第10回部会（平成27年2月6日、放送大学熊本学習センター講義室）
- ・座談会の校正後の原稿について
 - ・原稿受け取り状況と今後
 - ・広告について 目標額にほど遠いので各自の努力を要請
- 第11回部会（平成27年3月17日、放送大学熊本学習センター講義室）
- ・原稿受け取り状況と今後
 - ・目次に関する確認
- 第12回部会（平成27年6月4日、熊本市辛島町 雑魚屋）
- ・原稿受け取り状況とゲラ原稿の校正
 - ・寄稿者、三役の顔写真依頼について
 - ・**寄稿者等の肩書は、慰霊祭が行われた平成27年4月19日（日）現在のものとする。**
 - ・グラビア写真のとりまとめや配列について
 - ・広告について
- 第13回部会（平成27年7月8日、熊本保健科学大学1204室）
- ・原稿受け取り状況とゲラ原稿の校正
 - ・資料は、戦没者氏名、慰霊祭参列者氏名、募金者氏名（金額入り高額順）とする。
- 第14回部会（平成27年7月22日、熊本保健科学大学1206室）
- ・第13回議事録での懸案、宿題の状況確認
 - ・広告について
 - ・コロニー印刷田中浩之営業第一係長に会議に出席いただき、一部原稿を手渡す。
- 第15回部会（平成27年8月11日、熊本保健科学大学1206室）
- ・第14回議事録での懸案、宿題の状況確認
 - ・前回原稿の校正結果について
 - ・広告について
 - ・今回もコロニー印刷田中氏に出席いただき、残りの原稿を手渡す
- 第16回部会（平成27年8月21日、熊本保健科学大学1206室）
- ・原稿の校正（第2校）
- 第17回部会（平成27年9月3日、熊本保健科学大学1206室）
- ・原稿の校正（第3校） 以後 平成27年9月25日 最終 第6校

第四章

第100回慰霊祭・記念事業写真集



桜満開の慰霊碑

第100回慰霊祭



西南の役薩軍戦没者銘碑除幕式



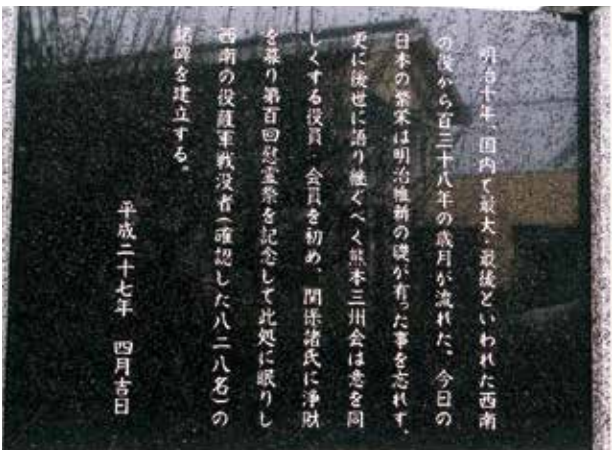
除幕される柏木会長・西郷隆文様・桂久昭様



除幕された銘碑



銘碑と満開の桜



碑文



碑に刻まれた平成27年役員名



崎元会長代行・副会長 開会の挨拶



柏木会長挨拶



祭壇



読経



読経



延寿寺蔵原住職焼香



山下 剛様薩摩琵琶による「城山」奉納



柏木会長焼香



西郷隆文様焼香



遺族会会長桂久昭様焼香



焼 香



焼香



延寿寺蔵原住職へ感謝状と記念品の贈呈



演奏に聞き入る参加者



居合道七段上村博孝様の演舞



陸上自衛隊西部方面音楽隊による演奏



司会者による演奏曲目の案内



西部方面音楽隊の演奏を楽しむ



演奏に聞き入る参加者



西部方面音楽隊への感謝状贈呈



第100回慰霊祭 記念懇親会



懇親会の席で会長挨拶



感謝状贈呈



蒲島郁夫熊本県知事来賓挨拶



三州人（鹿児島）番匠幸一郎総監来賓挨拶



元参議院議員木村仁様による乾杯の首頭



三州人（都城）陸上自衛隊第8師団長
山之上哲郎様テーブルスピーチ



桂久様テーブルスピーチ



崎元啓子様による声楽



声楽に聞き入る参加者



藤川いずみ様によるお琴の演奏



藤間富士齋社中による日本舞踊



懇親会記念撮影



飛び入り参加で牛深ハイヤの披露



懇親会参加者記念撮影



懇親会参加者記念撮影



懇親会参加者記念撮影



梅北副会長閉会の挨拶

第五章

第100回 慰霊祭記念座談会

～西南の役・薩軍戦没者慰霊祭・熊本三州会を語る～



座談会参加者

西南の役第 100 回慰霊祭記念座談会

～西南の役・薩軍戦没者慰霊祭・熊本三州会を語る～

○平成 26 年 11 月 12 日 於：KKR ホテル熊本

○パネラー

大阪大学名誉教授	猪飼	隆明氏
熊本大学名誉教授	甲本	眞之氏
西南の役遺族会会長	桂	久昭氏
熊本三州会会長	柏木	明氏
熊本三州会副会長	竹内	義雄氏

○コーディネーター

記念誌編集部会長 崎元 達郎

○司会

記念誌編集長 坂口 寛治



崎元：皆さん、こんにちは。

熊本三州会が来年 4 月に、西南の役・薩軍戦没者第 100 回慰霊祭を迎えるのですが、それにあたりまして 100 周年ということで、記念碑を作ったりしているのですが、同時に記念誌を発行することとしておりまして私、編集部会長を仰せつかっております。今日、司会をしていただきます坂口先生に編集長をお願いして作っていきたいと思っております。その中で、今日の座談会というものを、特集記事にしたいということです。

そこで今日は先生方やパネリストが、話しにくかったらいけないということで、われわれ三州会の副会長、理事の方々を、特にお名前は紹介いたしませんけれども聴衆ということで参加させていただいています。身内ですので、気楽に（笑）、お考えいただきたいと思います。

この座談会を実施して録音収録しまして、記念誌に掲載するというにさせていただきます。座談会のテーマを「西南の役・薩軍戦没者慰霊祭・熊本三州会を語る」というふうに欲張って設定しております。

本日の参加者を紹介いたします。まず、歴史学者というか、そういう紹介の仕方しか今のところできませんけれども、猪飼隆明先生です。猪飼先生は大阪大学の名誉教授です。それから、熊本大学の名誉教授の甲元先生ですね。それから、西南の役従軍者遺族会の桂会長。このお三方をお迎えして、熊本三州会から柏木会長と竹内副会長の参加をいただきまして、三州会理事の坂口記念誌編集長が司会で、座談会を進めて



いただくということにさせていただきたいと思っております。1 時間半くらいを予定しておりますので、一つよろしく願いいたします。坂口編集長にマイクを渡したいと思います。よろしく願いいたします。

坂口：司会を仰せつかりました坂口です。

お忙しい中に集まってもらいまして、大変ありがとうございます。西南の役、そして薩軍戦没者慰霊祭、そして熊本三州会を語るというこの 3 つの題

を順番通りに追って、座談会を進めていきたいと思っています。

まず、西南戦争がなぜ起こったのかということにつきまして、当時の経済とか政治状況がどのような状態にあったのか、そして明治維新政府の思いと薩摩士族の思いの不一致がなぜ生じたのか、猪飼先生にまずお願いします。



猪飼：はい、猪飼です。今日はよろしく申し上げます。

僕は、西南戦争の研究というか、士族の反乱の研究を開始したのが1974年でした。それまでは民権運動と憲法体制が、僕の研究の大きなテーマでした。それと幕末維新期の研究等々、重ねていたんですけども、それを2つつなげて、その真ん中に、この大きな大きな士族の反乱、西南戦争があるわけですね。そこに、研究の最初のアタックを始めたのが74年でした。

そうして今までの研究、総ざらいをして見通しをつけ始めたときに、熊本大学から「こちらに来ないか」という話があって、熊大に赴任をしてきました。熊本はとにかく西南戦争の資料の宝庫です。

僕が始めたころは、今も主流の見解だと思いますが、「なぜ反乱？ なぜ彼らが、西郷たちが、立ち上がったのか」という最大の理由は、武士が幕藩体制の中で、つまり、目的が特権の維持にあった。一つは俸禄であるとか、刀を差すことができるのか、苗字制度ですね。そういうような特別の特権。それから、4つの身分の中の最高になりたいというですね。そういう身分がなくなって、不平不満が生じてる。その不平不満を持った者を「不平士族」と呼んだわけですね。不平士族が、かつて持っていた特権をもう一度奪い返すというのが、彼らが蜂起する最大の理由だという具合に思っています。これが西南戦争でもって、彼らの思いが断たれたときが明治維新の終わりだという考え方なんです。これが主流でしたし、今も高校の教科書でいいますと、恐らく7割ぐらいはこういう説明をしていると思います。

ところが僕は、これは違うと。そういう見通しを持ち始めたときに、熊本にやっ来て、いろいろと資料を見、格闘してきたわけです。考えてみたら、もうちょうど40年、この西南戦争を扱っています。

ともかく、この戦争そのものについては、なぜ、西郷たちが15,000の兵を率いて鹿児島を出るかという、そのときの説明は、そのときの知事、大山綱良が「政府に尋問の筋これあり」と文章を書いて。つまり聞きたいことがあると政府側に迫ったわけです。

その文章に添えたものが何かというと、中原尚雄という、伊集院出身の警部がいます。彼が川路大警視からの命を受けて、西郷に視線を向けてやってくる。これは、西郷の暗殺の計画だというですね。こういううわさを恐れて、軍隊が通る道筋の県に通知、達しを出したわけです。これが唯一の、公式の軍隊を動かす理由だったわけですね。

これは公式の理由で、西郷は一言も言っておりませんし、大山綱良がそう説明をした。何か説明をしないといけないと言うんでそうなった。その理由は、「なんでこんな暗殺案が起こったんだ？」という、「これを政府軍に聞きたいんだ」ということであつたわけですね。

しかし、熊本の士族たちは、それで「さて、西郷が立つ」、「いずれ立つぞ」というニュースが刻々と伝わってくる。その中で、これはどうしたものかと考えるわけですね。そのときに、薩摩に行くべき士族なんかも薩摩に行きますし、彼らと接触します。村田新八を通して国幹とも会いますし。そういう彼らとの接触の中で、問題の在りかというのを見つけます。それが何かというと、つまり「君側（くんそく）の奸（かん）

を除く」という。これが大義名分だという。

どういうことかというとき、当時、権力は少数の実に有能な人たちであります、その代表は大久保利通でありますし、岩倉具視でありますし、三条であります。そういう少数の有能な官吏というか、政治家というか、その区別が当時はありませんが、そういう人たちが実権を握って政策を策定し、人事も動かしている。ここに問題があるがあるんだと。

どういう問題があるかっていうと、天皇の意思を聞いていないではないかと。天皇を大事にしていなくて、いないわけではないけれど、天皇の意思はここに通じていないということが一つ。一方、国民の声を聴いていないではないかというこの二つ。つまり、天皇の側からの批判と国民の側からの批判で、今の権力の中核におる人たちが批判した。この権力の有り方「有司専制」と呼んだんですね。

有司は官僚のことですが、官僚が権力を握っているというその彼ら、有数の者が、実はその彼らの豊かな資質があったからこそ、ある意味では近代というのが、成り立ったんであります。紛れもなく日本が独立を実践するプロセスも、まさに彼らの、指導力の結果なんですけども。

しかし、岩倉使節団が明治4年の末から6年の10月まで、長い間使節団が出てます。そういう使節団が行ってる間も、国内では残された人たちの、その中心が西郷です。その中心に西郷がいて、彼らは自らの政策決定の権を持っていない。あらかじめ決められた、決められたコースを歩んでいるということから、望まざる熊本に逃れてくる。つまり、権力の中核に居なくて、居るようにも見えるんだけど、政策決定そのものに預からない人たちの不満が生まれる。つまり、今の二つの、国民の声も天皇の声も聴いていないという批判になるわけですね。

ここがやっぱり最大の論点でありまして、政府批判の、これは当時書かれているもののほとんど例外なく、この論理であります。それに、どっちが重点なのか、天皇からの批判に重点があるか、国民からの批判に重点があるかによって、その彼らの主張する政治体制とか運動の在り方に変化が生じます。天皇の側という重点が一番ある。そして、他の声もあまり入れないで蜂起したのが神風連です。

西南戦争の場合にはもっと多様です。西郷という人物が持っている幅の広さと、それから力量の大きさが恐らく関わっている。だから彼のもとに、彼を通じて世の中を変えるしかないと思う人たちは、天皇側からだという人だけじゃなくて、国民の側からもあります。だから、民権派もこれに関わります。西南戦争は、そういう意味から言うと、権力を握っているものを、これをどうするか。これに対する批判を、ああいうかたちで展開したというんですね。熊本の人たちが、これにどう関わるかというところで見つけ出した論理というのが、檄文（げきぶん）です。熊本隊もそうですし、協同隊もそうですし、それから飢肥隊にしたって、みんなほとんどと言っていいほど、彼らは檄文を書いています、檄文はその論理が連ねられているんですね。そういうのが西南戦争であって、だから、相当の広い意味で派を一つに結集する運動になった。

しかし、基本的には、これは武力反乱で武力の蜂起ですから。そういうことから言うと、やっぱり一般民衆を動員するということにはならない。民権派のあの彼らが例えば宮崎八郎たちが、農民を指導して一揆の指導までしています。しかし、戦争になったときは、彼らは一緒に来ません。

あるいは、増田宗太郎という福沢諭吉の甥っ子ですが、これも農民には指導をして

いますが、中津隊というのを組織したときには、やはり一般の民衆は一緒についてこない。これは戦争が持っている問題性だと思いますね。だから、ここが問題の在りかだと思います。なぜ起きるか、起きたということと、あった意味でもあるかなと思いますね。しょっぱな話ですから、これぐらいにしておきます。

坂口：とても興味のある話をしてもらいました。有司専制の制度とか、天皇の意思を聞いてない、国民の意思も又聞いてないんじゃないかとか、さまざまな問題提起をしてもらいました。

次も、甲元先生に、また同じようなテーマで、なぜ西南戦争が起こったのかということ話をしてもらいたいと思います。



甲元：甲元です。どうも。崎元先生から歴史学者の中に入れられましたけれども、本来私は考古学が専門で、そういう歴史的意義とか何かということについては、述べるできません。つまり、われわれ考古学者というのは、どうしてどのようなプロセスで、どういうことがどこで起こったかを叙述するというのが生業でございまして、それがどのような意味を持っているかは、そこまでは私、及んでません。そういうのは全部、そういう遺跡か何かで見られるものか。それを見て、資料が固まってから、だからこうだとは考えられると思うんです。

そういうプロセスから考えた場合、中原が送った、「西郷暗殺の“しさつ”する」というような問題があると言いましたけど、実は、彼らが捕まる以前にもう、私学校を襲って爆発してるんですね。ですから、“しさつ”したから、これで、“しさつ”に来てからこうしたからというのは、少なくともプロセスから見れば、口実にはならないと言えることですね。

それ以上は、まだ今の段階では私はよく把握してませんので、具体的にはそういうことになったら、またお話したいと思います。申し訳ございません。

坂口：私が一つ思うのは、猪飼先生の話の中にもあったこととつながるんですが、平民と士族ということですね。西南戦争が起こる前まで、鹿児島は侍階級の人たちが25%から30%いたということ。そして、全国平均では5%前後なのに、薩摩はたくさんの武士階級を抱えていた。そういった沢山の武士階級たちの手によって、戊辰戦争で明治新政府が立ち上がった。これからの世の中になってくぞという中で、戊辰戦争で亡くなった武士の人たちとか、また明治10年で活躍した武士たちのそういった俸禄とか、身分制度が崩壊して貧しい生活に陥った時に、そういった不満が溜りたまって西南戦争が起ったと思いつつながら、猪飼先生の話聞かせてもらいました。

次は、薩軍が50年ぶりの深い雪を踏み、熊本に入ってくるわけですけども。そういった中で、熊本城を薩軍が攻撃し、段山の戦いがあり、沢山の薩軍兵士が亡くなっているんですけども、さらに北上し、田原坂から玉東、山鹿、玉名等でも官軍を迎え撃っている。当時、最強の武士団といわれた薩摩隼人が破れて、阿蘇、人吉、宮崎、鹿児島と転戦し、最後は城山で9月の24日、西郷が亡くなることによって、西南戦争が終結。そういった戦いの過程等につきましては、他の専門書にお任せしまして何か、それと薩軍側の戦いの様子とか戦い方を含めて何か話しておきたいことがありましたら、お願いします。

では最初に、鹿児島の西南の役従軍者遺族会会長としての桂先生に一言お願いしたいと思います。



桂：桂でございます。私ごとで恐縮なんですけれども、私の父が祖母の富貴から聞いた話でございます。富貴は桂久武の妻でございます。

西郷さんが、出陣の前夜に久武を訪ねに来られたそうでございます。17日出陣ですから、16日の晩だと思えます。夜遅くまで話しておられて、話の内容は分かりませんが、「戦ったら刀を出せと、それから草鞋（わらじ）を出せ」と言って、出掛けて行ったと。

かねて久武は、「今度の戦には俺行かんど」と言っていたそうです。富貴としては見送りに行ったんだろうとっておったところが、そのまま出陣してしまっております。途中から、普段着で、そして普段差しで行っておいりましたので、礼装用の大小の刀を届けるように使いが来ましたので、家扶の方が藁苞（わらづと）に包んで、それを持って、農民に変装して追っかけて行って、熊本県境の大口で追いついて渡しております。

祖父は戦の間、従者に弓矢も持たせていったということですが、これをどこで取り寄せたのかも……。もちろん、最初持って行っておりませんから、どこかで取り寄せたんだと思えますが。これも、その大小と一緒に持って行ったんじゃないかというふうに私は思います。実践に使われた最後の弓だったろうと言われております。

「今度の戦じゃ、俺は行かんど」と言っていた祖父が、どこで心変わりをして、従軍したのか。これはもう、祖父の心境は分かりませんが、この間に、薩摩の若者にみともない戦はさせたくない、大小荷駄を担当しております。そういうことで、自分の役割は十分、当たり前というような意味があったんじゃないかと、私なりに考えております。

もう一つ。これも父が、祖母の富貴から聞いた話ですが、久武は戦争中、数回、兵站集めに鹿児島に帰っております。ちょうど、川村さんが軍隊に入ったとき、祖父も帰ってきておまして。川村さんが、祖父が調達で帰ってきてるという情報を得られたらしくて家宅搜索をかけております。

垣根越しに剣付き（正しくは「剣付き鉄砲」かもしれません）が見えたというときに、ちょうど富貴は、西郷さんからの手紙とか、いろんな書類を部屋中、広げて整理をしていたそうでございます。そこで、もうそれを片付ける暇もなかったので、家扶の方（かた）が富貴の懐に押し込んで、奥の部屋に布団を敷いて。それで妊婦に見立てて、布団をかぶせて。そこに政府軍の兵士が乱入してきましたので、「奥の部屋には妊婦が寝てますが、調べられますか」というふうに聞いたところ、そのまま、あちこち銃剣で部屋を突き刺して、天井など突き刺して、引き揚げて行ったそうでございます。

家扶の方（かた）のとっさの機転と、そういった切羽詰まった状況の中での、そういう対応される度胸。これが西郷さんの手紙などを守り、留守家族を守ったということでございます。留守家族にも、西南戦争があったことをご紹介します。

坂口：身内ならではの祖父桂久武のそういった話、とても感慨深く聞かせてもらいました。

次に、三州会の会長をお願いします。



柏木：西南戦争の武力的なこと自体は、いろいろお話もありますが、それよりも私、医師の立場として西南戦争に変わる一つの大きな事柄を忘れてはいけなないんじゃないかと思えます。

と申しますのは藩医。明治10年にはもう藩医ではありませんけれども、医師で鳩野宗巴という人。これは、子飼の近くで開業しておられた人ですが、この人が1月16日に政府軍が火をつけて市内を焼いてしましまして、その

とき、その病院も燃えてしまって、宗巴も拝聖庵（はいしょうあん）という所に住まっていたんですね。それから2月22日に、薩軍の熊本城総攻撃が始まりました。非常に多くの死傷者が出たわけですが、その翌日23日に熊本隊長の池辺吉十郎がやってきて、鳩野宗巴に、「薩軍の死傷者を治療してやってくれ」と要請したそうです。

戦時中、それこそ殺気立って居丈高な要請だったらしく、そのときに鳩野宗巴は、従容として「いや、あなた方の言うことはよく分かるけれども、同じくこの戦争では、民間あるいは政府軍の死傷者も出ている」と。「同じように治療して良いならば、引き受けましょう。」話によりますと、いったん池辺吉十郎は怒って帰ったという話もありますが、またやってきて、「それでいいから、ぜひ治療してくれ」とすぐ言ったそうです。

すぐ、自分の知ってる医師とか、皆、通達を出して、そして、梅木学校に最初、病院を仮設しまして、そこでボランティアで、全く自分たちの考えで、薩軍、それから政府軍、両方治療を始めた。近辺の婦女子も看護の手伝いをした。元藩医の人たちが7名集まってきまして、鳩野宗巴を合わせて8人の医師が、その死傷者の治療にあたった。また別に、さらに白山神社でも4名の藩医が志を持って、やはり同じように呼応して治療をやったというような話があります。

私たちは、これを日本の赤十字活動発祥ではないかということで、顕彰運動を行っておるわけでありませう。

戊辰戦争とか、それからウィリアム・ウィリスがやはり英国流の医学で、横浜の病院で治療、それもやはり、そういう赤十字活動に基づいたような行動があります。函館では、戊辰戦争で高松凌雲が、敵軍併せて治療したという記録もごございますけれども、熊本の場合は、今申し上げました高松凌雲とか、あるいは関寛斎とか、そういう人たちが行った赤十字活動は、一つの例えば政府軍とか函館の場合には、榎本武揚のそういう組織を作った病院の中で行ってるんですね。

今申し上げました鳩野宗巴は、全く民間人が自発的に、自分たちもボランティアで、全て自分たちが治療代とか何かは全部、薬、それからその他の治療も、ボランティアで行っておるわけです。合わせて12名ですが、12名の藩医の人たちが、こぞってボランティアでやろうというその気持が大変素晴らしい。赤十字活動の発祥の地にふさわしい。そういう顕彰をするに、ふさわしいと思っております。

十何名の医師が自分の開業しているのを、職を投げうって、赤十字活動、敵、味方、関係なく治療をやったことは、大変素晴らしいことだと思っております。

坂口：確かに鳩野宗巴という先生は、敵味方の別なく、熊本の地で西南戦争が起こったときに治療された方で、今だ多くの人たちはご存じない。

三州会会長からも話がありましたけれども、横浜軍陣病院で、ウィリアム・ウィリスと一緒に仕事をして、その中で博愛精神とかで敵味方の別なく治療することになりました。その戊辰戦争の時には国際赤十字ができて5年目ですけれども、熊本では鳩野宗巴よりも佐野常民の博愛社というのがとても有名で、その博愛社から明治20年に日本赤十字社ということになっていくわけですね。

アンリー・デュナンがソルフェリーノの戦いに出くわして、国際赤十字が立ち上がるんですけども、田原坂の場所を、日本のソルフェリーノの丘と命名しますと平成24年9月22日田原坂で行われました日赤広報特使来訪記念献花式で聞いたことがあります。

西南戦争で敵味方別なく治療した素晴らしい先人が、わが熊本にも鳩野宗巴をはじめ、12名の医師がいたということは高らかに顕彰していくべきことではないかなと思っております。

次は、甲元先生にお尋ねしたいんですけども、昨年の3月に国史跡に指定されました。植木町、玉東町の西南戦争の遺跡群の発掘に、陣頭指揮をとられたと伺っています。たくさんの砲弾の破片とか銃弾、そういったものがそのとき発掘されたと聞いています。身近に発掘という作業を通して見分かれて、考古学的な視点から西南戦争に対するこの思いですか、考えがきつと、心に去来されたのではないかなと思っています。

甲元：はい。現場で指揮を執ったというよりも、「いろんな現場でこのようなことをした方がよく分かるぞ、正確よ」ということを指導しただけで、発掘したのは、玉東町とか植木町の担当者の人です。

だからその場合、戦争以前というのを指定するのは、先ほど出した五稜郭がそのような、遺跡であるということで、それが一番新しい史跡ですね。西南戦争も、戦跡としてそれを位置づけるために何をした方がいいかということちょっと考えてやったんです。

それで、普通は遺跡を見る場合、砲弾とか薬きょうとか、何かありますけど、むしろ遺構として残るのは、いろいろな砲台跡とか、それから塹壕ですね。そういうものを合わせて見ていかなければいけない。塹壕が、どう掘られてどういう向きだったかということです。

すると面白いことには、政府軍と西郷軍との決定的な違いは、政府軍というのは教本通り真っすぐ塹壕を掘るんです。しかし、西郷軍の場合は地形に合わせて、場所に合わせて、さまざまな形を取るわけです。西郷軍の場合はそれが、急ごしらえでやりますから、あまり深いのは掘れないんです。どうするかというと、米俵に土を詰めて、それをその高さの所に、ある程度一定の高さまで持って行って遮蔽して、その間から狙い撃ちするというわけです。なぜ分かるかというと、その塹壕の下の方に俵でやりますから、稲わらで作りますよね、稲わらが持っているプラントオパールというものが大量に出てくる。そういうことで検証を、具体的にどう使われたかというのを見ていくわけなんですね。

そして、今日お配りしたところに写真が準備してありますけど、ここの戦跡ガイドマップの二俣瓜生田官軍砲台跡を見てもらいます。よく見ますと、そこに2本の轍(わだち)の跡が残っているのが分かります。これがちょうど四斤山砲という組み立て式の大砲で、その方向から田原坂よりちょっと南側を狙い撃ちしたというのが分かる。

このような形で、具体的に一つずついくつも見本を見て事実を確定してゆきます。と申しますのは、確かに、弾薬も最初は西郷軍と政府軍は違っていたんです。西郷軍の主たるものは、先詰め銃なんです。政府軍は後詰め銃を使っています。ところが例の乃木希典が玉東町を撤退するときに、そういう武器だけ全部捨てて逃げた。そしたら、西郷軍がそれ取ったので、それ以降は、銃の違いによって敵か味方かを分けることができなくなってくる。

ですから、そういうことをまるで考えてないと言いますか。ただ、そういうのをずっと見て感じますのは、どうも、西郷軍にしろ、政府軍にしろ、要するに、軍隊を指揮する人が戦術、戦略を考える人を欠いてたということが、両方にとって不幸なことだった。

政府軍の中心は山県有朋です。しかし、山県有朋はあまり軍歴がないんです。どちらかというと後方の軍隊、組織を作り上げる官僚のような立場なので。ところで一方、西郷軍も、西郷を中心にいけば何とかなるというような、あまり具体的なことをやってなかった。と言いますのは、もう当時の近代戦争の基本的なパターンというのは、ナポレオンが作った。それまでは、騎兵が馬に乗った、あるいは、騎馬兵がやるわけなんですけど、ナポレオンはどうするかというと、そういう騎馬兵は要するに、後方をかく乱したり情報を集めたりするような形にして、基本は市民に銃を渡すというふうに。歩兵なんです。それをやる前にはどうするかというと、大砲を打ち込んで、敵陣をかく乱して、そして歩兵で掃討するというのが基本的な立場なんです。

それなのに、この西南戦争において政府軍はアームストロング砲を持っていたのに、ほとんど使っていないんです。大砲の威力というのをほとんど知らなかった。ですから全部、真正面で突貫やるわけです。だから政府軍は、最初は西郷軍の武士に負けるわけです。

そのような同じようなことを乃木希典が、まるでそういう考えがないから、日露戦争で同じことを繰り返して、突撃突撃ばかりやってああいう負け戦になる。

つまり、そういう意味でも近代戦争に対する戦略とか、戦術というものを良く理解して、それを統率するような人物がいなかった。それが政府軍にとっても西郷軍にとっても不幸だったという。

もし、政府軍がそういうことをもっとよく分かっていたら、こういう大きな被害とか人を殺さないで、なんとか終息できたんじゃないかなというのが、ずっとそういう遺跡を見て歩いて、当時の戦術家のいろんな本を読んだりしながら考えているところなんです。

坂口：甲元先生の話の中に、薩軍も官軍側も上層部の士官の戦略の指揮が十分できてなかったと。うまく大砲を使えば薩軍も官軍も、もっと兵士の死亡数を減らすことができたんじゃないかという話を、とても興味深く聞かせてもらいました。

甲元：それとただ一人、政府軍の中でそういうのができたのが川村純義ですね。彼がやったのは、実は熊本城で戦いがあるときに、船で鹿児島に入っているんですね。そして、楽々と市内を占拠することができた。市中に入ってから、「もう、船を使って、あそこをつけ」と言ったけど、山縣有朋に受け入れられない。

それで、次の手として彼が考えたのは、熊本城に入るのを、日奈久に上陸して挟み撃ちにしようという。あれ考えたのは川村純義です。ですから、政府軍の中でもそういう知略に長けた人もいるんですけど、なんせ薩摩と長州という維新で力をつけた人がトップで、こういう意思決定機関で左右しているものですから、なかなかそれがうまくいかなかった。

そのことは、よく考えるんですけど、いつもこれが山縣有朋みたいに官僚化した軍人ではなくて大村益次郎とか、そういうような人が生きていたら、もう少しこういう大きな被害を与えないでいたと思いますよ。そうしたら、もう少し日本の近代化という意味でも、ものすごく大久保利通の目指すような道で、もうちょっとスムーズに来たんじゃないかというふうに……。

坂口：官軍側が船を使い、電信を使い、新しい銃を使いですね。効果的に戦争を進めて行ったということも、官軍側の勝利に導いた大きな原因じゃないのかなと思いつつ聞かせてもらいました。

猪飼先生にお聞きします。西南の役の歴史的意義ということで話をして下さい。よろしくお願ひします。

猪飼：塹壕を作るのに、木葉村とか、ああいうところから、とっさに米俵の米の入ったものとかね。それから、解かずに入ったまま、徴発して塹壕に使ってますね。その後、敗戦後にあった戦後、補償の問題がおきまして、それも資料というのが出てきます。

恐らく土を詰めるような余裕がない。俵なんか必要だったということがあったのかも分からんなど言っていたんですが。そういうようにして、官軍も薩軍も、実は戦争のための兵站をあらかじめ用意して戦争するっていうんじゃないんですね。つまり、支配した所を兵站基地にするという。

だから田原坂の周辺、その中で最も典型的なのは木葉です。木葉とか上木葉とかある一帯ですね、稲佐とか。ああいうところが被害が増える。

ともかく官軍がばっと逃げると、今度は薩軍が入ってくるという。そういう場面になるわけですね。その都度、例えば軍備は徴収されるし、食料の調達が行われる。だから結局は、両方ともそういう兵站基地を、きちっと持って、食糧の供給であるとか武器の供給であるとかっていうのを、やるということはなかなかできない。

ただ、武器の場合には、政府軍は圧倒してしまして。これは長崎から入ります、軍備は海軍が調達をします。このルートをずっと通してやるわけですよ。

実は、例えば風船爆弾というのを2万個購入しているんですね、2万個。その2万個ほどの風船爆弾をドイツから購入して、長崎まで送ってきた。ちょうど田原坂の戦争の最中です。

ところが、これが浮かんでいるのを見たというような記録が実は全然ないんです。しかし、使っていないわけがないんですね。2万個ってのは相当なもんですから、プカプカ浮いても不思議はないと思うんですけど、そういうようなのがどっかから出てこないかなという気がしています。

軍備で言いますと、政府軍が最終的には完全に圧倒する。これが一つの特徴でしょうね。それから今、電信の話が少しありましたが、日本の電信の発達はスピードがあって、ものすごく速いんです。明治4年には長崎からウラジオストク。それから、香港もつながります。海底ケーブルですね。だから、随分と向こうが、東京との間よりも早いです。そして、大体8年から9年には、熊本に電信が来ます。

これが、神風連のときに潰され、すぐに機能しなくなるんです。しかし、それをすぐ回復して、西南戦争のときには、もう電信機は動いてますし。それともう一つは、軍電と言って、支配をしたところに合わせて、ずっと電信を作っていくんです。

これは実は指揮命令系統の伝達でありまして、伝令がずっと走っていつているようなのじゃなくて、ものすごく簡易なものですけど、竹の笹の棒を建てて電線を敷くっていうやり方です。こうしてどこまで行ったかっていうと、大体、水俣に行くんです。

だから、薩摩に船をやっても、薩摩から電信を送るのは、いつもどこまでいくかっていうと、瀬戸内の尾道まで行くんですよ。そこまで行って打ちますから、随分時間が掛かる。だから初期のころには、そういう連絡方法は薩摩から非常に難しいですね。長崎に来ればつながるんですけど。

そういうようなことで、実は、さっき言った軍電隊を、日奈久に置いてきた、あれが、中継して薩摩につながっているということですね。

ですから、そういう電信系統も、この戦争が一気にそういうものを作らすという力

になった。そういう意味では、戦争のあった意味は、新たな軍事力の増強とか軍事力の開発とかっていう意味にとっては、大きい。一方で負の遺産からいえば、これは日本のその後の外国への進出というような問題だけでも、ほとんど兵站基地を持たないですね。ですから、占領したところで、徴発するというやり方を、これずっと一貫してやってきた。

この内戦の持っている問題かも分かりませんが、戊辰戦争のときもそうでした。陸軍が国内のきわめて精密な地図を作りますが、その地図をほとんどと言っていいほど、軍隊をそこに常駐させたときに、どれだけ常駐できて、どれだけ飯が食えるかという計算のための地図がほとんどですから。そういうやり方で、海外雄飛ってやつもやってきた。今の質問に、そのままちゃんと答えていたかどうかは別にして、大体そういう感じはしますね。

坂口：三州会の柏木会長、西南戦争から学ぶこととしたら、どんなことがありますか。

柏木：当然、西南戦争が日本における近代化に大きく影響している。また、近代化を大変、促進させた一つの大きな原因だと思います。それと、物だけでなく、精神的な面でも非常に、近代化に西南の役が果たしているという気がいたします。

先ほど赤十字のことをお話しましたが、敵を助けるという考え方は全く日本になかったですね。西南戦争までもなかったわけです。しかし、西南戦争のときに初めて敵を助ける。そして、日本赤十字社の前身である博愛社も、これも西南の役でできたわけですから、そういうふうな近代的な考え方。それから、物質的な面でも、非常に大きい意味があると思っています。

それから、もう一つは全て仕事にしろ、全てのものが人であるということ。この3つ目というのは西郷さん、西郷隆盛を中心にした西南の役の動きというのは、考えてみますと、薩軍が鹿児島を出るときは15,000、そして熊本に来て、また熊本隊が3,000ですか。宮崎に転戦して、回ってきたときは7,500という。そして西南の役で、宮崎の出身の人たちの1,050人が死んでいるんですね。

これだけの人たちが、自分のその命を投げ出して最後まで戦ったということ、これは西郷さんという人間性が、あったからこそだと思っています。この三つが西南の役に関しての大きな、これは、西南の役に限ったことではないかもしれませんが、この三つは大変大きく私は西南の役で、意義というよりも、際立った西南の役の現象だと考えております。

坂口：柏木会長から、西南の役を通して日本のそういった精神面とか物質面でも大きく飛躍したひとつのきっかけになったのではないかとの話でした。

違うお話になりますけども、私ども熊本三州会が来年100周年を迎えるんですけども、熊本三州会のそういった起こり等について、ちょっとお話を聞かせてもらいたいと思います。

柏木：これはもう、私がお話するよりも、ここにおられる竹内副会長が、かえってお詳しいと思いますけども、いろいろ文献とか何かを見まして、お話を申し上げたいと思います。

2月22日から熊本城総攻撃が始まりました。そのときは川尻に薩軍の本陣があったわけで、兵站基地という役割を果たしておったわけです。田原坂とか熊本城の攻撃で死傷者が出た場合、先ほど申し上げました鳩野宗巴の所でも、もちろん治療をやったでしょうけども、薩軍が担架にあるいは戸板に載せて、そして負傷者を運びこんだのはほとんど川尻であったわけです。

川尻の寺院とか大きな建物は、ほとんど仮の病院に使われたと。108か所、記録に残っているのは、108の病院の中で、川尻にごぞいます延寿寺が、野戦病院として多くの死傷者を収容したわけです。

そういう方々が亡くなったときに、それを埋葬しようにも、どこも引き受けなかったわけです。というのは、どうも後難を恐れてですね。しかし、延寿寺のそのときの伝弘和尚が、死者は敵も味方もないような仏さんということで、「どんなに自分が、後で咎（おとが）めを受けようとも構わない」と。自分の延寿寺の一部地域を、それに提供されました。850数名の死者をその亡くなった場所、日にち等を記録して埋葬されたんです。

明治22年に、西郷さんが賊名を解かれて、その後沢山の遺族が遺骨を郷里に持って帰られたのが多かったんですが、そのためとは言いませんが、その時代から大変墓地が荒れまして。ときの熊本三州会の方々が、これはどうにかせんといかんということで、そのただけでなくて、熊本のあちこちの埋められている人たちの骨も集めて、あそこに大正5年に墓碑建立をされている。そして、第1回の慰霊祭を大正5年の6月に開催されたんですね。それ以後、毎年熊本三州会によって慰霊祭が行われてきました。

文献を見ますと、熊本三州会の懇親会は、その前にもあったらしいですけどもね。ただ、はっきり熊本三州会として記録に残っているのは、その大正5年の第1回慰霊祭が初めてです。それで毎年、終戦後の混乱にも関わらず、熊本三州会の有志が集まって、必ず慰霊祭を行っておりました。それが、熊本三州会の発端でありまして。

当時の方々は、熊本にも薩摩出身が多かったようですね。薩摩のそういう亡くなった方々の慰霊を弔うために、100年にわたって慰霊が行われたということで、熊本三州会はおそらく100年以上前からあったんだろうと推察されます。はっきりしたそういう名前として出てきているのは、大正5年です。

坂口：今、三州会の柏木会長から、熊本三州会の沿革というお話をしてもらいました。

熊本三州会としての会員としての在籍が50年以上、半世紀以上、会員として活躍されました竹内副会長に、熊本三州会との関わりの中でのエピソードとか昔の活動の状況について、話していただきたいと思います。



竹内：私はこの三州会に在籍が長いということで、今日はこうして招かれておるわけですが、以前の活動状況、そういうことを話してくれというようなことですので、話しをしたいと思います。

私は、昭和35年に三州会に入会いたしまして半世紀以上。正確に言いますと55年ぐらいになりますかね。6代の会長と一緒にやってまいりましたけども、昭和35年が玉利会長で弁護士の先生でしたかね。昭和59年が山下会長、平成2年が白男川会長、平成14年が西郷会長、現在が柏木会長でございます。

以前は慰霊祭を延寿寺で行って、総会も懇親会も全て延寿寺のお寺でやっておりました。その当時の40～50年前は、それぞれ、あまり皆さんも行事は少ないということで、慰霊祭に行くのも、皆さんはわれわれも一緒に楽しみでした。当時は鹿児島より、さつま揚を取り寄せまして、また折詰あたりも取りまして、その折詰とさつま揚をもって、延寿寺のお寺で一応、総会、懇親会を行っておりました。それも昭和64年ぐらいいまだったと思いますね、山下会長の頃までだったと思います。

そして、当時は有志の皆さんで、前の日に、懇親会のようなものをして、そうい

う楽しみもやっておりました。有志で、14～15人でしたかね。私も若いころで……。ほとんど私よりももう、年寄りばかりでしたからね。私もまだ30前後でしたから。50歳、60歳の方と一緒に、私はほとんど小使いをやっておりました。そういうようなことで、その当時は、病院とかいろんな企業あたりに2～3人組んで、寄付をもらいに回っておりました。その総会辺りにおいでになれない人には、終わってから、帰りにさつま揚げと折を配っていました。そういう時期もございました。

玉利会長のころがちょうど35年から、そうですね、40年ぐらいまでは、星子熊本市長、倉重県会議長とか、井上県会議局長。このような方たちも、一応役員とかいう形でございましたけども、毎回出席をされておりました。細川護熙さんも、一回出席されたと記憶がございます。

当時は、舞台を作った年もありまして、日本舞踊なども舞台の上で行われておりました。それから数年後は、慰霊碑、慰霊辺りを行うようになりました。舞台やテントにつきましてはね、そのころはあまりリース会社もなかったものですから、わが社でテントやら持ち寄って舞台やら作ったり、いろいろそういう記憶がございます。

後は、自衛隊の音楽隊も、当時は川尻の町をずっと演奏して。そして、川尻の延寿寺に入ってきて、非常に川尻の町にも喜ばれた時代もありました。現在でも自衛隊の音楽はあっておりますけど、今は延寿寺だけでやっております。

それから、昭和44年ごろでしたかね。三州会で、青年部会を立ち上げまして、献血運動やら児童養護施設の慰問もしたり、また親善大会の活動なんかもやっておりました。井上会長のころまでは、家族揃って、本堂から外の庭まで敷物を敷いてお花見もやった記憶もがございます。それも何年かやりました。

平成になりましてから、今現在は、もう皆さんご承知の通り、琵琶の演奏とか、居合術に変わっております。現会長になってからも、慰霊祭も従来通り延寿寺で行われておりましたが、現在総会は熊本市内で行われています。

最近は時代も変わり、この三州会も全国に広がるようになりまして、今後は若い後継者が先輩方の遺志を継いで、継続していくことを願っておる次第でございます。

坂口：往時のことからよく分かるような話でした。

次は、鹿児島島の西南の役戦没者遺族会代表の桂さんへお聞きします。延寿寺の慰霊祭には毎年鹿児島からご出席してもらっておりますけれど、来年100回目の慰霊祭を迎えます。何か、100回目を迎える熊本三州会、慰霊祭につきましてお話しください。

桂：先ほど、柏木会長からありました当時の住職に対しましては、本当、心から遺族としては感謝したいというのが、もう、いつも延寿寺に参りますときの気持ちでございます。それから、100年もこの慰霊祭を続けておられるという、熊本三州会に対しましては、敬意を表しますとともに感謝したいと思います。

それともう一つ、西南戦争当時は熊本を中心部にあつて、今は、熊本市の区画整理で、本荘町に移転しております浄勝寺。ここも481名の方を供養、埋葬されております。今も、この方々の過去帳が残っております。

当時の住職も、延寿寺の住職と同じく、役後、政府軍に呼ばれた時に、法衣の下に白装束をまとって出掛けられたというふうな、伺っております。延寿寺と同じく、この浄勝寺も、遺族として忘れてはならないお寺だと私は思います。

4月の延寿寺の慰霊祭に参加をいたしまして、まずびっくりいたしますのは、門前の各家庭に日の丸が、旗めいているということでございます。それから私、最初に延

寿寺にお参りに行きまして、近所の奥さん、延寿寺においでになった奥さんに、「薩軍のお墓のあった場所はどこですか」とお聞きしましたところ、「ああ、薩州さんのお墓ですか」と言って、親切に案内してくれました。

先ほどから話がありますように、2月の22日ですか。川尻の町に薩軍が、急きょ入ってきて、いわゆる人のうちに土足で上がり込むような形でお寺とか集会所、大きな民家などを占拠して本陣として熊本城攻撃を行い、橋をへだて、お寺を先ほど、柏木会長が言われましたように、川尻町を中心に、110何カ所の野戦病院を作ったということで、川尻の町の方々には非常に迷惑を掛けていていると思います。

私も先ほど言いましたように、川尻の方々が慰霊祭には参列されています。「薩州さん」言っておられるというふうに、親しみを持っておられるということは何でだろうかと私、考えまして、二つほど理由があるんじゃないかと思っています。

まず一つは、迷惑は掛けましたけれども、薩軍の兵士、個人個人は非常に教養のある規則正しい兵士だったんじゃないかと思っています。熊本弁で言いますところの「むしゃんよか若者たち」だったと思います。勝海舟は、薩摩琵琶の城山の中で「若殿原」という表現をしております。

二つ目は、熊本三州会の方々が、大正5年に慰霊碑を作られて以降、非常に熊本の……、皆さんに、川尻の方々に、敬意と尊敬を受けているんじゃないかと思っています。熊本三州会の90年誌の中に、現在の住職が、「先代が熊本の市誌に、『ことを起こすのは簡単だけれども、これを継続することは非常に難しい。これをやっておられる熊本三州会の方々、えらかばいね』と、かねがね言っておりました」というふうに書いておられます。

それと、私が直接聞きましたのは、「鹿児島の方は、よかばいね」と。「なんででしょうか」と聞きました。「そういうふうに父が言っておりました」と。「鹿児島の方はよかばいね。いったん決めはったことは、みんなして一生懸命守りなされる」というふうに言っておられました。それは当然、檀家の方々にも言っておられたことでしょうし、ひいては川尻の町の方々にも伝わっているんじゃないかと思っています。そういうことで、熊本三州会の方々が継承されているんじゃないか。そして、100年も続けておられるということに関しましては、本当に遺族として感謝いたしますとともに敬意を表したいと思っています。

坂口：遺族会の会長として、心の込もったお話、大変ありがとうございました。

次は、第100回の慰霊祭の記念事業といたしまして、戦没者記念銘碑を建立することになっていきます。その戦没者記念銘碑は、竹内副会長を中心となってお世話していただいて、建立するようになったと聞いています。そういった建立に至った経緯、建立に関する逸話等がありましたら、竹内副会長お願いします。

竹内：熊本三州会慰霊祭100回記念事業として、何か後世に残したいとの思いから始まった記念碑の建立計画でありまして。平成25年の6月から、推進会議や役員会議を数回。また、検討会を数十回重ねて構想をひねりまして、決定いたしましたわけでございます。

記念碑は慰霊碑、としてふさわしい建造物です。延寿寺に埋葬された828体の戦没者の御霊を慰めるための碑でございます。形は屏風型で、強度面においても優れた設計となっております。すさまじい天災が起こらない限り、倒壊はしない構えであります。大正5年より始まりまして、慰霊祭の栄えある第100回記念事業にふさわしい記念碑の材質としまして、御影石を使用し、土台、柱部分は白御影石、文字を掘る部分

には黒御影石となっております。極めて硬度の高い石を使用いたしました。天然石を使用することにより、風化に強く、コケなどの付着がほぼない素材を使用しております。永久に残したい思いから、素材に関しましては熟慮をいたしました。建立後は若い後継者が先輩方の遺志を継ぎ、慰霊祭を継続していくことを願う次第でございます。

坂口：次は、熊本県内には沢山の西南戦争関係の顕彰会があります。また、慰霊碑も沢山ありますけども、西南の役の顕彰のあり方とか、慰霊のあり方等につきまして、これから聞いていきたいと思えます。

甲元：慰霊のことについては、またいろいろとお考えがあると思えますけど、西南戦争の遺跡等については、やっと玉東町と旧植木町の一部、田原坂公園だけが指定されたわけです。しかしながら、西南の役は鹿児島で始まって鹿児島で終わるわけです。できましたら、熊本の南部とか大分とか宮崎とか鹿児島とかにある、そういう西南戦争関係の遺跡を、ぜひとも保存して、一体どういうことでこういうことが起こったかというのを、一人一人がその意味というのを確かめるような、そういう場というものを今後、作っていかねばならないと思えます。

というのは、先ほどあった川尻の延寿寺も、それからそれ以外の、西郷軍に関するものというのは、ほとんど熊本市は手を付けてなくてそのままあります。あと、政府軍の墓地と、西郷軍の墓地を比較しても、指定の史跡は西郷軍が少なく、政府軍が多いわけです。こういうアンバランスなことは、この戦争を顕彰すると云う意味からは、あまりそれは不十分だと思いますね。ぜひとも皆さん方のお力で、実際はどうだったかを、そういう記念の場所を残して、一人一人がそういうのを顕彰できるようなかたちのことをしていただきたいと思っております。

あと今、鹿児島は維新 150 年ということで、大変燃えていて、鹿児島の人は、それが終わってからだということですけど。しかし、その間でも、熊本の南部とか東部とか宮崎とかいろいろと戦役があり、最後は鹿児島で終わるわけですけど、最初と最後だけで途中がなくては、なぜそうなったかという本当の実態は分からないと思えます。そういうことを研究することを始めて、当時戦った人々の存念というところ、何のためにこうしてやったかということを考えるいい機会となりますね。そのモニュメントとしても、そういう遺跡というものを、もっと掘り下げて、保存していただきたいとそのようなお願いがございます。

坂口：甲元先生から話をしてもらいましたけれども、その話を踏まえ同じような質問ですけども、西南の役の顕彰の在り方、慰霊の在り方につきまして、猪飼先生お願い致します。

猪飼：はい。二つだけお話したいと思えます。

一つは、もともと日本は戦国期ぐらいまでは、戦争、内戦やるでしょう？その後、両軍の戦国大名のもとで死んだ両軍を一緒に弔っていたんですね。これは日本のずーっと大きな特徴でした。

死んだ人を区別すべきという、敵と味方を区別するっていうのは、実は近代になってのことなんでね。そういうことから言いますと、今、柏木会長からお話のあったような、ああいうかたちで敵味方、相別れて戦って、傷つき亡くなった人たちを共に弔うという、そういう精神は非常に大事で。生きている間もいろんな人も含めて、やっぱりこの三州会の精神としても受け継がれていくっていうのは非常に僕はいいいことだなという具合に関心を持ちました。

それから、私自身は甲元さんと違って文献を扱ってますので。ですけども、文献が、

実に膨大な数、量があります。そしてしかも、今までは中心的な人間のものがたくさん、それなりに世に出ているわけですけど。実は、それに従軍して、途中で逃げ帰ったものとか、あるいは、さまよったものとか、そういった人たちの資料も随分あるんですね。僕も幾分かは、それを活字にする努力をしてきましたけど。こういうものをもう少し掘り起こして、そして皆が見れるようにするという活動を、絶対必要だろうと思って。

特に薩軍の問題で言うと、熊本武士たちが参加してくる動機付け、そしてその彼らが一緒になって行動していて、何を考えて何をしてきたかという日記に、つぶさに書かれているものが随分出てきました。ですから、そういうようなものも少しずつは今報告されてますけれども、大事なことだなあという具合に思います。

ついでにもう一つですが、これまで、ずっとこの西南戦争に関わったいろんな人に会うことができましたが、わが家は薩軍がやってきてから燃やされたとかそういう家の人がいったり、逆に命をつなげたと云う人がいったり。それでも面白いことに、この西南戦争に関しては、ほとんど後を引いてないんですね。ずっと私のところは、要するに被害者だと、いや、これは片方が加害者だというそういう関係はあまりこの西南戦争に関しては、もう風化したというよりも、むしろちょっと違った意識を持って、この戦争を見てるんじゃないかという感じを持ちますね。

そういう意味から言いますと、さっきの同じような話になりますけど、一般の民衆で犠牲になった者たち、これは沢山います。実に沢山いるわけですね。これの補償は、実に面白いことだけど、家の方の補償の方が人命よりも高いんですね。これが現実でありましてね。そういうかたちでその受けたものも含めて、僕らとしてはもう少し、歴史を掘り起こして顕彰するという、その起きた事実そのものについて、どういう意味をもっているのかって考えると、そういうようなことがもっと必要なのかなと思って。これは僕自身の仕事にも関わりますが、皆さんと一緒に考えていくような機会があったらいいなという具合に思いました。

坂口：参考文献、資料等も沢山出てきているので、今後研究がますます大事になってくるとの話でした。

これからの熊本三州会についてどうあるべきか、100周年を迎え、101年というかたちで続いていきますけども、課題とか期待したいことをこれからちょっと議論してもらいたいと思っております。

最も熊本三州会に在籍の長い、会員歴をお持ちの竹内副会長に、会としてこういった点を続けてほしい、こういった点はちょっと問題があるから検討してほしい等々がありましたら、お願いします。

竹内：熊本三州会の慰霊祭も、大正5年から100年を過ぎた歴史もありますし、また、西南の役以後138年という歴史もありますし。今まで継続してこられた先輩方の意志を継いでいくためにも、どうしても若い人の入会が必要じゃないかと思えます。

以前は、若い人もよく入会しておりましたが、やはり内容をよく理解していないということもありまして、1回2回来て、もう来られないというのが多かったですね。そこで私の考えですけども、広報活動に力を入れて、広く三州会の趣旨を、活動内容を広めていくことが大事ではないかと思えます。

西南の役により、新しい日本国の幕開けといえますか、日本が生まれ変わったと言っても過言ではないことを一人でも多くの若者に知ってもらい、今の日本に巻き返して

いただきたいと思うわけでございます。熊本三州会には、いろいろ良識ある熊本の名士の方もたくさんいらっしゃいますので、その先輩方の講話の機会を増やして、西南の役歴史などのお話をする場を設けて、多くの方に理解と賛同、入会していただきたいと思うわけでございます。

坂口：次は桂さんに、またちょっと質問したいんですけども。桂さんは西郷南洲顕彰会の理事長でもあられますし、先ほどから紹介していますように、西南の役従軍者遺族会の会長でもあられるわけですけども、先ほど顕彰会の在り方ということと若干、ダブると思いますが、熊本三州会に対して注文とか期待したいことがありましたら、お願いします。

桂：熊本三州会は、私ども遺族会がやるべきことを熊本でやっていただいて、しかも100年です。私ども遺族会というのは、まだ38年ですから三分の一。まだ、ひよっこでございませう。

そういうことで、もう三州会の方(かた)には本当、敬意を表しておりますが、熊本三州会に期待ということではなくて、もう一つだけ、ちょっと今回の慰霊の銘碑をつくっていただくにあたって、私、いろいろ名簿を……。延寿寺の名簿、それから浄勝寺の名簿といろいろ見させていただきました。そして、田原坂の歴史資料としていっぱいありますが、それらの名簿等を照合しますと不明な点が新しく浮かび上がってくる。これは非常にありがたいこととございました。例えば、延寿寺の名簿が間違っているとか、川尻町史にある名簿と照らし合わせた場合町史に間違っていて記載をされているとかが新たに分かりまして、非常にありがたいこととございました。今回、いろいろとそういうようなことを見直させていただいて、熊本三州会には、本当に遺族会としてもありがたいこととございました。

私ども、まだひよっこでございませうが、100年のこの機会をとらえていただきまして、いろいろと私どもも、また新たに見直させていただきまして、今後も続けていただければ非常にありがたいこととございませう。どうぞよろしくお願ひしたいと思ひませう。

坂口：猪飼先生と甲元先生、この記念座談会に出席してもらひ、熊本三州会の活動の一端についても、少しはご理解してもらったのではないかとと思ひませう。今後の、熊本三州会に期待することを猪飼先生、それから甲元先生にお話してもらひたいと思ひませう。

猪飼：今、お話がありましたように、100年というのは、とんでもない長い時間ですね。よくここまで継続されてきたなって、まずは敬意を表したいと思ひませう。後は恐らく、若い人たちにどれだけ入っていただいて、一緒にやれるかっていうね、これが課題なんでしょうけども、僕らもそういった意味では、何か事があるときに縁のある話でありますので、そういう訴えをさせていただこうかという具合に思ひませう。

坂口：甲元先生お願ひませう。

甲元：はい、私も同様で。100年といえば、ほぼ三世代にわたっていて、こう事業が続いていると云うこと。一つの世代だけでも続けるのは大変なので、これまで長期間で続けられるというのは鹿児島の人はずごいなというのは、よく感じませうね。それだけでもう、感心するだけでございませう。

坂口：はい。最後に熊本三州会の柏木明会長に、これからの熊本三州会の在り方に対して期待することで、締めのお話をしてほしいなと思ひませう。よろしくお願ひいたします。

柏木：これから、どのようにしたらいいかという三州会としての思ひは、私一存では何とも

言えないことをごさいます。例えば皆さん方お話を聞いておまして、会として伝統を守るということが一番だろうと思います。

現在、定められております熊本三州会の会則の中に、「西南の役戦士の志を引き継ぎ、会員相互の親睦と、会員の発展、向上を目的とする」と、そういう目的になっております。この西南の役戦士の志を引き継ぐという、これが熊本三州会の本当の根本的な趣旨ですね。これを理解していただける人には、どんどん会員に入っていただきたいと。特に、熊本におられる三州出身の方はもちろんのこと、三州だけでなく一番、西南の役に関係する熊本の人たちにも、ぜひ三州会に入っていて、この伝統をこれから先、ますます強固なものにしていったらと思います。

それから二番目に、毎年この会則の事業の第一番に、熊本市、川尻町、延寿寺と熊本市段山において、西南の戦役、戦没者の慰霊祭を行うということをやっています。この延寿寺は、ただいまお話がございましたように、第100回という慰霊祭を迎えるわけですが、段山は、まだ会員の中でも意識がはっきり理解しておられない方もあるように思われます。

段山における慰霊祭は今年で37回目であります。37回毎年継続されてきたということは、非常にこれは大変三州会としても誇っていいんじゃないかと思いますが、まだ会員の参加者も少ない。もっと多くの方がこの段山の慰霊祭の在り方についても理解をしていただいて、こちらも三州会として会員に対する理解を深めてもらうような努力が必要ではないかと思っております。

それから、熊本城の顕彰会、あるいは西南の役を讃える顕彰会みたいなのがございます。これは明治11年に、東京で始まったらしくて、その後、熊本でやった方がいいんじゃないかというので、現在は熊本で行われておりますが、この方からも、ある方から……、薩軍、政府軍、双方にかかわる顕彰会なので一緒の会にした方がいいんじゃないかというふうなお話もいただいたことがあります。

確かに、もう政府軍とか薩軍とか考えないで、西南の役を偲ぶ会というのもあっていいと思います。ただ、延寿寺のこの慰霊祭は、少し意味が違うんじゃないか。われわれが持つておる慰霊祭に対する思いは、多少違ったものがあるようにも思います。私、その方に言いました。「非常に結構なことである。しかし、それはそれでやっても、延寿寺の慰霊祭はまだ続けますよ」とお話をしたわけですが。やはり今後も200年慰霊祭に向かって、熊本三州会が毎年慰霊祭で供養し、そして、当時の人たちの志を引き継いで後世につなげていきたいものだと考えております。以上です。

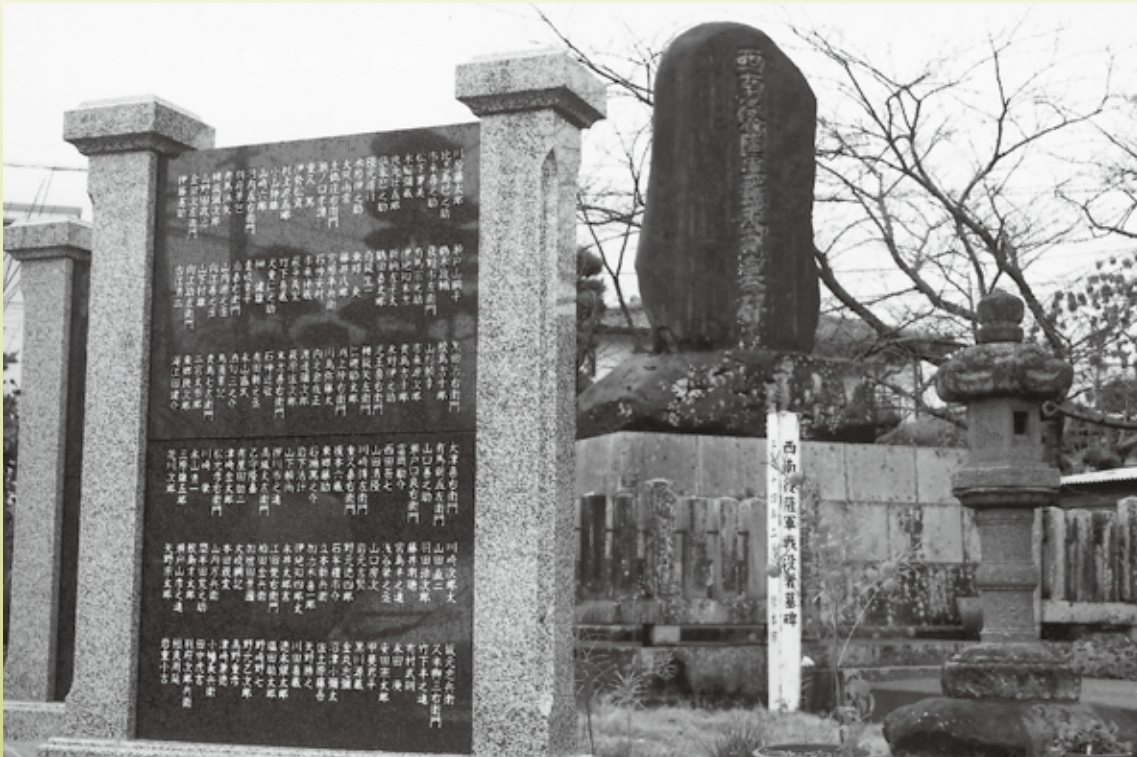
坂口：熊本三州会会長から、肝に銘じなければならぬ内容の深いお話をしてもらいました。ありがとうございました。

本日はテーマとして、「西南の役・薩軍戦没者慰霊祭・熊本三州会」という三つの題については、それぞれの立場から貴重なご発言を頂きました。これをもちまして記念座談会を終わりたいと思います。本当に、長時間ありがとうございました。



第六章

100周年を迎えて



大正5年第1回慰霊祭に思う

林 半 次

其の後、時の熊本県内務部長堀口助之氏、官用にて当寺に出張の際右の標本を見て大に感動せられ、偶々熊本市光島楼に開会したる三州人大懇親会の別席にて、当夜出席の重だつた人々と共に、該標木の由来を川添君から聴収せられた。当時在熊の会員には川路知事、堀口内務部長、肥後逓信局長、橋口大林区署長、其他多数の将校諸士が居られて所謂薩摩風がそよそよと吹き渡つている頃であつたから、一同大に川添君の志に共鳴し直に適宜の処置を講ずる為め不日委員会を開くことに決定したのであります。

爾来肥後氏を委員長として、堀口助久、児玉静雄、河野鉄次郎、西元清、川添豊志の諸氏が屢々会合して審議立案せられたが、遂に熊本県下各地に散在する遺骨の全部を調査発掘して此の延寿寺境内に一大招魂碑を建立し、永く祭祀する事に決し直に各方面との交渉、資金募集工事準備等に着手するに至つた。幸い当寺の関係者諸氏及び川尻町有志諸氏の熱烈なる後援と、三州の有志市町村長諸氏並に東京其の他各地の三州出身諸氏の深甚なる援助とを受けて、万事は順調に進捗し、種々の紆余曲折もあつたが年余を経て、漸く落成を見るに至り、大正5年を以つ盛大なる落成式兼第1回の招魂祭を執行したのであります。其の以降例年の祭典が年と共に益々盛況に赴くことは御同慶に堪へない次第であります。一方熊本県下の市町村長並に警察署の援助の下に、各地から発掘収容して居たる遺骨は鹿児島島の南洲神社から、同社に合葬したいとの申込が在つたので協議の結果、全部同社に納めて、茲には先輩諸氏の英霊のみを奉祀したのであります。

尚是に千与したる人々の内、西元清、川添豊志、逓信局の野津君の三人は既に故人となられ、当地に残存するものは橋口吉之助君と私の二人位のもので、日月々真に感慨無量であります。

明治丁戊の戦乱に就て、冷やかなる史的批判を式するならば種々の論難も起るに違いないが乍併、先輩諸氏の奮然蹶起せられたる所以の心事に至つては真に公明正大たゞ憂国の至誠と、皇国の偉大なる目的の為め一路驀進せられたのみである。故に盟を重んじ義を尊び節を全うして、快全一死、万丈の意気を掲げたる戦死者諸君の英霊は、永に我が帝国を加護し給ひ、生存の諸士は、大風一過と共に或は国事に奔走し、或は家郷を斉へ、或は産業を奨励して共に国家の繁栄に貢献し、敗残の子女も又、天を怨まず、地を呪はず、更始一新、三州の天地は忽ちにして光風霽月を見るに至り、三州男子は再び大日本建設の中堅と成つて国運隆々今日の盛大に遭遇したのである。而して天運浩遍西郷先生以下諸豪の霊は南洲神社に祭られて神威赫々千古を照らす。此の如き義勇の精神、壮烈の気風、優美の情景は実に我が三州民族の数千年来の伝統的精華にして、永遠に其の異彩を保存せねばならぬものと信ずる。文化日に進み月に新なるに従つて、国民思想の動揺も又免かれ難く思想国難の声さえ聞くに至りては、寔に寒心に堪へざるものがある。苟も皇国発祥の地に生れ、帝国愛護の先鋒たるべき義務を有する我が三州人は、宜しく昔に鑑み、今を思ひ大に発奮努力して、益々三州伝来の精神を磨き、其の美風を発揮しなければならぬ。之即ち招魂碑を建設して、先輩諸氏の英霊を祭る所以であります。言外無限の意義を看取して、此の祭典に列するならば、御互に感興津々として尽くる所を知らずと言ふやうな情趣に到達するものであります。終りに望んで此の招魂祭の永久盛大ならんことを祈る。

昭和5年4月3日

「西南の役 第百回慰霊祭」に向けて

衆議院議員 木原 稔

「あなたの尊敬する政治家は誰ですか」よく聞かれる質問のひとつです。私は「西郷隆盛です」と答えることに決めています。西南の役で熊本城を攻撃した歴史もあり、熊本県民には必ずしも好意的に受け入れられていない南洲翁ですが、西郷家の初代は熊本から鹿児島に移ったとも言われ、また歴史好きの私には当初から憎めない存在でした。学生時代に政治家を志し、はじめて『南洲翁遺訓』を読んで以来、冒頭の質問に対する答えは一貫しています。

自由民主党では明日を担うリーダーを育成するために各都道府県に「政治塾」を設置しています。私は鹿児島県に政治塾を新規開設する担当になり、平成二十五年八月に「かごんま造士館」を無事に開講させることができました。西郷南洲顕彰館の一室をお借りし、定期的に講演等を行います。ここから西郷南洲の遺志を継承し、国際社会の中で誇りある日本のあるべき姿を考える若者が多く育つことを期待しています。



薩州墓の思い出

顧問 木村 仁

国民学校5年の春に、私は、熊本市の都心から疎開(?)して、川尻に住むことになり、川尻国民学校に転校しました。新しい住いが川尻横町の延寿寺に近いところでした。その延寿寺に、「つねみさん」という6年生がいて、毎朝つねみさんの引率で、瑞鷹酒造の酒蔵に設置された川尻校の文教場に通いました。

つねみさんは落ち着いた穏やかな上級生で、転校生のことも良くしていただいたので、私は、ごく機嫌よく川尻の子供になることができました。当時、川尻では、子供は苗字でなく、名前を呼ぶ慣わしでした。「つねみさん」は、「常見さん」だろうと思っていましたが、実は「蔵原恒海」さんであることを、後になって知りました。現在の延寿寺の御住職です。

延寿寺の近くに、「薩州墓」という墓地がありました。私たちは、「さっしばか」と呼んで、川遊びの行き帰りにそこで遊んだ記憶があります。

西南戦争で戦死した薩摩の人々のために墓地を提供するのをためらった寺院の中で、延寿寺だけが手を挙げて受け入れ、懇ろに供養したと聞きます。遺骨が鹿児島に送られたのちにも、残された遺骨を集めて西南戦役薩軍戦没者墓碑を建立し、慰霊祭が行われて100回になりました。

100回の慰霊祭とは偉大なことです。それは西郷隆盛が偉大であったことと、三州会の結集力が強かったことの結果ですが、延寿寺の歴代の御住職が、こころ豊かな方々であったことも、忘れてはならないでしょう。そういえば、終戦直前に沖縄から集団疎開してきた人々に、本堂を開放して住まいを提供されたのも、川尻では延寿寺さんでした。



第百回慰霊祭を迎えて

延寿寺
三十七世住職 藏 原 恒 海

大正五年延寿寺三十一世住職伊藤顕俊師の代熊本三州会の尽力による多額の募金で、延寿寺境内に西南役薩軍戦歿者墓碑が建立されました。

五百余名の参列者により第一回の慰霊祭が行われ、平成二十七年は百回になります。

大正、昭和の激動期、戦後の混乱期、平成時代と長い年月を慰霊祭は続けられました。

西南役当時延寿寺は薩軍の衛戍病院の一つとして七十名収容されました。

当時の延寿寺の住職は三十世伝弘応師で二十八歳の青年僧でした。薩軍の戦死者は薩州墓現在の延寿寺墓地に埋葬されました。伝弘応師は戦後遺族が遺骨を郷里に持ち帰られた後も、供養を続けられました。

昭和十一年に墓碑、参道の補修、蓮池だった所を境内に拡張する工事が行われ、一對の石燈籠も建立されました。

戦時中鹿児島、宮崎県出身の兵隊さんは延寿寺の慰霊祭に参加するというと特別の許可が出て、境内で銃剣道等の演舞が行われたと聞いています。

昭和十八年私の父藏原正俊が三十六世住職となり、戦後年を重ねるごとに慰霊祭が盛んになりました。

自衛隊の音楽隊、三州会の旗を持ち役員さんが多くの国旗が掲げられた横町通りを延寿寺まで行進された年もありました。

参列者が多いため焼香は、来賓、役員、各職場の代表のみでした。

境内で音楽隊の演奏、詩吟等が奉納されました。

式典後は、庫裡、本堂に上がって総会がありその後さつま焼酎、さつま揚、弁当で懇親会が行われ、鹿児島弁が聞かれる中、会員の余興も出て楽しめました。

境内にはコカコーラ社の協力で飲み物が無料で提供され、近所の子どもたちも喜んでいました。

私も昭和五十年父正俊の後を継ぎ三十七世の住職となり、今年で四十年になります。

今でも西南役戦歿者の子孫の方が、自分の先祖が延寿寺に祀られていると聞いたが、戦歿者名簿に記載されているかと来寺されることがあります。

地元の小中学生の学習、史跡めぐりの人たちが来寺されます。

この数年慰霊祭には、川尻校区の町内自治会長、老人会、近所の人たちも参列され、自衛隊音楽隊の演奏などを楽しんでおられます。

百回も慰霊祭を続けてこられた三州会のみなさんの真心と努力を称えと共に私も、先代の遺志を継いで墓碑を守り、戦歿者の供養を続けていこうと思います。

今後も慰霊祭が長く続くことを祈ります。

補足 延寿寺と西南の役の縁^{えにし}について

・延寿寺の「西南の役薩軍戦没者墓碑」の左側にある「西南役薩軍戦没者合葬墓碑建設趣意之碑」に四月除幕式を行ふ。会する者五百余名なり。河野主一郎、幕を徹す。…と刻まれている。

ご存知のことかもしれないが、河野は城山から山野田一輔と一緒に西郷隆盛助命の使者となり、白旗を掲げ別働第一旅団に降りた人である。戦後は懲役十年の刑を宣告され、福島監獄で服役したが、明治14年特赦で罪を許され鹿児島に帰る。

戦後の故郷の復興に力を注ぎ翌年15年に「三州社」を設立した。その社では各地に散乱した西南の役の子供の戦死者の遺骨を丁寧に收拾し、鹿児島島の地に改葬して霊を弔うことに尽力した。

今日の南洲墓地は、丁丑戦役7回忌に当たる明治16年の改葬作業によって成ったものである。16年に至り長期処刑の戦友河野主一郎以下の士^{ことごとしや}尽く赦を受けて帰郷す、是に於いて再び薩摩、大隅、日向、肥後及び豊後等の各地に残留する戦死者の遺骨を収集し、或いはこれを遺族に付し或いは之を浄光明寺の塋^{はか}に収め一も残すところなかった。

延寿寺を始め川尻地区その他九州各地に散在した遺骨の收拾に手がけたその縁で除幕の大役が彼になったのだと思われる。

延寿寺にある西南役関係の碑

→
(正面)
(裏面)
西南役薩軍戦没者墓碑
大正五年一月
従四位勲三等 川上親晴 書



西南役薩軍戦没者墓碑



西南役薩軍戦没者
合葬墓碑建設趣意之碑

西南役薩軍戰歿者合葬墓碑建設趣旨之碑

明治十年薩隅日三州之士擁西鄉南洲翁而起也進圍熊本城或戰于高瀬田原山鹿御船等斃者頗多埋之植木陣内御船而葬川尻延壽寺者尤多及八百餘名川尻蓋一時牙營在處也事平親戚故舊遠來吊或携遺骸歸現存十數餘寺僧傳弘應収其殘骨而祈冥福川添豐志為樹墓標然經年所兆域荒廢偶三州人會席上堀口助治河野銓次郎發建碑之議又謀埋骨各地者悉送之鹿兒島南洲祠堂衆贊焉於是河野銓次郎西元清永田純章來往互謀事漸決得釀金市壹千四百有餘圓乃囑工學士兒玉靜雄設計大正五年二月起工六月告成題曰西南役薩軍戰歿者墓碑川尻志士亦贊之捐貲造石柵四日行除幕式會者五百餘名河野主一郎撤幕嗚呼巍峨崇碑誰不景仰哉而送骨之事亦畢焉爰叙其梗概以垂不朽併刻發起者氏名云

大正五年六月四日

發起人

肥後八次 松浦立身 染川孝助 西元清
堀口助治 河野銓次郎 新野三十郎
橋口正美 福留龜次郎 永山善之助
谷村定規 瀬戸口彌太郎 川添豐志

(上の読み下し文)

明治十年、薩隅日、三州の士が西郷南洲翁を擁して起つや進みて熊本城を囲み、或いは高瀬、田原、山鹿、御船等に于いて戦う。斃るる者頗る多し、之を植木、陣内、御船に埋む。川尻の延壽寺に葬る者尤多く、八百余名に及ぶ。蓋し川尻は一時牙營に在りし処也。事平らぎ親戚故旧、遠來し吊い、或は遺骸を携えて帰る。現に十數余寺に存り。僧伝弘志、其の殘骨を収めて冥福を祈る。川添豐志、為に墓標を樹つ。然れども年を経て、兆域荒廢す。偶三州人會の席上、堀口助治、河野銓次郎、碑を起つるの議を發し、又、各地の埋骨を悉く鹿兒島南洲祠堂へ送ることを謀る。衆、贊す。是に於て河野銓次郎、西元清、永田純章來往して互に事を謀る。漸くにして決す。釀金壹千四百有余圓を得て、乃ち工學士兒玉靜雄に設計を囑す。大正五年二月工を起し、六月成を告ぐ。題して曰く西南役薩軍戰歿者墓碑と。川尻の志士亦之に贊し貲を捐つ參石柵を造る。四日、除幕式を行う。會する者五百余名。河野主一郎幕を撤す。嗚呼、巍峨として崇き碑、誰か景仰せざらんや。而して骨を送るの事亦畢りぬ。爰に其の梗概を叙して不朽に垂れ、併せて發起者の氏名を刻すと云う。

(文責・吉村圭四郎氏 熊本市川尻在住)



西南役六十周年記念碑

曩に大正五年熊本三州人會員蹶起し有志賛同を求め
 て西南役戦歿者墓碑を建設する所となりしか本年恰
 も六十周年を迎へ欽慕の念更に新なるものあり一對
 の石燈籠を献納し且聊か記念事業として墓碑の改修
 境域の擴張參道の補修を計畫し大方の贊助の許に
 釀金壹千餘圓を得茲に昭和十一年十月十七日竣工し
 一段の尊嚴を加ふるに至る
 冀くは行人此地に足を駐め往時を追懷せられむこ
 とを

昭和十一年十月十七日

熊本三州人會



薩軍本營並野戦病院跡碑

(正面) 薩軍本營並野戦病院跡
 (裏面) 西南役百周年記念を以つて
 昭和五十三年秋 建立
 熊本三州会一同

記念誌編集部

「西南の役 第100回慰霊祭」にあたって

熊本市議会議員 倉 重 徹

熊本三州会の第100回西南の役慰霊祭の開催にあたり、一言お祝いを申し上げます。

我が国最後の内乱となった西南の役に思いを馳せ、失われた若き尊き命と、世界的偉人西郷隆盛翁の勇気と偉大さを思うとき、敬天愛人の心は、熊本三州会100年の歴史とともに、私たちの心に今も脈々と生き続け、現代日本の礎となっている事を実感するものです。

第100回慰霊祭を通して、あらためまして皆様方の続けてこられた活動と、そして情熱と真心に敬意を表しますとともに、私も、その様な皆様方のお仲間として末席にいさせていただきます事に、衷心よりの感謝と敬意を表するものであります。

最後になりますが、熊本三州会の今後ますますのご繁栄と会員諸氏のご発展を祈念致しまして私からのお祝いとさせていただきます。



慰霊祭 100年に寄せて

理事 木 村 良 子

本籍の加世田市で戦後の一時期、祖父母に育てられた私が熊本に住み始めて20年になります。以来郷土愛で結ばれた皆様と共に慰霊祭に参加してまいりました。4月の第2日曜日は、時に真っ青な空と満開の桜の下であったり、花冷えの寒さであったり、又傘をさしながらの慰霊祭でもありました。住職さんの読経に耳を傾けながら、日本の先行きを憂いつつ戦った多くの人々に想いを馳せる一時は、歴史の流れの中にある小さな小さな自分を見つめる時でもありました。国旗を掲げて共に心を寄せてくれる地元川尻は、結婚後の本籍ということにも深い御縁を感じます。14年前“敬天愛人”の額をかかげ、鹿児島を心底誇りにしていた父を延寿寺に案内したことがありました。「薩軍戦没者を延寿寺や三州会の方々がずっと慰霊し続けてくれていたとは」と住職さんに深く頭を下げていた姿が忘れられません。

良き日本を願って西南の役で散っていった人々を慰霊し始めて100年という節目に立ち会える意義を深く受けとめ、平和な日本がずっと続きますよう願っていきます。

90周年記念誌を読んで記憶に残ったこと

理事 是 枝 仁

今年の慰霊祭は、100周年という大きな節目に当たり、熊本三州会の歴史と伝統の重さを痛感しますと共に、先人各位の「志」と「功績」を継承してこられた当会先輩諸氏に敬意を表し、心より感謝申し上げます。

また、100回目となる今、この慰霊祭に参列できたことを、何よりも誇りに思うものです。有難うございます。

90周年記念誌の中で延寿寺37世住職 蔵原恒海氏の「延寿寺と西南の役」を拝読し、海外では先ず考えられない、日本人特有の「武士道精神」がここにあった。

その文中で30代目延寿寺 伝弘応師住職が28歳（明治10年）の春、川尻に大本営を設けていた薩軍の（植木、田原坂、諸方面）負傷者、戦死者がぞくぞく運び込まれる中、薩軍は各寺院に戦死者仮埋葬をお願いしたが、皆後難をおそれ受け入れてくれる寺がない中、それを聞いた伝弘応師住職は決然として引き受けられた。

また「戦後、どんなお咎めがあろうとも、死を覚悟して言い開きをしよう」と深く決心されたと言います。埋葬し、読経廻向を収めた者が853名に及び、その名簿は現在でも延寿寺に保存されているそうです。

終戦を迎え、案の定軍部からの呼び出しに対し、伝弘応師住職曰く「各々立場は変わるかも知れぬが、我が身を捨て、尽忠報国、愛国の誠心に変わりはない。まして況や、死没すれば善悪一如、悉皆成仏で、仏に敵も味方もない。愛国の烈士として、懇ろに葬らしていただき、何も悔いるところはない。むしろ誇りとしている。」と死を決し、何を臆する事なく申し開きをされたとある。このような住職の毅然とした所作、言行にも強い感銘を受けたが、結局住職に対し、咎めなかった軍部にも衝撃的感動を覚えた。これこそが日本人「武士道」であろう。

最後になりましたが、熊本三州会の益々の発展を祈念しますと共に、今回このような寄稿の機会をいただき感謝申し上げます。有難うございました。

100周年慰霊祭をお迎えして

正会員 右田 重生

熊本三州会は、大正5年6月4日創立、同年第1回の大法要が開催されて以来、歴代の会長様始め、会員各位のご尽力により、長い歳月を経て歴史と伝統を築き、ここに第100回の慰霊祭が盛大に開催されますことに、深甚の敬意と謝意を表する次第であります。

創立以来熊本三州会は、薩摩軍戦没者の慰霊祭を、毎年中断することなく、歴史の深い延寿寺（熊本市南区川尻）において読経のなか焼香を行ない、御霊に哀悼の誠を捧げて参りました。

西南の役後、日本の歴史は大きく変化し、明治22年3月11日時の人西郷隆盛翁は、大日本帝国憲法発布により、「大赦」を賜わり「正三位」が追贈され、拳兵の賊名は除かれ名誉は回復されました。

まさに、日本が国家制定を確立するまでの近代草創期の歩みが、この時から始まったのです。

熊本三州会は、先人達の貢献した100年に至る歴史的役割に感謝し、関係各位の善意による記念銘碑の建立、記念誌の刊行を済し遂げました。

最後に、会員の皆様伝統の慰霊祭を本会の主旨に基づき、未来永劫守るため、格別なご高配を後世にも賜りますよう、心より祈念申し上げます。

「第百回薩軍戦没者慰霊祭」に出席して

遺族 池田 京子

四月十九日の「第百回薩軍戦没者慰霊祭」に出席させて頂き誠に有難うございました。

私の曾祖父、池田次左衛門（御船）曾祖父の弟、池田早苗（田原坂）が戦死しています。池田家と島津家は婚姻関係が深く島津斉彬公の母君も鳥取藩の池田家出身です。

第十四代、町田 貢は垂水隊長として垂水から四百五十名引き率れ出軍。城山にて戦死。町田家親族も戦死し、私の曾祖父（次左衛門）と曾祖父の弟（早苗）も含め八十五名戦死しております。遺族は十年以上賊軍扱いされ大変辛い年月を過したにちがいありません。

町田 貢の妻のお墓には大きな字で“自刃”と記されてあります。

西南の役においても鹿児島は大変多くの優秀な人材を失いました。若くして純粹に戦い、結婚も出来ずに亡くなった藩士の方々の事を想う時、非常に残念でなりません。

今一度これらの藩士の方々に光を当て、近代国家の礎となった方々に感謝し敬意を表し、世の中から忘れられる事なく継承していく事が繁栄の中で生活している私達の努めではないでしょうか。

最後になりましたが再び三州会皆様、関係者の皆様に深く深く感謝申し上げますと共に皆様方のますますの御健勝をお祈り申し上げます。誠に有難うございました。

お礼のことば

遺族 野 間 清 光

この度は、熊本三州会主催による西南の役薩軍戦没者第百回慰霊祭を、薩軍戦没者に縁の深い延寿寺で多数の御参加をいただき、盛大に、厳かに開催していただきまして、遺族として心から感謝申し上げます。

また、記念事業として、延寿寺の敷地内に記念銘碑を建立していただきました。この碑は、高さ約百八十六センチメートル、横幅約三百六十三センチメートルの大きさに御影石で造られ、戦没者八百二十八名の名前が刻まれた重厚で品格のあるもので、隣に聳え立つ巨大な西南の役薩軍戦没者墓碑とよく調和がとれております。熊本三州会の役員の方々の御苦心と細部に亘る御配慮がなされていることを強く感じました。

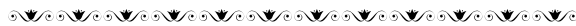
また、熊本ホテルキャッスルで開催された懇親会は、熊本県知事を始め、鹿児島、宮崎両県の副知事、陸上自衛隊幹部の御臨席もあり、百名を超える盛大な会で、熊本三州会の方々とも懇談し、親交を深めることができ、楽しく有意義に過ごすことができました。

西南の役後、鹿児島、宮崎両県出身の方々が、熊本の地でお互いに協力しながら三州会を結成し、郷土の誇りを忘れずにお互いに連携協力し、地域の発展に多大な貢献をしてこられたことに、深く敬意を表します。

第百回慰霊祭当日は、今にも雨が降り出しそうな天気でしたが、柏木会長さん始め役員の方々の人知れぬ御苦勞に天が報いてくれたのか、雨も降らず、記念銘碑の除幕式、慰霊祭が粛々と挙行されました。また、陸上自衛隊西部方面音楽隊の皆様が、すばらしい演奏をしていただき、記念行事に華を添えてくださいました。ほんとうにありがとうございました。心から感謝申し上げます。

この度の記念行事は、熊本三州会の役員の方々の真心のこもった百回目の節目にふさわしい立派なものでした。戦没者の御霊も、『後輩達もよくやっている』と感謝されておられることと思います。ここに、改めて記念行事に携われた関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

最後に、柏木会長さん始め熊本三州会の会員の皆様の御健勝と御多幸をお祈りしますと共に、熊本三州会のますますの御発展を御祈念申し上げお礼のことばとします。



御 礼

遺族 福 山 亨 ・ 正 子

第百回薩軍戦没者慰霊祭に出席出来ましたことととてもうれしく思っています。ひとえに熊本三州会遺族会の役員皆様の努力の賜物と感謝申し上げます。有難うございました。これからもよろしくお願い致します。

第百回三州会慰霊際に参列して

遺族 湯 田 秀 生

三州の先人達が築きあげてきた、熊本三州会主催の西南の役薩軍戦没者慰霊際に参列しました。今年は第百回目の節目を迎えたとのこと。関係者各位に甚深なる敬意と感謝の意を表します。新たに薩軍戦没者延寿寺埋葬者名碑が建立されて披露されました。碑の前に佇み明治十年の戦役に思いを馳せた次第でした。三百五十余名の中に曾祖父弥七郎の名も刻まれています。

弥七郎のことは家に残る系譜に以下のように記されている。

『・・十四歳正月鹿兒島番兵被命日数十五日ニテ帰邑 二十歳八月会津征討ニ従ヒ小銃隊被命彼方落城同十二月帰国 二十三歳ニテ東京御親兵務三々年ニシテ任滿帰国 明治十年丁丑二月県内総而熊本県出張ニ付七番小隊小頭務同県ニ於テ分隊長被命木留村ニテ官軍ト相距戦死 葬国県下川尻延寿寺 後改葬椿窓寺』

弥七郎は西郷隆盛の下野と時期を同じくして加治木に帰郷し、私学校加治木分校に在籍。九年八月に区長別府晋介の命により菅原小学掛の任にあった。十年二月十五日、妻と二歳の長女等に見送られて加治木を出発。この時、弥七郎二十八歳。弟弥五郎も出征。

祖先達は先鋒を担い六番大隊（加治木隊）として二月二十日に七番大隊と共に別府晋介の指揮のもと熊本市の南端川尻に到着している。高橋・百貫港方面<熊本市の南西部>の官軍との小競り合いに参戦の後、熊本城攻撃に参戦。その後南下する官軍との高瀬<玉名市>の戦に参戦。高瀬の戦に敗れ後退。十七日間に及んだ田原坂の戦の緒戦三月四日、吉次越に於いて抜刀突撃し銃弾を浴びて戦死。この日陣頭指揮の篠原国幹も銃弾を浴びて戦死。弥七郎等は麓にあった木留の薩軍病院に収容された後、川尻の延寿寺に搬送され埋葬されたのであろう。今は加治木町の椿窓寺墓地に眠る。

熊本に止住して五十数年になります。薩軍所縁の川尻の地に住まいを構えたのは、少しでも鹿兒島に近い場所、アクセスの良い場所と云うのが理由でしたが、心底には所縁の延寿寺の存在があったのかも知れません。

お 礼

会員・遺族 島 卓 郎

拝復 ご鄭重なお礼状を頂戴しまして大変恐縮いたしました。有り難うございました。

あの銘碑除幕式は僅か15分くらいで終わりましたが、あそこに到達するまでの時間とご苦勞は、いかばかりだったでしょう…。そして、100回記念の慰靈祭も、その名のとおり素晴らしいものでした。小雨が止み萌える若葉のなかで小鳥の囀りが聞こえ、戦没者と参会者の思いが天にも通じたとの感慨でした。また、会場を移しての記念懇親会も盛り上がりました。親しくご挨拶しお話する機会が与えられ、気分は大いに昂揚しました。

これだけの事業・行事が滞りなく整然と、そして感激的に行われるために、その周到な計画と準備の時間・労力更に当日の多岐にわたる働きがあったことを思うと、感動と感謝の念を覚えずにはおられません。そして、なんのお手伝いもできず申し訳なく思います。

熊本三州会の柏木会長さん初め役員の方々また瀬戸口事務局長さん初め係の方々に深甚の敬意と感謝を申し上げます。

私事になりますが、慰靈祭の焼香の場で、会員であり遺族であるとして名前を呼ばれたのにはびっくりでした。そして、そのスナップ写真までさり気なく同封していただきました。また、懇親会場で特別賞と言われて吉祥瑞鷹を頂戴し、これまた感激でした。厚く熱くお礼申し上げます。先ずは御礼まで。

敬具

平成27年5月4日

第七章

西南の役に係わる特別寄稿





西南の役と鎮西の守り

陸上自衛隊 西部方面総監
陸将 番 匠 幸一郎

熊本三州会の皆様には、1世紀にわたり脈々と、そして真の崇敬の誠をもって薩軍戦没者の慰霊と顕彰に尽力され、この度記念すべき「西南の役第百回慰霊祭」を迎えられたことに、心から敬意と感謝を表します。

九州・沖縄の防衛に任ずる西部方面総監に、鹿児島県出身者として着任し改めて思うことがあります。それは、今、我々が立つこの地は、古より我が国防衛の最前線であり、それぞれの時代の先人たちが、武を練り、命をかけて任務の完遂に全力を尽くして来た「鎮西の地」、「尚武の地」であるということです。また、現在の西部方面隊の起源は明治初年に設置された鎮西鎮台に遡り、その果たすべき役割が繋がっているのではないかとということです。

明治4年、熊本城に鎮西鎮台が創設され、故郷たる南西日本の守りを果たすために、第2代の桐野利秋少将をはじめ、野津鎮雄少将、種田政明少将、大山巖少将と薩摩出身の將軍たちが相次いで鎮台司令長官に補佐されています。しかし、明治10年に西南の役の開戦を迎えます。

時代の転換期にあって、新たな近代国家建設の理想に燃え、幾多の困難を乗り越えて明治維新を成し遂げた薩摩の先人たち、しかも同じ故郷で血の繋がりが先輩後輩の絆で結ばれ、共に育ってきた同志たちが、何故敵味方に分かれて戦わなければならなかったのか。本来共有していた理想は、何故相容れなくなって行ったのか。田原坂などの戦跡を訪ね、また、激しい戦闘の直後に熊本城内で撮影された薩摩出身者を含む鎮台幹部たちの集合写真を見ると、戦いの疲れと深い悲しみを湛えた表情を感じ複雑な思いが致します。

今年は、日清戦争から120年、日露戦争から110年、第1次世界大戦から100年、そして、自衛隊が創設されて60年が経つ節目の年です。「鎮西は国を治める基本」と言われて来ましたが、現代において、その「鎮西」を担う者として、幾多の国難に際して敢然と戦った先人の血と魂は、静かに、そして確実に我々の中に生き続けていると自負しております。

近年、決して楽観することのできない我が国周辺の情勢や、テロ、サイバー、大規模災害等、複雑な安全保障環境の中で、西部方面隊は国防衛の「最後の砦」として、この素晴らしい故郷の国土と国民を、現在も未来もしっかりと守っていかねばなりません。時代が移り、今国防の務めに就く我々は、先人たちが求めてやまなかった日本の平和と繁栄を更に発展させるため、その志を継承し、変化を見極めつつ進化を促進し、この時代に生を受けた者としての「時代の責任」を誠実に果たして行かなければならないと決意を新たにしております。

「西南の役第百回慰霊祭」にあたり、戦没者の永久に安らげく鎮まり坐して、日本の安寧と弥栄にご加護を給わらんことを、そして熊本三州会の益々のご発展を衷心より祈念してやみません。



西南の役に想う

陸上自衛隊 第8師団長
陸将 山之上 哲郎

第2次世界大戦の終戦から70年、日米安全保障条約発効から55年と云う節目に、この度、熊本三州会が墓碑設立百周年を迎えられましたことを心からお慶び申し上げます。

貴会は、大正5年の設立以来、幾多の混乱の時代も途絶えることなく一世紀も「西南の役薩軍戦没者慰霊碑」の建立をはじめとした薩軍戦没者の慰霊、ご遺族の皆様方相互の親睦交流などの活動を続けておられます。これは、多くの先人の皆様、そして今日では柏木会長をはじめ会員の皆様方のご尽力の賜であり、心から敬意を表します。

さて、明治10年の熊本県内が主戦場となった「西南の役」は、近代日本誕生の混沌から新しい国家像が導き出される過程に起きた「日本史上最後の内戦」であり、また、両軍が国の行く末を思い戦った「誇り高き戦い」であります。このような意義ある戦いであったが故に、一世紀以上も経った今でもその戦いぶりが語り継がれ、手厚い慰霊が続けられているものと思います。

明治6年、征韓論を受け入れられなかった陸軍大将西郷隆盛は、参議を辞職し野に下り、悠々自適に過ごしていました。そんな中、明治7年、江藤新平による「佐賀の乱」など士族による反乱が多発し、政府が鹿児島にある火薬庫の武器・弾薬を隠密裏に大阪へ移送しようとしたため、これを察知した私学校の生徒たちが明治10年に火薬庫を襲撃したのです。西郷は、下野してからも反政府的な言動・行動をとることは一切なかったのですが、激昂・暴発した私学校生徒の抑制を諦め、「もう何も言うことはなか。おはんらがその気なら、おいの体は差し上げもそ」と言うことで、西郷を擁した桐野利秋、篠原国幹などの諸氏が「政府への尋問の廉有之」と北上したのです。西郷としては決して望んだ戦いではなく、「天の時」を得られぬまま時代の大きなうねりに突き動かされるかの如く戦いに突入してしまったのです。

その薩軍は、西郷が下野する際に「敬天愛人」を実践する西郷を慕い政官軍人の職を辞し薩摩へ戻った約600名の方々と三州人の旧士族で構成され、西郷を核とする強固な「人の和」によって士気高らかに戦いへと赴いたのです。

この戦いは、2月22日の熊本城総攻撃に始まりますが、籠城軍もよく守って容易に攻略することができずに、その後、戦線は北の玉名・山鹿へと展開しております。

当時、久留米から熊本に至る経路は、海岸沿いと南関方面の2経路に限られて、海岸沿いは人馬がやっと通れる程度で、大砲が超えられる唯一の道路が南関方面の田原坂でありました。

この田原坂の蛇行した見通しの悪い堀切道は、約400年前に加藤清正公が外敵の侵入を防ぐために北の要衝として造ったものですが、官軍は、薩軍の熊本包囲を破り、熊本城を解放するためにはどうしても、「守るに易く、攻めるに難し」田原坂を通過せざるを得なかったのです。この田原坂で3月4日から20日まで両軍の死力を尽くした近代戦を含む歴史上稀に見る局地的大激戦が行われましたが、薩軍は、「地の利」を大いに活かし兵力・装備等の劣勢を補うとともに、川尻の人々の手厚い兵站・衛生支援を得て官軍と互角の戦いをしたのです。

第8師団長である私は、この西南の役で我が国の将来を思い勇敢に戦った軍人の遺志を受け継ぐ現代の防人として、三州人として、「天地人」を得てこの素晴らしい日本と国民の生命・財産を断固として守り抜くために、「敬天愛人」の教えを実践しつつ、隊員とともに災害等を含むあらゆる事態に迅速かつ確実に対応できる実力を備えるべく日々精進する所存でありますので、今後とも皆様方の御支援と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

終わりに、熊本三州会の益々の御発展と会員の皆様方の御活躍・御健勝を心からお祈り申し上げます。

霊峰山 岳林寺の沿革について

岳林寺住職 工 藤 征 英

熊本を東流して、井芹川に合流する麴川の中流南岸、石神山の北西麓に位置しています。山号は霊峰山、如意輪観世音菩薩を御本尊とする曹洞宗の古刹のお寺であります。熊本33番観音の12番札所です。「肥後国誌」によれば、天正9年（1581年）熊本城々主 城親賢の建立とするが、天平宝字年中（757年～765年）草創で、律宗に属し、後荒廃したとも言われています。慶長年中（1596年～1615年）禅定寺2世顕岩宗允が再興し、以後禅定寺末寺に属したが、延宝2年（1674年）坂崎清左衛門成政の屋敷となり、1反3畝27歩を替地として与えられて現在地に移ったと言われています。

現在の本殿は、昭和60年に、更に山門が、平成元年に新築されました。山門の梵鐘が朝な夕なに刻を告げています。大晦日には、本堂で般若湯を戴き、除夜の鐘を地域の人達に、ついて貰うのが、恒例になっております。

境内には、熊本の春の風物詩となっている、植木市の草創者である、城親賢公のお墓と五輪の塔が立っています。他にも宮本武蔵の兵法「二転一流」の継承者である、五代目山東彦左衛門、六代目半兵衛清明、七代目新十郎清武さらに八代目の青木規矩男（島崎の出身）先生の墓碑も正面にあります。梅の花ほころび始めるころから、新緑の若葉、さらに秋の紅葉シーズン迄、散策のコースの名所ともなっています。皆様、一度訪ねられては如何でしょうか！

補足 岳林寺と熊本三州会^{えにし}の縁について

岳林寺住職により毎年11月10日に「西南の役」段山薩軍戦没者慰霊塔前で慰霊祭が行われている。熊本城の北西に位置する段山から藤崎台一帯は、熊本城攻防戦における最大の激戦地であった。2月22日から翌日までの戦いの中で段山口では薩軍の一番大隊長篠原国幹が自ら率先して太刀を振るい戦い、それに従う兵は、皆奮激し突進したという。藤崎神社では、官軍の第13隊長与倉知実中佐が被弾（同じ日に与倉の妻、熊本城内で女兒を出産したが娘の顔を見ることなく）して翌日戦死。

続いて樺山資紀中佐が負傷するなどして、一時は薩軍が優勢しこの地を占領したが、官軍は3月12日から2昼夜にわたる猛攻な出陣戦を繰りひろげ、薩軍から奪取した。官軍の死傷者は773名、薩軍の死傷者は不明であるが、死者は300人に達した。

「熊本城 歴史と魅力」富田紘一著

この様に籠城戦中最大の激戦であった段山。何と、1975（昭和50）年、段山地区井芹川河川改修のおり川底から無数の薩軍将士の人骨が発掘された。井芹川河川の一角を地元の林 則行氏から提供があり、その場所に2年後の昭和52年12月に熊本三州会が「西南の役」段山薩軍戦没者慰霊塔を建立して今日に至る。

毎年11月10日に挙行される段山慰霊祭は今年で挙行されれば38回目となり、初回の慰霊祭から岳林寺の歴代の住職に読経を挙げて頂いています。

記念誌編集部



大叔父佐々友房の賭けた想いとは

崇城大学
学 長 中 山 峰 男

西南の役第100回慰霊祭を迎えられましたこと衷心より敬意を表したいと思います。大叔父に当たる佐々友房が薩軍に加わり戦った西南の役は、小生にとって精神性の原点にあります。友房は何故戦わなければならなかったのか。官軍への勝算を確信しての戦いだったのか。小生の中の友房は応えます。信義のための戦いだったと。西南の役の一年前に神風連の乱が起こり、戦死や自刃もしくは処刑により123名が死亡したと言われています。友房にとって多くの知人が乱に散りました。戦うことは死を覚悟することであり、にもかかわらず友房は決起を求めて西郷翁に会いに行きました。下級武士ではありましたが、武士の魂と国家の行く末を案じてのことだと思えます。武士の魂を全うするため西南の役に命を懸けたのだと思えます。自らの心に素直に従い、名誉を守って信義を通したのでしょうか。死を意識することでより強く生きることができたのだと思えます。西南の役はそのような崇高な精神を持った人々の戦いであつたと思っています。



「西南の役 第百回慰霊祭記念誌」寄稿

鹿児島県人会八代おはら会
副会長 松 山 和 紀

鹿児島おはら節に「西郷隆盛世界の偉人 国のためなら死ねというた」と唄われているように、西郷隆盛について、わが郷土では子供の頃から世界に誇れる偉人として崇めてきた。

郷土が誇る多くの偉大な先人たちの中で、明治維新の最大の功労者である西郷隆盛を中心とする西南の役は歴史に大きな教訓を残した。

郷中教育で心身を鍛え、よき指導者に恵まれ、幾多の困難を経験して「敬天愛人」の天理を究めて人間最高の理念を教えてくれた指導者である。

第百回慰霊祭を迎えるにあたり、改めて「南洲遺訓」を究め「心の温かさ」の精神を理解する機会としたいと思う。

熊本三州会は先人から引き継いで来られた慰霊祭を延寿寺の寛大なご高配と関係者のご苦労とご協力によって執り行い、戦跡巡り、顕彰の旅など、総会における講演会を通じて、先人の偉業を偲ぶ縁が第百回を迎えることに深甚の敬意を表し、熊本三州会の益々のご発展を祈念します。

鹿児島県人会八代おはら会は総会、観月会に毎回歴代会長はじめ役員各位にお世話になり交流を深めて頂いていますことに感謝いたしています。

第百回慰霊祭には会長はじめ会員挙って参加させて頂きます。

記念事業の関係者の皆様方のご健勝とご成功を祈念申し上げます。



西南の役と川尻

川尻町文化の会
名誉会長 西

輝 喜

明治10(1877)年2月20日、誰が作った歌なのか薩軍出陣いろは歌「英名あえて好まねど、非道をせむるは天の道 せめてはつくすもののふの 数万の民をすくわんと 今日をかぎりの死出の旅」と歌いながら別府晋介率いる先鋒大隊1600人は川尻町へ到着し、本隊受入れ準備に取りかかった。

21日 桐野利秋の2番隊、続いて各大隊が続々と着陣し、その夜外城町の泰養寺(本部)に集まった各将たちは、先年熊本鎮台司令長官だった桐野利秋を中心に作戦会議を持ち、川尻を薩軍後方基地と定め、その翌払暁、熊本城攻撃へと出発した。

23日 鹿児島を本隊と同時に出発した西郷は、えびの高原吉田温泉に一泊し、本営と定めてあった川尻町の廻船問屋塩飽屋に着いた。塩飽屋前には金峰山から吹きつける北風を苦ともせず沢山の人ばかりである。塩飽屋の蔀を上げた入り口脇には「新政大総督征討大元帥西郷隆盛」と大書した標札が掲げられている。

群衆に動揺が走った。西郷が姿を現したのだ。その時の様子を「川尻町史」は次のように伝えている。「自ら陸軍大将の大礼服を着し、号令嚴重部位整肅に構へたり。其の景況は漢の高祖が関中に入りたる時の如く(鹿児島電報記)。と旗本の兵を率いて塩飽屋に着陣した西郷の様子を伝えている。関中とは陝西省渭水盆地一帯の古称である。つまり劉邦は項羽を破って全国を統一し、高祖と称して長安(今の西安)に前202年、漢という王朝を築いた。その際、威風堂々と長安にやってきた劉邦の姿を西郷に重ねたのです。

さて川尻町には15のお寺がある。戦は熊本城攻防戦が続くなか、さらに田原坂、植木と激戦が展開され、戦死者、戦傷者が次々と担架で運ばれてくる。各寺院に戦死者の仮埋葬を依頼するも、薩軍の戦況不利の噂に後難を恐れ後込みする。ただ延寿寺住職伝弘応師は「死者を成仏させ、供養するは僧の務め、先々お咎めを受けても悔いはありません」と引き受けた。

師は几帳面に戦死、戦傷死者の場所・期日・姓名等を帳簿に丁重に記入して埋葬すると読経、回向を修めた。その数、3月2日より4月4日までで853人であった。

戦終わると軍部から呼び出しを受けた。師は「仏に敵も味方もない。皆愛国の烈士である。懇ろに葬らせていただきました。何も悔いることはありません。むしろ誇りとしています」と申し述べたそうです。結局何のお咎めもなかったようです。その歳28歳の若さでした。当時人々は墓地を薩州墓と親しく呼んで伝弘応師を尊敬と感謝の念をもって語り伝えていましたが大正2(1913)年64歳で遷化されました。なお毎年4月第2日曜日の薩軍合同碑前の招魂祭当日には、延寿寺への横町道路の家々では半旗を掲げ戦没者を悼んでいます。



語り継ぎたい川尻の歴史と文化

川尻文化の会
会長 荒 金 鍊 一

川尻は史跡の宝庫といわれるように、全国で一番大きな外城蔵、藩米集積の船着場、細川水軍の係留・居住地と川尻外城を結ぶ御船渡し場跡の三ヶ所が、貴重な国の史跡として平成24年に指定を受け、米蔵は修復後、平成30年に一般公開されることで、大切な三つの遺産が甦った気がしています。さらに、寒巖義が開山した名利大慈禅寺、狭い町に点在する15の寺、辻の地蔵、由緒ある神社や祭り、庶民の生活に根づいてきた鍛冶、染物、桶、和菓子など、遺していきたいものが数多くあります。

ところで、明治10年(1877)に鹿児島士族層を中心とする薩摩軍と明治政府軍とで、日本近代化のため最後の内戦といわれる西南戦争がありました。交通の要所であった川尻は、回船問屋・塩飽屋に薩摩軍の大本営が置かれ続々と川尻に集結した薩摩軍は、野営や民家寺院に分宿するなど町全体が高揚した雰囲気と、一方では多くの混乱があったようです。

熊本城に進撃した薩摩軍は幾度となく攻撃を繰り返し、負傷、戦死した薩摩軍兵士は川尻に運ばれ治療や看護を受けましたが、政府軍の目を恐れた賊軍という立場から死亡しても弔う場所は皆無であり、延寿寺の伝弘応和尚は「死者に鞭打つことは仏の道に反する」として寺領を提供し、戦没者853柱を埋葬した記録を読むと、「勝てば官軍、負ければ賊よ」という歴史の流れにももの哀しさを感じます。

また、川尻では、薩摩軍の戦傷者を収容する大小幾多の病院が開設され、その数や収容人員と病舎及びその所在地を明らかにした「薩摩病舎及び手負人数書抜」があります。記載内容の一部を記すと「死者五名、壺番病院 法宣寺」「七拾名 二番病院 延寿寺」「二拾名 三番病院 浄慶寺」「四拾壺名 五番病院 川田虎八」「三拾四名 四十八番病院 吉永順治」「九名 百十八番病院 金森寿八」とあり、傷ついた薩摩軍兵士を川尻の15の寺、97戸の民家等、計119ヶ所で家内総出町を挙げ、2,923名に対して手厚い看護がされた様子が記されています。川尻が西南戦争を通し激しく翻弄された中で、ほのぼのとした温かさを感じると同時に、西南戦争を語る上でこれらのことは、敬天愛人の精神にも通じ風化させてはならないと思います。

歴史には、人が代わり、時代の波に洗われても遺した先人の思いや言葉があります。思いを生かし語り継がれていくことは、今に生きている人たちの務めかもしれません。



古写真に見る西南戦跡・熊本城攻防戦

熊本市文化財保護委員
熊本城顕彰会理事
富田 紘 一

西南戦争は日本最後の内戦であるとともに、新政府の陸軍が始めて展開した大規模な組織戦でもあった。そこで装備・作戦・通信など近代戦の実験や使用も多かった。法華坂や京町に敷設された地雷がそうで、風船爆弾のテストも行ったという。戦場が組織的に写真で記録されたのもこの戦いであった。

長崎の上野彦馬は軍の依頼を受け撮影のキャラバンを率いて戦場に赴いた。熊本の富重利平は熊本鎮台に頼まれ、籠城準備や戦跡を撮影している。一方薩軍でも、熊本の写真師中島寛道に命じて攻撃中の熊本城を写真にとらせた。そこには好んで戦場となったわけではないが、140年前の激しい戦場と生々しい熊本が映像として蘇ってくれる。

当時の写真撮影はまだ湿板写真の時代で、撮影する現場でガラスの原板に感光液を塗布し、撮影後にその場で現像するというものであった。そこで現代の戦場写真のように、カメラ片手に走りまわり、戦場を写すというものではなかった。戦跡撮影の日時を示す写真はこれまで1例だけ知られている。それは田原坂から吉次峠方面を写していて、台紙の付箋に4月1日と書いている。田原坂は3月20日に突破されており、突破から10日後の撮影である。

今回の記述では、紙数の関係で多くを触れられないが、熊本城の戦跡を1枚紹介しておきたい。この写真は、熊本城の南面の中央にあたる、下馬橋付近の様子である。現在の長堀正面通りから下手を望んで撮影している。中央のやや右に小規模の「書物櫓」残存している。その下方から画面左端に橋脚が並んでいるのは下馬橋である。

書物櫓の右（馬具櫓跡）石垣の上には堡籃を廻らせた防塁がうつる。その塁を観察すると、一部に連続しない部分が見える。歩兵の陣地では堡籃の上から敵を攻撃するが、ここに写るのは大砲を打つ砲門である。2月22日未明、順次川尻を出発した薩軍の部隊は、午前六時、安巳・長六の二橋を渡り進撃する。これに対して、籠城軍は下馬橋の砲台より砲撃すると、飯田丸・千葉城の砲兵や竹ノ丸の歩兵も攻撃を開始した。まさにこの写真の場所がこれから50余日、籠城戦の火蓋を切った記念すべき地点であった。



徳富蘇峰の見た西南の役

徳富記念園
元館長 藤川博昭

徳富蘇峰は西南の役について、「近世日本国民史（全100巻）」の95巻・「西南の役緒篇」から99巻・「西南の役終局篇」までの5巻に渡り記述しています。中でも力を入れて資料収集・執筆にあたったと思われるものが次の4点です。

①西南戦争を起こした張本人が木戸孝允であること ②「大久保利通が西郷隆盛の暗殺まで命じた」とする説についての否定（言うも愚か） ③田原坂の攻守戦における薩軍（岩元太郎・柿本軍平等）や熊本隊（佐々友房・高橋長次等）の覚悟や思い ④「西郷隆盛は永く死せず」とする大西郷に対する評価

以下、西郷隆盛に対する蘇峰の評価について99巻・「西南の役終局篇」を一部引用し紹介いたします。

「第20章 西郷隆盛は死せず」より

本文の記者（蘇峰）は十年の戦後、創痕未だ全くいへざる薩隅^{さつぐう}地方を遊歴した。

おおよそ世の中に鹿児島ほど西郷先生の戦さのために迷惑したものはない。家は焼かれ、身は殺され、財産は失くなり、何人も西郷先生のために迷惑をしないものはない。容易に忘れ難き苦悩^{こうむ}を被った。

しかし、彼等の何人も、西郷先生^{えんげん}に向って怨言^{えんげん}（うらみごと）を発するものなく、ただ死せる西郷先生^{えんげん}を、今ま猶ほ生ける西郷先生^{えんげん}の如く崇拜^{すうはい}し、愛慕^{あいぼ}してゐる。

之は何故である乎。

世の中に偉い人が沢山いる。しかしながらその偉い力を十中九までは己れに用い、己れのために用いている。併し西郷先生は、その力を自分のためにした事は一点もない。その偉い力を君のため、国のため、人のため、道のために捧げている。

それで皆様方が、怨むどころではない、恨むなどは勿体ないと考えている。自分は子を失い、親を失い、夫を失い、家を失い、色々なものを失いつつも、西郷先生の心は可哀さうである、誠に西郷先生に對して同情の涙がこぼれるというような事になっている。

西郷先生が日本國民に、生ける英雄として千古に存する所以は、其の殊勲でなく、彼が國家に奉仕せんとする偉なる心の持主であったからである。

西郷は永く死せず。日本國の存する限り、彼は日本國と共に生きるであらう。大和民族の存する限り、彼は大和民族と共に生きるであらう。

田原坂・熊本城・川尻町

—西南戦争の点と線—

熊本市役所文化振興課
中原 幹彦

越すに越されぬ田原坂、火攻め水攻めに耐えた金城湯池の熊本城、大西郷が本陣と定めた四通八達の地川尻町。これらは熊本の西南戦争を語る上で最も重要な場所で、これらを結ぶ一帯が主戦場になった。戦国時代の名将加藤清正が熊本城防衛の要とした田原坂は、皮肉にも明治時代には熊本城の開放を急ぐ政府軍の大きな障壁となり、一方、西郷隆盛は熊本城から北に進むことはできなかった。

薩摩軍が西南戦争のはじめ川尻に本陣を置き、戦いの指揮を執ったのはここが陸路と水路の結節点として栄えていた大きな町で、多くの住民が住む家屋があり、豊富な物資の集積地であったからに他ならない。薩摩軍はわずか十年前には、京都から合津、函館に至る戊辰戦争において明治新政府軍として、あまたの戦闘を繰り返し、戦いにおいては何が必要であるかを熟知していた。そして、自分たちこそ、日本国の正統軍であるとの自負を、強烈に心に秘めていたであろうことは想像に難くない。

しかし、薩摩軍は熊本城を落とすことも、田原坂を抜くこともできなかった。西南戦争の雌雄は、熊本城をめぐる攻防で既に決していたのであり、田原坂の戦いは極めて重要な転換点だったのである。

また、薩摩軍は維新の英雄西郷隆盛を大将に頂く剽悍決死の武士の集まり、強く大きな点であり、政府軍は士族もいたものの徴兵が多い弱く小さな点だった。だが、政府軍には小さな点を結ぶ強く太い線があり、薩摩軍の点を繋ぐ線は弱く細かった。点と線、それは戦争遂行において、極めて重要な兵員の質、量と物資補給などの後方支援体制の充実度との天秤である。

政府軍では、当時の最新技術である電信による情報伝達、艦船での大量の兵員、物資の運送、周辺海域の警備、軍艦の砲撃、攻撃など、小さな点と点を結ぶ線として大いに利用され、いずれも薩摩軍が持ちえないもので次第に薩摩軍を追い詰めていった。電信は瞬く間に大阪や東京に戦況を伝え、各種の指示や命令がすぐに発せられ、物資も届く。対して、薩摩軍は内容を書にしたため、人に託し、馬で徒歩で伝える。あるいは人が出向く。物資は現地で調達する。象徴が貨幣としての裏付けがない薩摩軍軍票の「西郷札」である。そこには、大きく圧倒的な絶望的ともいえる差があった。豊富な物質は戦意を高揚させ、欠乏は戦意を挫く。

ここに、彼我の大きな差があったのであり、新旧の銃や戦服の差のみで西南戦争の勝敗を語ることはできない。兵卒、武器、弾薬、食糧など、補充がきく政府軍は勢いをつけ、もはや気魄だけでは戦争に勝てない時代であることを、強く大きな薩摩軍に見せつけることになる。

先の大戦の南方戦線において、物質を米軍は飛行機から投下したのに対し、旧日本軍は人が担って運ぶという差があったと聞く。なぜ、弱い政府軍が勝ち、強い薩摩軍が負けなければならなかったのか。なぜ、戦闘に強くとも、戦争に負けるのか。輻重に代表される物質補給、後方支援の重要性を、近代戦において、初めて見せつけたのが西南戦争であった。田原坂、熊本城、川尻町を結ぶ点と線の関係は、その後の西南戦争の趨勢と帰結を暗示していたのである。

大西郷という人

在熊宮崎県人会
会員 上米良 恭 臣

はじめに 好きである。とにかく好きなのだ。我が理想であり、人生の指針であり、生死でもある。それが私の信奉尊崇する西郷隆盛先生である。会ったこともなく、会えるべくもないが、もしあの世とやらでお会いできれば、『小僧よく来た』と云われないものだ。

姓に大を冠して大西郷と呼ばれ、先生を付けて今に親しまれるが、他に大を冠せられる人は大楠公以外には知らない。大楠公の場合は子息小楠公楠木正行公との区分であって、親子の分別の意味でしかないだろう。永く戦も無い平成の御代に生きる者として、その大西郷先生を述べるのは、実につらい作業である。小西郷の駄文に墮するのを怖れるのみである。

夜這いのごたる 明治十年二月、熊本城攻防の戦端から始まった西南戦役は八月半ば可愛嶽の闘いで重大な転換期を迎えた。八月十五日の和田越えの敗戦時から薩軍の指揮権は桐野利秋から西郷さんに移った。(熊本城攻城戦、田原坂の敗退、人吉や宮崎、延岡への転戦まで西郷さん指揮の気配はない)

政府軍に十重二十重に包囲され、追い詰められた長井村での軍議によって負傷者の帰投、希望残兵の薩摩への帰郷が決せられた。軍令に一我軍の窮迫、此に至る。今日の策は、唯、一死を奮って決戦するにあるのみ。此際、諸隊にして、降らんと欲するものは降り、死せんと欲するものは死し、士の卒となり、卒の士となる。唯、其の欲する所に任せよ一壮絶な西郷さんの決意表明であった。長井村の後背、包囲軍の手薄な可愛嶽を登攀して故郷鹿児島への突破口を開かんとした。その数僅か六百とも言われる。可愛嶽は標高七百メートルだが、険阻急峻の道なき道である。地元の案内人を頼み、馬にははみを咬ませ、兵は無言で攀じる。滑ったり転んだりの連続である。西郷さん、ふと『こらあ、夜這いのごたるな』。忍び笑いととともに兵の緊張は一挙に解かれ、脱出の成功に繋がったという。この伝聞から、西郷さんも夜這いをしたことがあったのだと、微笑むのは私ばかりではなからうが、喫緊の際の巧まざる眩きの偉大さも想うのである。翌十七日には政府軍の総攻撃が予定されていたのであるから、岩倉具視軍監をして『九初の功、一簣に虧く(きゅうじんのこう、いっきにかく)』と言わしめた快挙となった。

命も名もいらぬ……幾度の辛酸を嘗めて志始めて堅し。官はその人を選びて……

これら三つの『大西郷遺訓』は維新の成功と失敗、城山での壮絶な戦死に至る大西郷の規範、精神、面目を伝えて妙である。

『生命もいらぬ、名もいらぬ、官位も金も要らぬ人は御し難き(始末に困るとも)ものなり。然れども此の御し難き人にあらざれば、艱難を共にして国家の大業を計るべからず』という遺訓は膾炙しているが、実は其の後に『慶喜公はよい御家来をお持ちになった』と続く。江戸無血開城の約が成った折、西郷さんが勝海舟に語った言葉とされる。慶喜公のよい御家来とは誰か。山岡鉄舟のことであった。鉄舟はこの時、官軍重囲の中、単身駿府の西郷さんに面接し強談判に及んで、下拵えをした。その人のことである。冒頭私は、西郷さんが好きだと書いたが、この山岡鉄太郎高歩(たかゆき)先生も堪らなく好きだ。命がけの激しい応酬の末、両雄肝胆相照らす場面は想像するだに血が騒ぐ。命も名も名誉も金も要らぬという両雄の生き方こそ大西郷の真面目と言ってよい。

明治という時代は枢要に英傑を得た時代でもあった。そしてまた、両雄の事跡や生き方からは二人に通底して幾歴の辛酸を嘗めた事がみえて来る。究極の哀切を知るものこそ沈黙や真の涙の意味を知っている。

西郷さんが鉄舟さんに齢若き 明治天皇の養育を託し、侍従就任を懇請した事、鉄舟は明治五年より十年を限りとしてこれを請け、提携して国家の磐石を築いてゆく。まさに『官はその人を選びて之を授けよ』である。照らして今日の政治、世相や如何。幾歴辛酸志始堅 丈夫玉碎愧軫全 一家遺事人知否 不為児孫買美田

第八章

西南の役との係わりを語る



川尻 延寿寺にある「西南の役薩軍戦没者墓碑」



三州人の想い

前会長 西 郷 恵一郎

知覧から鹿児島市に向う途中、知覧峠を下り始めると右側に錦江湾、左前方に桜島の素晴らしい景色が広がってくる。父は青春時代この景色を見て将来の夢を描き、活力を得ていたと思う。父は昭和20年から約7年間熊本三州会会長、名誉会長を務めた。熊本市医師会長、熊本県医師会長、日本医師会の役員を務め、一方開業医として日本の医療に貢献した。川辺中学の学友石島治志さんは熊本NHK局長の時、父の後任として熊本三州会会長をされた。その後NHKの理事として活躍された。昭和30年から熊本三州会会長をされた六反田藤吉先生は熊本大学微生物学教室教授、その後熊本大学学長そして一般財団法人化学及び血清療法研究所の所長をされた。ポリオワクチンの開発、製造でポリオの予防に尽力された。父が知覧に帰郷した折、川辺中学生の六反田先生と出会い熊本大学医学部に入るようにすすめたと話していた。熊本県医師会長、日本医師会副会長の白男川先生が熊本三州会会長の時、それまで山下太利会長の下で副会長をしていた私が引きつづき副会長を務めた。その後会長を務めたが後任の会長を探すのに大変苦労した。幸い、熊本市医師会長、熊本県医師会長、熊本市教育委員長などの要職を務められた柏木先生に会長を引き受けていただくことができた。先生のお人柄と並はずれた力量により熊本三州会は発展し、来年西南の役第100回慰霊祭を迎えることが出来るようになった。私は熊本三州会を通して多くの三州出身の方に出会った。元熊本鹿児島県人会会長、元熊本三州会顧問の故野中實男先生、元熊本鹿児島県人会会長、熊本三州会顧問酒匂光郎先生（私の従兄弟）は川辺中学出身でともに一般財団法人化学及び血清療法研究所の所長をされた。お二人には私が熊本三州会会長のとき大変お世話になった。三州出身の方がそれぞれの人生を見事に歩んでおられる姿に接し、三州人であることを誇りに思っている。三州は西郷隆盛をはじめとして多くの偉人を輩出している。三州出身者は夢と情熱をもってより良い社会を作るために活躍してきた。私は毎年知覧の私の武家屋敷に帰り墓参をしている。その道すがら桜島、錦江湾を眺めて自分の夢を思い起こし、さらに新たな夢を描き明日に向かって前進している。

三州人の想いは燃えあがる桜島の情熱と果てしなく広がっていく錦江湾のような広大な夢である。



西郷隆盛の国づくりに懸けた想いに寄り添う

顧問 三浦 一水

まず初めに、西南の役第100回慰霊祭を迎えるにあたり、大正4年の第1回目より今日までの長い間、慰霊祭を支えてこられた関係各位のご労苦に心から敬意を表します。

その、激烈を極めた西南の役に散った西郷隆盛について、私の想いを一言述べさせていただきます。

日本が近代国家への移行を遂げる際に、西郷隆盛は、大久保利通と共に薩摩人として欠くことの出来ない役割を果たした人物でした。特に明治維新を迎えるまでの西郷は、各藩との垣根を作らない連携の中で江戸城の無血開城を成し遂げたように、人間愛に満ちた比類なき存在であったと認識しています。

明治維新とその後の我が国の近代化の歩みの中で、官僚による組織的運営に重きを置いた大久保、士族に準拠し加えて強い信念と平等博愛の精神で国造りに臨もうとした西郷。二人のその後の歩みの違いは、好むと好まざるとに関わらず我が国の方向を決定づける事となってきました。

今の社会から省みると、その後の我が国の歩みは官僚組織を中心とした中央集権的歩みに思えます。

その体制は我が国の富国強兵、産業振興、大戦後の立て直し等、歴史の中で大きな役割を果たしました。が、一方で、今日まで続く官僚中心の国家体制をも残してきており、その負の財産と言えるのも少なくないでしょう。

西郷の思想については、書物・文献等を通してしか知る術がない今日ですが、人を大事にする姿勢は、「敬天愛人」の精神に裏付けられていると思います。

西郷が今しばらく長生きし、明治新政府に対してより一層の関与が果たせていれば、その後の我が国の民主国家としての歩みが少しく今と変わったものになっていたのではと思うと大変残念な想いが残ります。

新しい日本国の為と理想に立ち上がった薩南健児の胸中をおもんばかり、自らが先頭に立った西郷隆盛。

彼の生きざまと目指したものを胸に刻み、語り継いでいかなければならないと改めて感じる所以です。



薩軍兵士の墓地に佇みて

熊本在住鹿児島県人会
会長 池 満 淵

西南の役第 100 回慰霊祭がかくも盛大に執り行われますことを心からお祝い申し上げます。毎年のことですが、延寿寺や地元町民の皆様の温かいご協力と、準備にあたられた熊本三州会役員の方々のご尽力に敬意を表する次第です。

今、我が国は政治、経済などあらゆる面で先行きの見通し難い困難な時代を迎えています。時代の大きな転換点ということでは、文明開化という大波に洗われていた西南の役当時も同様であったろうと思います。延寿寺の桜花舞い散る下で慰霊碑の前に佇むとき、時代が大きく転換する中で日本の将来を憂いながら志半ばで斃れられた薩軍兵士の心情に思いを馳せ、その御霊安かれとお祈りするものであります。こうした思いや祈りは、今の時代において私たちが過去を振り返り、今後のあり方を考える意味でも、大変意義深いことと感じます。

私が現在勤務している学校法人尚綱学園は、明治 21 年に済々黌附属女学校として設立されました。創立者の佐々友房、初代校長の内藤儀十郎の両先師は、西南の役で熊本隊として薩軍に加わり、戦破れて獄に投ぜられた方々であります。佐々友房先生は、学校創立の趣旨の中で、家族、社会、国家を支える女子の教育の重要性を訴えるとともに、西洋文明の表面的模倣に流れた安易な西欧化の風潮を憂い、日本人が古来大切にしてきた徳義と淑徳を尊重する精神を失ってはならないと戒め、その上で、新しい時代への変化に正しく対応できる智と徳を兼ね備えた女性の育成を提唱しています。その創立の趣旨は、尚綱学園の建学の精神として常に遵守されてきました。今、我が国では、時代の転換点にあつて、教育再生や女性の活動促進が大きな課題となっています。私どもは、私学として果たすべき使命を改めて自覚し、将来に向けて誤りなき対応をして行かなければならないと決意を新たにしている次第です。



西郷南洲翁 没 138 年を迎えて

熊本在住宮崎県人会
会長 二見 郁 男

都城盆地の片田舎で育った腕白の幼年時代兄達と大声を挙げながら「西郷隆盛は、おいらの親爺。国の為なら死ねと云った」と意味もわからず叫びながら遊び回った事を思い出している。小学1年生の頃、職員室の前、廊下に西郷どんの写真がかかっていたのを覚えている。西郷どんは偉い人であったと意識する様になり、祖父母をはじめ諸先生に、西郷どんの逸話を聴く度に興奮した。あの風格風貌は、今でも鮮明に覚えている。大きな顔、ギョロっとした目ん玉の写真は忘れる事は出来ない。

明治維新と云われた時代、陸軍大将に任命された西郷隆盛を中心とした国内情勢は一変した。いわゆる版籍奉還、廃藩置県、国民皆兵、地租改定等であった。明治6年、西郷大将は征韓論に対し独自の主張をされたが、反対者が多く参議を辞任され、薩摩に戻り、私学校を設立される等、悠々自適な生活を過された。西郷大将の主張が認められておればと思う時、無念であったろうと推測される。

西郷さんは、反政府的な行動をとる事は一切なかった。

現代に生きる我々は、没後 138 年を迎えられた「西郷」どんの遺訓を尊重し実現するのが、今を生きる日本人の努めであろうと確信している。

明治10年2月15日、西郷隆盛は決して望んだ戦ではなかったが、時代の大きなうねりに突き動かされるかの如く戦いに突入されてしまった。

政府は、薩摩の行為を反乱と捉え明治10年2月19日、追討令を発した。いわゆる西南戦争の勃発である。明治10年3月4日、西郷軍は田原坂の戦いに破れ、八代・人吉・延岡に逐次破れ、9月1日鹿児島島の城山に籠り9月24日、西郷隆盛は、銃弾を大腿部と脇腹に受け自刃された。城山は陥落し西南戦争は終焉を迎えた。

現代に生きる我々は、歿後 138 年を迎えた。西郷どんの遺訓を拳拳服膺し、平和日本の維持に邁進すると墓前に誓う。



勇将 篠原国幹を偲ぶ

会長 柏木 明

○西南の役の熊本城総攻撃

明治10年2月15日50年降りの深雪を蹴って鹿児島城下を進発した薩軍先発隊は20日川尻に到着本営を此処に置き、早くも22日熊本城総攻撃を開始した。西南の役である。

薩軍第一大隊長篠原国幹は大刀を翳して城の一角段山を陥し城攻略の據点としたが、城兵もよく防ぎ且つ処々に地雷火等の設あって急に抜き難しと見て遠圍糧の尽くるを待つこととし、小倉より南下する政府軍に対応すべく、本隊は田原坂・吉次峠一帯に向い着陣した。

籠城軍はその後3月12日13日の激しい争奪戦で薩軍を敗ったが、両軍共多くの死傷者を出し、段山裾の井芹川は血で染ったと云う。

昭和50年井芹川改修工事の際、多数の薩軍将士の人骨が発掘され、昭和52年熊本三州会により川沿いに慰霊碑が建てられ、毎年11月10日に慰霊祭が行われている。

昨年（平成26年）慰霊祭の前日の11月9日の夜小生に小倉の福山正子様から突然の電話を頂いた。福山様は篠原国幹の御令兄の孫に当り、80才になられる。第100回慰霊祭記念事業募金の話が西南の役遺族会からあったのでと次の様な話をされた。「国幹の家系は絶えたので自分が墓を見て供養している。国幹は枕崎の篠原家より10才で鹿児島の篠原家に養子に入っていた、吉次峠で戦死した国幹は戸板で運ばれ枕崎立神の小学校の近くに埋葬されました。昭和36年改葬の際骨と一緒に緋の裏のマント他が出たので骨は寺の納骨堂に納め衣類その他は埋め戻し、その跡に五輪の塔を建てました。ですから西郷南洲と並び建つ鹿児島の南洲墓地の墓には骨は入っていません。国幹の弟は西南の役では政府軍に従軍して、兄弟敵味方に別れて戦ったらしい。」

明日が段山の慰霊祭が行われることを話した処、「この度の三州会との出会いは、一所懸命供養している私も嬉しいが、仏様が一番喜んでいることでしょう」と感慨深い、とても80才とは思えない若い電話の声であった。

後日福山様から当会宛多額のご寄附が送られて来た。第100回慰霊祭並びに懇親会にもご夫婦でご出席頂いた。

私の郷里加世田は枕崎市に隣接し、よく往来したし枕崎のシンボルともなっている立神岩のある立神にも行ったことがあるが、篠原国幹の墓が在るとはその時迄知らなかったのが急に身近に感じられ奇遇に驚いたことである。

○吉次峠の篠原国幹

熊本城籠城軍を救援すべく南下して来る政府軍を、薩軍は天嶮の地・田原坂・吉次峠・木留に壕って防ぎ、一番大隊長篠原国幹・二番大隊長村田新八、六番大隊長別府晋介率いて死守した。文献1) 2) 3) を参考に薩軍特に篠原国幹を主にその活躍ぶりを出来る丈原文を損わない様に記すと次の如くである。

政府軍は専ら薩軍の弾薬欠乏をねらって毎日の様に戦を仕掛た。弾丸の尽きた薩軍は毎日

毎夜抜刀隊を繰り出した。吉次方面を約 800 人で守っていた陸軍少将篠原国幹は死ぬことに覚悟していた。陸軍少将の正服に白縮緬の帯をきりりとしめ、鋼作りの太刀をぐっと横に差し緋の裏のついた外套を着て白木綿の鉢巻をしめいざ篠原が最後の戦、腰抜け揃いの奴共目にも物を見せてくれんとばかり黒鹿毛の馬に跨って政府軍の前にすくと現れた姿は天晴れ大将と仰がれ、その姿を見て薩軍力を得てわあっと斬り込む。政府軍はその度に崩れ、地は敵味方の血を以て漲り此処を地獄峠と呼んだ。

彼は部下の止めるのも聞かず単身大将の身を以て敵中に跳び入り当るを幸い斬り倒し維新の奮戦そのままであった。池辺吉十郎程の豪傑も自分は今まであんな強い人を見た事はないと云った位である。而し薩軍如何に勇なりと雖も衆寡敵せず、怪傑篠原は六本楠に一人立っているその泰然とした姿は間もなく敵の射撃的的となった。顔見知りの江田国通少佐の部下に狙撃された。その時後から飛び出した青年一人篠原の前に立って身替りに倒れた。彼は篠原尊敬の中村と云う青年であった。次の弾丸は何ら防ぐ物のない篠原の体を貫いた。享年 41 才。明治 10 年 3 月 4 日の事である。この日は風雨が激しく夜半に篠原の遺体が薩軍本営に戻ってきた時、西郷はその死体にとりついて激しく涙をこぼした。

時移り、138 年を経た今、これ等の著作を目にする時新たな感慨を催し、勇将篠原国幹の活躍ぶりに薩摩士魂の鬱勃と甦るのを覚える一方西郷隆盛始め国幹他幾多の戦死者が華やかな経歴の終焉を余りにも悲運で閉じた生涯を思うと肅然たらざるを得ない。

○習志野原について

習志野台一帯はかつて小金原或は大和田原と云われ、江戸時代は幕府の馬の放牧場の一部であった。その後明治 7 年から昭和 20 年迄陸軍それ以後は自衛隊の演習地とされた。明治 6 年 4 月 29 日明治天皇は徳大寺内部卿・西郷隆盛・篠原国幹（近衛司令官）ほか多数を従え薩長士からなる四個大隊 2800 人の近衛隊を率いて此処に行幸、風雨の烈しい中で露営された。

天覧演習は翌 30 日に行われた。5 月 13 日天皇より勅諭をもってこの地が演習に適すると認め、この原に「習志野の原」の名を賜った。

（以上船橋市郷土資料館資料による）

軍部では習志野は「篠原に習え」説が根強くあったことを裏付ける鈴木孝雄陸軍大将（鈴木貫太郎首相の弟）の石崎申之氏宛の書簡が習志野市教育委員会に所蔵してある。それによると「抑々習志野原の名称は、畏くも明治天皇の賜名に係ることは周知の通りなるが、その起源は予が嘗て大島健一將軍より直接聴



吉次峠の碑

取する所に據れば此の演習に方り時の軍隊を指揮せる陸軍少将篠原国幹を御前に召され「今より此の原を卿の姓篠原に因み習志野之原と命名せん」と仰せられたるなりと聖恩の篤き往時を回顧して今更ながら感激に堪えざる次第に有之候（後略）

以上八千代市立郷土博物館第1回企画展平成18年度資料より。福山正子氏提供

○篠原国幹（しのはらくにもとの履歴 文献4）

1836 - 77 鹿児島藩士、西南の役の謀将。篠原善兵衛の子通称冬一郎。造士館に入って国漢の学を修め、軍略の巧みなこと深沈大度をもって聞えた。1862年文久2年同藩士有馬新八の義挙に参画して伏見の寺田屋に会したが、島津久光の鎮撫にあつて挫折した。1868年明治元年戊辰の役に鹿児島藩三番小隊長として鳥羽伏見に戦い、ついで東征軍に従い東北各地に転戦した。69年鹿児島常備隊の大隊長となり、71年廃藩置県に際しては一大隊を率いて東上し、万一の変に備えた。ついで陸軍大佐に任じ兵部省参謀局出仕となり72年近衛局出仕を兼ね陸軍少将に進んだが、1873年征韓論に敗れて西郷隆盛の下野するのに従つて帰国し、74年桐野利秋・村田新八らと私学校を設立してその監督となり、子弟の養成と開墾植林の事に従つた。77（明治10年）西南の役が起ると、薩軍一番大隊長として熊本城の包圍攻撃に従い、ついで高瀬口より南下する官軍を防ぎ3月4日吉次越で戦死した。

以上篠原国幹に就いての著書並びに福山正子様提供の資料を参考に纏めてみた。薩軍の一



人は篠原冬一郎さんは他人の前では少しも笑わぬきつい人だったと回想しているが、彼の一生は薩摩武士の志で貫かれていた様に思う。

その一端を記念誌の一隅に留めて、勇士の活躍を称え一人でも多くの人に知って貰い、忘れ去られるを惜しむ余り筆を執った。西南の役追憶の一助にでもなれば望外の喜びである。

南洲墓地の国幹の墓

参考文献

- 1) 古閑俊雄著 戦袍日記（全） 発行 新潮社
- 2) 高野和人編著 戦袍日記写真集 全上
- 3) 橋口正景著 血風薩摩士魂 発行 玉竜企画
- 4) 日本歴史大辞典 発行 河出書房新社



西南の役に学ぶ

会長代行・副会長 崎 元 達 郎

保田窪に住んで33年になるが、初詣は、鹿児島から来る子や孫と一緒に歩いて行ける保田窪菅原神社に定着しつつある。この神社の鳥居をくぐって左の片隅に、熊本協同隊出陣碑と言われている石碑があり、次のように書かれている。

「西南の役に際し、熊本民権党は薩軍に呼応するためこの神社に集結し、平川惟一（のぶかず）を隊長にえらび、同士四十名が檄を読み上げて出陣した。西南の役百周年記念 昭和五十二年十二月建之 熊本市」

そこで、ネットで、熊本協同隊のことを調べてみた結果、このグループは、当時の熊本の保守本流であった学校党を中心とする幕藩体制維持派が、薩軍に呼応したのとは、全く別の考え方を持っていたことを知った。

熊本民権党は、宮崎滔天の兄にあたる宮崎八郎が、平川惟一、広田尚、崎村常雄らと、組織化をはかったもので、その同志たちの結束と民権主義者の育成拠点として、『植木学校』の開校を計画し、明治8年に開校した。教科書には、万国公法、万法精理（モンテスキュー）、自由之理（ミル）、民約論（ルソー）の翻訳や日本外史（頼山陽）、福沢諭吉の著書などが使用された。民約論は中江兆民塾で学んだ宮崎八郎が講義し、『民約論は植木学校唯一の經典たるが如き観』であると伝えられた。

また、講義だけでなく『撃剣又は戦争の時の負傷者・死屍を運搬する稽古』など武術や軍事訓練も行なっていたという。ルソーの民約論がフランス革命の理論的根拠になったと言われているので、それを学んで自由民権のよりどころとした彼らは、日本での革命（西南戦争）を想定していたかのようなのである。

植木学校は学校であると同時に自由民権の政治結社の性格を持つに至った。すなわち、開校時から県民会の開設要求や戸長の公選要求、戸長征伐の指導的役割を果たしていた。これらの活動を苦々しく感じていた安岡県令が閉鎖を命令し、わずか半年で廃校となったが、その民主精神は後々まで生かされる。

明治10年に西南戦争が勃発すると、宮崎らは、西郷が自由民権論者ではないことは見抜いていたが、熊本協同隊として、薩軍方について参戦。西郷に天下を取らせたあと、西郷と対決して天下をとるとの思いがあったと言われている。

また、石碑にあるように隊長をも民主的に選出した熊本協同隊が、薩軍とともに山鹿まで進んで来た際、軍事占領下の一時ではあったが、日本で初めて、彼らの思想に基づき民権政府とも言うべき組織を樹立したと言われている。

西南の役から学ぶことの第一は、国の行く末を思って、自らの命をかける勇気と行動力であるが、加えて、戦いに参加した尊い人々の中に、民主政治を求めて反政府の戦いを行った人々がいたことを、この度、学び、感慨無量である。



熊本三州会の過去、現在そしてこれから

副会長 竹内 義雄

私が三州会に入会して、はや半世紀にもなります。長いようで短い50余年でした。

本年、平成27年は第100回になり、「西南の役 薩軍戦没者慰霊祭」は、記念すべき大きな節目の年を迎えます。

振り返れば多くの事柄が思い起こされます。

大正5年2月に、この地、延寿寺に当時、残された遺骨の回収がなされ、合同墓碑が建てられ、毎年4月に招魂祭が開催されることになったこと。日清戦争・日露戦争・日中戦争等や先の太平洋戦争の激戦の最中の於いても欠かさずにその慰霊祭（招魂祭）が執り行われて来たことに、先輩諸氏のご尽力に只々敬意を呈し、会の一員として我がことのように誇りに思うと共に子々孫々まで継承していく責務を感じております。

平成の世に変わるまで、慰霊祭は勿論、総会も懇親会も地元の方々も含めて盛大に当寺院の本堂で執り行われていました。実ににぎやかでホテルでの雰囲気と異なり、和気あいあい手作りの良さが有りました。私も家族同伴で参加していました。思い返すと懐かしい思い出です。

御承知のことかと思いますが、延寿寺と西南戦争の関係ですが、明治10年の2月に熊本城の攻防戦を皮切りに西南の役は、我が国最後の内乱或いは第二の明治維新の戦いとも云われ急速極まる近代化への軋轢の中の生みの苦しみでした。

押し寄せる官軍を迎え討つ為の戦いが植木・田原坂や諸方面で起こり夥しい戦傷者が薩軍本営が置かれた川尻町に運び込まれた。官軍側からの後難を恐れて地元では治療と埋葬の場所が見つからず薩軍側の困惑・混乱は増して困り抜いていた。

それを耳に挟んだ30代目住職伝弘法応師（28歳）は、屹然・毅然として咎めが有ろうとなかろうと仏に仕える身、死を視座に据え、寺領2反5畝の墓地も提供されたこの事実。死者は853名にも及び今もその名を記した過去帳が保存されている。そのことが私の胸を熱くします。

栄えある100年記念に「記念銘碑」の建立を思い立ち、熊本三州会正副会長及び役員の方々と共に企画いたしました。昨年（平成26年）6月より、何回も協議を重ねた結果、記念銘碑を建立することになりました。多くの方々の賛同と協力を得て、実現しましたことに深く感謝申し上げます。

私共をこの様に突き動かした原動力の一つは、急速な近代化の波で歪められた明治新政府の政治体制や社会の仕組みや高級官僚の腐敗と空洞化に、尋問の筋有之と立ち上がった西郷隆盛と薩摩隼人の「国を憂う心」と「もののふの清廉さ」もう一つは「死して官賊ある者か、善悪一如、悉皆成仏神に敵も味方もあるものか」等々の心意気で臆する心もなく強い信念で薩軍の傷病者や死者へは埋葬の場を提供された若き伝弘法応師への敬慕の念があり、それらを温め続けられる場が、今も私にとりましての「熊本三州会」なのです。

今後は若い後継者が先輩方の意思を継ぎ、継続していくことを願う次第です。



薩軍戦没者慰霊碑は語りかける…

副会長 脇田五典

川尻の町の寺や大きな民家は、戦傷者の野戦病院になったが、町民のために薩軍に対応した川尻町奉行が、後日政府に処刑される程、戦乱の中、後難を恐れて戦死者の仮埋葬を引き受けるところはなく、困窮した薩軍に、第30代延壽寺住職伝弘応師28才が仏の手をさしのべ853名の戦没者を納めて、薩州墓を造ってくれたのは、まことにありがたいことだった。それから39年、大正5年、熊本三州会は醸金400余円を募り「西南役薩軍戦没者墓碑」を建立、川尻の志士の賛助を得て石柵が造られ、大正5年6月4日、盛大な落成式を兼ねて第1回慰霊祭を挙げてくれ、以来慰霊碑と呼ばれ、泉下に眠る若者たちを慰めて来た。題字を揮毫した川上親晴どん（旧薩摩藩士、従四位勲三等熊本県知事（大正3年～5年）のち貴族院勅選議員）を筆頭に墓碑、墓地の建設の為446人の人達が寄付してくれました。地元、県内外の方々の中には、西郷従徳侯爵、西郷寅太郎侯爵、東郷平八郎伯爵、牧野伸顕男爵（大久保利道どんの次男）などの名前もあり、西南戦争への思い入れか、三州人のつながりか、六師団の軍人さん達が士官から下士官まで136人も寄付してくれ、将校の1人には柏木明会長のご尊父名もあり大正の墓碑と平成の銘碑、100年を経て親子二代の重なりに貴重なご縁を感じている。墓地を提供、法会を営んでこられた延壽寺さんが代々大事に保存してくれた寄付者名簿は追悼の意を寄せてくれた方々のご厚志を伝えてくれます。

慰霊祭の節目に、とりどりの植樹、墓碑の改修、境域の拡張、参道の補修、「60周年を迎え欽慕の念更に新たなるものあり」と建立趣意書に刻み「薩軍本営野戦病院跡」の碑を建て、石燈1対が献納され、桜は大きく碑を包み春は見事な花を手向けてくれる延壽寺の庭に、熊本三州会の真情を汲みとっている。

祭文の一言一言に感涙し、薩摩琵琶「城山」、居合道の献納、多くの人々の焼香に、故山を想い、魂を打たれ、癒され、年毎の懇ろな祭に、慰霊碑のもと、霊魂は深く安らかに眠っており、慰霊を重ねて百回、百年を記念して828人の戦没者名碑が建立され「春巡り延壽の庭に眠りいて夜毎夢見む故郷の山」（柏木会長の歌）と刻まれた想いを込めて慰霊碑に寄り添ってくれる。

積年の至情に感銘し、静かに、切に、熊本三州会が、後々の世まで、謹厚の志を引き継がれんことを願い、慰霊碑は遙か南の空を見つめて立ち続けている。



菊陽町における西南の役

副会長 梅 北 兼 弘

西南の役戦没者慰霊祭 100 周年記念にあたり、改めて戦没者の方々のご冥福をお祈り致しますとともに、延寿寺様及び先輩の方々のご長年にわたるご尽力に敬意を表します。

さて、私は、菊陽町に居を構えて 20 年になり、郷里の都城に住んでいた期間よりも長くなりました。にもかかわらず、今までは、菊陽町の歴史については、ほとんど無頓着であったような気がします。

そこで、この機会に、菊陽町の歴史、特に西南の役につき、調べて見ましたので、詳しい方も居られるかとは思いますが、少しご紹介いたします。

菊陽町における戦いは、一般には「大津方面の戦い」と言われています。

田原坂の戦いに敗れた薩軍が、約 2 ヶ月近くにわたり、現在の菊陽町の鉄砲小路、古閑原、入道水及び大津町に防御陣地を準備し、官軍と数日間ではありますが、激戦が行われました。菊陽町からも、薩軍熊本隊の一部として、約 50 人が参加しております。

菊陽町の鉄砲小路に有ります「蘇古鶴（そこづる）神社」の楼門をくぐると、右手の薄暗い杉木立の中に、ひっそりと佇む「殉難之碑」と刻まれた石碑があります。

この碑には、西南の役に殉じられた 12 人と生還者 34 人の名前が刻まれております。時は流れ、今では、お参りされる人も居られないように見受けられます。

西南の役と言えば、熊本では、なんと言っても、熊本城、田原坂ですが、私の住む菊陽町にも、この様な記念碑が、人知れず静かに立っている事をお知らせするとともに、私もこの事を知らなかったことを申し訳なく思い、今後は、時々、お参りしたいと思います。

また、今まで刀を差し、ちょん髷を結い、袴を着ておられた方々が、明治維新という大事業を、短期間のうちに成し遂げられた事、その志や行動力に驚異と尊敬の念を抱く次第です。



殉難之碑

私と熊本三州会の関わり

理事・事務局長 瀬戸口 章 三

歳月が流れ何年頃か忘れましたが、熊本在住鹿児島県人会の役員会の席で、熊本三州会の入会を勧められ、会の知識も余り無いまま入会致しました。

自宅と延寿寺が近い事もあり会員となってから毎年慰霊祭に出席しておりましたが、5～6年前副会長より事務局業務の依頼があり何回も辞退したのですが、余りにも熱心に依頼された為、微力ながら引き受ける事に致しました。

最初は延寿寺の慰霊祭の事だけの業務と軽く考えていましたが、内容を知るにつれ、事務局業務の大変さが判り、改めて先輩事務局担当の方々のご苦勞に敬意を表します。

毎年11月10日、当会主催の段山慰霊祭の開催、また西南の役田原坂顕彰会、西南の役山鹿口戦跡顕彰会、熊本城顕彰会、西南の役丁丑会、全国鹿児島県人会、南州神社例大祭へ毎年の出席や、山形荘内南州会、関西鹿児島県人会総連合会、福岡南州会、福岡鹿児島県人会連合会、西南の役戦没者遺族会、熊本在住宮崎県人会等との交流も行われており、更に熊本在住八代おはら会の入会、陸上自衛隊西部方面総幹部後援会入会、陸上自衛隊第8音楽隊後援会入会とつながって行きました。

元来、日本の歴史については多少なりとも関心を持っておりましたが、西南の役に關する更なる勉強の機会を与えて頂きました。

薩軍戦没者慰霊祭第100回という節目の記念すべき年に事務局業務に携われた事は私にとって思い出深い年と成り、またここ数年の間に柏木会長を始め西南の役に係る多くの方々との出会いの場と成り、大きな個人財産と成りました。

熊本三州会が第100回慰霊祭を機に身長178cm・体重108kgの西郷さんの様に益々大きく発展していく事を祈っております。

薩摩隼人について祖父との思い出

理事 柴田 章子

西郷どんと、焼酎をこよなく愛した明治生まれの祖父は、幼い頃の私に酔っては西郷隆盛や大久保利通の話をよくしてくれました。

西郷どんの肝っ玉の座っているところ、からだに似合わず優しいところ、努力家で勤勉なこと等主に道徳的なことが多かったのですが、面白いところで、大久保どんは「碁」がうまく、西郷どんは「なんこ」がうまかったということ。鹿児島宮崎の方ならご存知と思いますが、酒宴での遊びです。ルールは簡単で豪快、対戦する相手が向き合って座り、お互いが3本の**なんこ棒**を隠し持ち、その中の何本かを拳に握り、隠しながら先方に突き出し、お互いが手の中に隠している**なんこ棒**を当てるゲームです。お互いの駆け引きと、数を当てる際の独特の表現（薩摩の方言）が面白く場が盛り上がるのです。例えば1本は、「天皇陛下」日本に一人しかいない、2本は「下駄ん歯」、3本「下駄ん目」「いんのしょんべん」犬が小便をする時は片足上げて3本足、宮崎よりの私の地方では、4は「みやっこんじょ」都城市、5本は「ごつどん」昔都城の大地主、などなど……。

普段の宴会では和気あいあいと見物人も一緒に楽しむユーモラスなゲームであるが、これが試合になると気合のこもった、相手を呑み込むような大声を張り上げ、一剣必殺の太刀打にも似た遊び。

西郷さんも薩摩隼人の若者達と酒宴の席ではこのような、楽しい遊びもされたのでは、と祖父のはなしを聞きながら想像したものです。

祖父が、話の最後に必ず言う言葉、「人に嘘をつくな、弱いものを虐めるな、良いことをしても、悪いことをしても、必ずお天道様が見ていなさる。」大好きな祖父の言葉は今でもしっかり心の奥にしまっています。

遠い遠い昔の思い出です。

あま ことどう 『天の古道』と『西南の役』

理事（事務局会計） 樋口 信夫

皆さんは、宮崎県の高千穂という町をご存じだろうか。ここは、天孫降臨をはじめとしたさまざまな神話や伝説が存在する「神々の里」である。また、私にとっては、仕事で訪れるところでもあり、なじみ深い場所でもある。



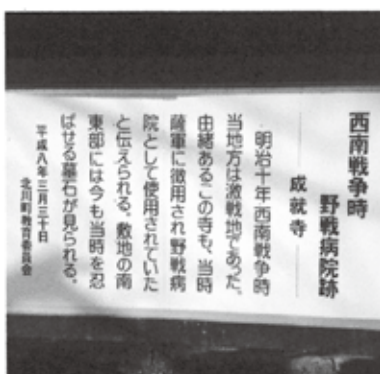
①和田峠

その高千穂町と隣町の日之影町が、地域おこしの一環として両町間で昭和30年代まで使われていた生活道を平成22年にトレッキングコース「天の古道」として復元しているという話を耳にした。



戦況図

さらに、聞くとところによると、この道は西南の役時、「田原坂の戦い」と同様、激戦であった「和田越えの戦い」後の敗走路となった湾洞峠ルートに当たるとのこと。知人の勧めもあり、そこを歩くイベントに参加させてもらう予定が、4月、11月と雨の為中止。トレッキングは断念せざるを得なくなった。そこで、昨年末、休みを利用して長女と二人、『延岡・高千穂方面の西南の役戦跡』を訪ねることにした。



②

12月27日早朝、熊本を出発し、「和田越えの戦い」があった延岡市無鹿町①に8時30分到着。それから「和田越えの戦い」で野戦病院として利用された「成就寺」②、「和田越えの戦い」での宿陣跡とされる「西郷隆盛宿陣跡資料館」③等を訪ねた。

戦況図を見ていただきたい。和田峠での敗戦により、薩摩軍は延岡への道を政府軍に塞がれ、後ろには山という状況。唯一の逃げ道が可愛岳を抜けることであった。当時、そこに道はなく、政府軍も油断していたのであろう。西郷軍は獣道を敗走し、湾洞峠ルートを抜けて高千穂町三田井を目指すことにする。和田峠で敗れた時、東上に望みが消え、鹿児島に帰ることを決めたにちがいない。



③



この決定が出されたのが、
③の写真にある民家である。

敗走するにあたり、西郷さんは薩摩軍解散をここで宣言した。つまり、穏やかな田園風景の広がるこの場所が薩摩軍の最後の戦いの場所なのである。

ここからは、薩摩軍としてではなく、西郷軍として、戦いは続けられることになる。



④



私たちは、「天の古道」のスタート地点④に向かう。日之影町中心街から延々と続く山道を進むこと40分、「天の古道」の看板を見つけた。険しい峰が続く山々、道沿い眼下の日之影川は流れが速く、岩が荒々しく転がる。あの時代にこのような場所へよく延岡からたどり着き、また岩戸へ向かったものだとその精神力に驚嘆させられ、先人の思いに胸が熱くなった。



トレッキングは、今年またチャレンジしようと思っている。「歴史ロマンあふれる古道」という気分にはなれないかもしれないが、先人達の歩いた空気を存分に感じながら踏破したいと思う。

熊本城攻防と熊本三州会の段山慰霊祭

理事 寺 地 靖

大正5年熊本三州会による第1回慰霊祭が開催されてから、平成27年は100周年に当たり衷心より、お慶び申し上げます。私は平成12年4月より、19年3月迄、事務局を仰せつかりました。その間、90周年記念事業を実施しました。月日の経つのは早いもので、感無量です。毎年11月10日、段山の慰霊祭を会長始め20名弱の役員の方々ご参加を得て、厳粛に和やかに慰霊祭を取り行っています。以前は午後3時から、約1時間でしたが、最近では午前11時から、実施しています。それから岳林寺の住職様が、ご尊父の工藤元峰氏から、ご子息の征英住職に平成25年12月より交替されました。住職が寄稿されています。一読願います。岳林寺は、歴史があり、熊本では由緒あるお寺です。西南戦争で、熊本城攻防は意義があったと考えますので、考察したい。薩軍の各大隊は2月20・21の両日、別府晋介率いる前衛隊が待つ川尻や松橋、小川など城下近郊に次々に到着した。夜間の白兵戦に挑むか、直ちに全軍を北上させるか、2月22日の深夜、薩軍幹部の間で紛糾していた熊本城攻略の方針は、総大将西郷隆盛の一言で、終止符が打たれた。

論戦を西郷が制し、一番大隊長の篠原国幹が推す強攻策には触れず、その夜の白兵戦をも辞さない総攻撃は中止になった。これは隆盛や桐野利秋は多くの兵を失うことを憂い、将兵には、白兵戦の準備を命じたが、出撃命令は出さずにいた。2月24日以降熊本城が解放される4月14日まで、犠牲者は増え続けた。薩軍が死者106人、傷者約530人、熊本鎮台が死者305人、傷者468人、警視隊が死傷者178人を数えた。熊本鎮台について、薩軍は出軍前から重視していなかった。私学校党幹部が2月上旬に数回開いた評議会でも明らかになっている。薩軍にとって鎮台の頑強な抵抗ぶりと戦意の高さは大きな誤算であった。当初から鎮台攻略に意を注ぎ、早く撃破していれば、大量の新型銃や大砲、弾薬なども入手できた。

状況を見守っていた全国の不平士族の決起後押し、その後の戦況を一変させた可能性がある。後世の歴史家らが、指摘している。後に薩軍が敗色濃厚となった時、桐野は「篠原の言う通りに強攻策をとって熊本城を落としておけば、こんなことにならなかった」と悔やんでいる。熊本城を薩軍が攻略出来なかった事が、薩軍が賊軍になる最初の大きな要因であったと言えるのではないか。

西南の役、激戦地の丘で思う

理事 鬼崎 行男

今を遡ること137年前、薩軍、新政府軍の間で引き起こされた西南の役、その最大の激戦地田原坂の丘に立ち、交々の思いが心をよぎりますが、ここでは薩軍首領西郷隆盛の気持ちに思いを馳せつつ、この戦を作戦、戦術面から考えてみたいと思います。

古来、作戦を彼我の態勢から見て「外線作戦」と「内戦作成」に区分して考えることが出来ます。

外線作戦とは、圧倒的な戦力を有する側が、その有利さを生かして相手を撃破しようとする作戦で、その戦勝の要訣は、相手の要点に対する求心的な戦力の集中にあります。

対して内戦作戦は、戦力的に劣る側があらゆる作戦の妙を駆使して、相手を翻弄し戦勝を得ようとするもので、その戦勝の要訣は、個々の戦闘で勝利し（各個撃破）その成果を積み重ねることにあります。

この観点から田原坂の戦いを見れば、政府軍が外線側に立ち、薩軍が内戦の態勢にあることは明白です。ここで政府軍は、外線作戦の利を最大限に発揮して、薩軍の要点に戦力を求心的に集中して撃破を図ろうとしています。これに対して薩軍は、内戦の立場であるにも係わらず、相手を翻弄するような作戦の妙を發揮した形跡は見当たりません。政府軍が主力を指向した田原坂正面に薩軍も主戦力を投入し、支作戦の吉次峠正面に薩軍も一部の戦力で対応しています。

もし、薩軍が内戦作戦の妙を發揮して戦ったと仮定すれば、次のような戦闘様相が考えられます。

即ち、薩摩軍は田原坂正面では一部の戦力で対処し、障害等を駆使して徹底的に相手の突進を阻止する。その間に、主戦力を吉次峠正面に指向してこれを撃破し、その勢いを駆って、そのまま玉東、高瀬正面に押し出す。

そのことにより、政府軍は退路（後方連絡線）を断たれる恐怖感を覚え、田原坂正面の主力に動揺が生じて、その攻撃衝力が鈍る。その弱点を突いて、主攻を田原坂正面に変更して大攻勢をかける。このような作戦が合理的な戦術として存在したのです。

しかし、このような内戦作戦の妙を發揮して戦闘を繰り広げた形跡は見られません。

熊本城攻防また然りです。田原坂正面に早く戦力を集中することが肝要であったにも拘らず、熊本城攻略に拘泥するあまり、いたずらに戦力と時間を浪費してしまっています。

このように田原坂での戦闘を俯瞰的に見ると、総指揮官西郷隆盛の西南の役における作戦目的は何処に有ったのかと言う疑問が生じてきます。少なくとも個々の戦闘場面で勝利を収める事のみでは無かったのではないかと思われてくるのです。西郷の脳裏には、もっととてつもなく遠大な「日本百年の計」が常に去来していたのではないか！！

即ち、明治新政府は維新以来、近代的な国民国家に生まれ変わるべく鋭意突き進んで来たわけですが、遅々として進まない。

その大きな要因は、旧士族による反乱が頻発して民心が安定しないことにあります。

神風連しかり、佐賀の乱、秋月の乱、萩の乱しかりです。このような不安定な状況が続けばいつまで経っても近代国家への進展は覚束ない。このような内乱は早く終焉させ民心の安定を図り官民一体となって新国家の建設にまい進することが日本の行く先にとって、もっとも肝要なことである。

そこで偉人西郷は「国内の内乱はもうこの西南の役で終わり、これを最後にするんだよ」という崇高なメッセージを旧士族を始め万民に対し、自分の身を挺することで発したかったのではないか！！ そのことが国の近代化に欠かせないことだとの確信があつての行動ではなかったか

大西郷の西南の役における究極の作戦目的は万人が思いも及ばない、「日本百年の計」を見据えてのものだったのでないか

巨眼の人西郷南洲翁の、わが国の遠い将来を見据えた底知れない国家愛と情愛が伝わってくるのです。

あの城山での最後の言葉「晋どん晋どん、もうこの辺でよか」なんと感銘深い言葉であることか、古今東西、万人の崇尊を集める西郷南洲翁を僕はこのように人だったと心に銘じて置きたいのです。

激戦の地、田原坂の丘に立って改めてその偉大さに思いを馳せた次第です。



西郷隆盛翁と祖父母との御縁

理事 中野 揚子

三州会に入会して約30年の歳月が流れました。その間、理事、事務局長、編集委員長等を仰せつかりました。

尊敬する西郷翁の「国を思われるお心」と「敬天愛人」のお心に感動しつつ90周年の記念誌も、会報1号、2号も柏木会長や5人の副会長の励ましや御指導のもとに編集いたしました。その後再び、三州会100周年誌に取り組む事となり感慨一しおでございます。

入会して30年になりまして三州会と申しますと、西郷翁と祖父母との事が脳裏に浮かんで参ります。

西郷翁がお若い頃大隅半島の高隈山に鳥打ちに度々祖父母の家に泊まれ祖父母も大喜びでお迎えしていたそうです。母の次兄は西郷翁から幼い頃の「吉之助」と言う名をいただいていたそうです。

又祖父の弟も、鹿児島からずっと西郷翁に付いて行き田原坂で戦死し、田原坂の慰霊碑に名前が刻まれているのを母が86歳になった時、田原坂に行き祖父の弟の名前を見つけて、花を供え冥福を祈り「ああこれで安堵した」と申して、その年の4月永眠いたしました。西郷翁を尊敬していた母もきっとこの三州会100周年式典や記念碑の建立を草葉のかげより喜んでいと思います。

この100周年の記念誌ができましたら、立田山の母の墓前にお供えしたいと思っています。



さつま隼人にささえられた私の半生

理事 吉津 俊子

一口に 100 年と申しますが、私が鹿児島から熊本の地に嫁いで 50 年、約半世紀その倍なので大変な年月です。

誰一人知る人もおらず、見合い結婚にて肥後の国熊本に来た訳です。

仲人が伯父、その伯父の紹介で云い変えれば仲人口にのせられて、見合い後三ヶ月で結婚と云うことに成りました。

崖から飛び降りる気持ちだったのです。

伯父というのが私の父の妹むこで、やさしい人でしたが、見合後この話を私が断ったのです。

父の妹が 伯父さんの顔がないと云われ泣き泣き熊本へ来たのでした。

何一つ知らず、何一つ知ろうともせず嫁いできた二十一才の私でした。

私の胸の奥に、さつま隼人の切れのよさが、どことなく付いてくるそんな毎日でした。さつま隼人とは

第一にやさしさ

第二に人の嫌うことを云わない

第三に弱音をはかない

第四にひよこしの穴から空をみない（広い心）

そんな処でしょうか。

30 年間、仕事に精だす私の回りには鹿児島から上って来られた諸先輩方が沢山いらっしゃいます。

熊本三州会の皆様方、熊本在住鹿児島県人会の皆様方、ずいぶんお力添えをいただきました。その懐しい方々大変お世話さまに成りました。私も早や 70 才になり、毎日孫にふり廻されながら楽しく暮しております。

これから熊本三州会の益々のご繁栄をお祈り申し上げます。

心惹かれる西南の役あれこれ

理事 有村 謙一

西郷隆盛＝西南の役＝国賊でありながら広く国民に愛され親しまれた人物はいないものと思われる。なぜ、西南の役をせざるを得なかったのか、西郷隆盛の心中はいかかなものだったのかそこに焦点を置いてみていくことにより国民に広く愛され親しまれた理由がわかってくるのではないだろうか！

1873（明治6）年征韓論争に敗れた西郷隆盛が中央政界から辞職して鹿児島へ戻る。ふるさとで心身を休めようと考えたものと思われる。しかし彼の人望がそれを許さず上京していた鹿児島出身の士族や文武官が彼を慕って次々と帰郷、旧来に伝統を切って捨てる政府に不満を募らせる彼らを放っておかず私学校を開設、これが裏目に出て、私学校の生徒たちが国家に対して反逆ともいうべく陸軍省の火薬庫を襲撃する事件が起きた。そのとき西郷隆盛は事件を知り激怒したが、彼らの気持ちを抑えきれないと悟り自ら渦中に飛び込み皆と運命を共にすることを決意する。その後、西南の役へと進んでいく。

西郷隆盛は政府軍と戦ったとしても負けることは悟っていたにもかかわらずそれでも運命を共にする人の思いを真摯に受け止め情の深さと、それが自滅の道とわかっているにもかかわらず最後まで相手に寄り添うべきだというまさしく「敬天愛人」を実行した人物である。

本来日本人がもっている「情」その典型が西郷隆盛であり愛される理由ではないかと思われる。今でもその良き伝統を引き継ぎよりよい日本であり続けてほしいと祈っている。

明治10年「西南の役」に見られた人間愛

理事 坂口 寛治

1. 初めに

自明の理だが「福祉」は戦争の最中には存在しがたく、平和の中に花開くのである。「福祉社会」は「社会的な仕組みで人々の幸せを実現する営み」或いは「人々の幸せを実現するための社会的努力」と云われる。戦争は国家や民族の利害対立、思想、宗教、価値観などの相違から起きる。人間の叫びとしての福祉の原型があるのでなかろうかと考えた。我が国最後の内戦「西南の役」を通じて考察したい。

2. 戦場の周辺で見られたヒューマンイズムの数々

①戦没者勇士の墓



玉名郡玉東町上白木に「西南の役戦没者勇士の墓」がある。当時は木葉と云う部落で、田原坂の死闘が繰り広げられた3月4日から20日まで官軍は此処に兵站基地を置き攻撃をしていた。官軍支配下で厳しい官憲の目がある中に一農民山野直平は、戦死した薩摩兵を自宅近くに埋葬した上に、負傷した兵士を自宅に匿い看病したのである。そして亡くなれば、同墓地に懇ろに埋葬した。

そればかりか、密かに位牌を作り、仏壇に収めた。その位牌は墓と共に今日も、孫の代まで供養されている。

敵味方なく死者を埋葬し、見つければ厳しい咎めを受けることを覚悟の上で、傷に苦しむ兵士を看護した山野直平の温かい人間性は目を見張るものがある。

②山鹿日輪寺に見る薩軍戦死者3名の墓

東京警視庁巡査隊小隊長押川仙太郎は未だ人権思想が未発達なこの時代、戦場の生臭さと殺伐とした中で、薩軍側の3兵士の遺骸を丁寧に吊って欲しいと、自ら認めた碑文と幾分かのお金を里人に託した。

「命終えてまで、官薩あるものか」とのことばを残して、恩讐を超えた魂の平安を願う宗教心によるものか。このような高邁な精神で鎮魂墓碑の建立の心を具体的な、行為によって示したのである。

③「西南戦争始末記」余滴・・・に見る

西南の役での戦いで官軍の戦死及び戦病死した者6843人。薩軍戦死者は鹿児島県人6467人、熊本県人383人、宮崎県人462人を入れて総計7,476人であった。

薩軍の最年少戦死者は14才である。少年隊員は相当の数に上ったが、その総数は不明。18歳以下の少年隊員で戦死した者は30名を超えた。

この戦いで血縁者の者が敵味方に分かれて戦ったが、少年隊員にとって伯叔父に当たる者

が官軍にも多くいた。或いは年長の親類等もである。少年たちは捕えられると、それらの人々に叱りとばされて、捕虜扱いにされずに、鹿児島に追い返されることが多かったらしい。追い返された少年は家の前までたどり着いたものの家に入ることが出来ずにうろうろした揚句、家人に見つかった者は家に付け込まれ、或いは叱られて戦場に送り返され、或いは自ら進んで又戦場に戻ったりという経過をとったようだ。

或る少年の母は、毎朝吾子の無事を祈ってお参りをしていた。その少年は、戦場から追い返されて家の前まで来たものの、意を決して又戦いに加わるべく家に背を向けた。その後ろ姿をお参りから帰った母が見て幻影を見たと思ったらしい。「〇〇どんの後ろ姿を見もしたで、多分死にやったとごわんそ」とその母は悲しんだという話も残されている。

④ 薩軍一番砲隊長讃良清蔵の場合

讃良清蔵は吉次峠の戦いで負傷し、鹿児島に護送され自宅で休養していた。然し、薩軍が敗走の結果城山に立て籠もった事を聞くと、実父を訪ね一児を託して城山に入ると告げた。お前は療養の身でないかと問うとこう答えた。

「我が薩軍が勝っているなら療養は続けるが、敗北が必至の今、自分は之と生死を共にしたい」「敗北が必死の今、見て見ぬふりをすることもできよう。一般市民であれば、そうするのが常識であろう。常識の外に住むのが武士なり。他人は欺けても己の心は欺けない」と泣き泣き答え城山に走り去った。

3. 考察とまとめ

官軍側の厳しい監視の目を掻い潜って、薩摩兵を看護或いは埋葬し更に弔い続けた山野直平。更に山鹿の日輪寺にみる「西南の役薩軍戦死者3名」の墓石。「西南戦争始末記」余滴や薩軍一番砲隊長讃良清蔵の場合を現地で或いは書籍で見聞する時、死を徒に賛美することなく、とかく武士として死ぬことが美德とされた時代が未だ色濃く残る明治10年にかかる「西南の役」に見られた人間愛が点として他にも多々あるであろう。これからも病者、傷者及死者等を西南の役で如何に受け止められてきたのか、福祉的視点から追い求めていきたいと思う。

川尻にある西南の役の足跡

正会員 島 田 稔

わが川尻の町には西南の役に関係する足跡がいくつも残っておりその中の主なものを2～3上げて見ると薩軍本営跡で文化庁登録の有形文化財として指定されています。また最後の川尻奉行上田休^{やすみ}が官薩中立を柱に町や周辺の村々の治安維持に尽したが局外中立は官軍に理解されず賊名を蒙って処刑されました。その鎮撫隊本営跡の碑が残っています。

皆様ご存知の延寿寺は比叡山延暦寺の末寺で、山号は無動山。建久（1197）年河尻三郎実明が建立して祈願所としました。開祖は快智法師で、明治10年2月西南の役が始まると各地から薩軍の戦死傷者が川尻に運ばれて来ました。その戦死者の埋葬を引受けたのがこの寺で、その数は850数体にのぼりました。寺では薩州墓と呼び、懇ろに供養を続けていましたが、大正5年2月に遺骨を集めて合同碑を建て毎年4月薩摩、大隅、日向三州の遺族や関係者を迎え慰霊祭を行っています。

曾祖父と木葉の戦い

正会員 島 卓 郎

私の妻、智子の曾祖父「大内田勇左衛門盛恒」の墓は、鹿児島県の南州墓地に在る。その墓石には、明治十年二月二十三日 肥後國木葉戦死 享年四十三歳 とある。

その日の朝、北進していた薩軍は遭遇した官軍偵察隊を追って田原坂を越え、現在の玉東町木葉の前面に達した。乃木少佐率いる官軍は、本道とその左右に堡壘を連ね、銃に装填して射程に入るのを待っていた。やがて、「爆然萬丸一時に発す」（薩南血涙史）の形で木葉の戦いは開始された。附近に遮蔽物のない薩軍は大いに苦戦を強いられた。折りしも、山鹿街道を前進していた薩軍の別の隊がこの銃声を耳にし、急拗左転して官軍の背後に出、山に拗って雨のように瞰射した。戦況は一変して薩軍は優勢となり、官軍は後退を余儀なくされた。この日の戦いは夕刻まで続き、戦死者は官軍26名、薩軍4名（翔ぶが如く）とある。

曾祖父は、西南之役開戦2日目の戦死、しかも木葉の戦いで薩軍戦死者4名のうちの一人である。そして、従軍者の中では高齢の43歳である。恐らく、その日の朝、曾祖父は薩軍の先頭をきって進み、官軍の一斉射撃に倒れたのではないか…。西南之役、そして曾祖父のことについて思いめぐらすと際限がない。近いうち、玉東町木葉を訪ね、木葉の戦いゆかりの地をゆっくりと歩いてみたいと思う。

私と熊本城

前熊本在住宮崎県人会長
川越 忠 信

私は 建設会社を経営して 市職員の方々と県、市の文化財を見て来ました。

かつて若い職員だった方が 30年間に部、課長となり「川越さん 文化財に関わる建設免許を取って仕事をしてくれ」と言われました。それまで文化財は、大手建設会社に頼んでいたが、「溝が詰まった、瓦が落ちた」と言っても間に合わない、ということで通常3ヶ月かかる所を 早々に建築許可がおりました。

台風19号で 熊本城長堀が 前の工事から3年ほどで倒れ、復元工事をする事になりました。文化財は特別の工事であり 欲得抜きで、格別入念に最高の技術力と誠意を込めて施工しました。あれから30年たちますが、りっぱに風雨に耐えています。

と言う訳で、熊本城長堀には、特別の思い出があります。

熊本城の各櫓を手がけ、本丸御殿、招君の間は最近作です。

私の母校 小学校は、今も宮崎県飫肥城内に在り、先祖は、祖父の代まで日向瀬田尾城主であったこともあり 熊本城の工事に深く長く関わって来たことは、私の生涯に記念することです。

熊本三州会副会長 宮崎県人会会長 三州会顧問を歴任された、川越建設株式会社会長の川越忠信さん、恒武天皇を始祖にして祖父の代まで、日向瀬田尾城主だったせい、城・神社・寺社・様々な重要文化財改修工事等で熊本県内の第一人者。更に西日本唯一の特殊技術保持者でもあります。

これまで手掛けられた工事について20数年前に熊日新聞にも紹介されましたので掲載しました。

熊本城本丸御殿や水前寺古今伝授の間の建造改築も手掛けられました。超特別の技術、秀でた識見の持ち主の川越忠信さんは我が三州人の誇りです。

記念誌編集部

熊本 本 日 日 報 新 聞 月 刊

指定席

熊本城内の重要文化財改修工事の指導をしている
川越 忠信さん(60)



重要文化財の改修工事では、とんと手掛けて来ると言われてきた。昔は各人がたぐさんあつたのに、と聞く、大工や左官などの職人自体が少なくなつて行く、いかに若手を育てるか今後の課題。 「自分の技術を若い人に伝えるのが、私の使命」。現在、西日本では川越さんしか持っていない門外不出の技術を使い、火の圍フエスタに墨魚(びんぎょ)城の屋根の表層部分を出展する。 「古いものに取りつかれる一方、腕のある職人がだんだんいなくなつた。

重要文化財の改修工事では、とんと手掛けて来ると言われてきた。昔は各人がたぐさんあつたのに、と聞く、大工や左官などの職人自体が少なくなつて行く、いかに若手を育てるか今後の課題。 「自分の技術を若い人に伝えるのが、私の使命」。現在、西日本では川越さんしか持っていない門外不出の技術を使い、火の圍フエスタに墨魚(びんぎょ)城の屋根の表層部分を出展する。 「古いものに取りつかれる一方、腕のある職人がだんだんいなくなつた。

熊本城内の重要文化財改修工事の指導をしている
川越 忠信さん(60)

重要文化財の改修工事では、とんと手掛けて来ると言われてきた。昔は各人がたぐさんあつたのに、と聞く、大工や左官などの職人自体が少なくなつて行く、いかに若手を育てるか今後の課題。 「自分の技術を若い人に伝えるのが、私の使命」。現在、西日本では川越さんしか持っていない門外不出の技術を使い、火の圍フエスタに墨魚(びんぎょ)城の屋根の表層部分を出展する。 「古いものに取りつかれる一方、腕のある職人がだんだんいなくなつた。

西郷隆盛と英医ウィリアム・ウィリス

会長 柏木 明

英医ウィリアム・ウィリス（1837～94）はアイルランドに生まれエジンバラ大学に学びロンドンで外科医になった。1861（文久元）年イギリス公使館の医師として来日したが、翌年生麦事件、薩英戦争に遭遇した。戊辰戦争の時は公使パークスの斡旋により官軍に従って傷兵の治療に従事、横浜傷痍大病院では院長として活躍、英国流の外科学術を駆使し敵味方の別なく治療した。戦後は東京大病院長となり、また大学東校では外科学の講義を行い日本外科手術の発展に貢献した。（日本歴史大辞典）

然し明治政府がドイツ医学を取り入れる事になったので、ウィリスの身のふり方が問題になった。西郷は大久保利通と相計って薩摩藩に引取ることになった。薩摩では西洋医院を旧浄光妙寺跡に移し西洋医学校と改称し彼を院長として迎えた（1870明治3年）。彼は僅か8年足らずの鹿児島滞中約300名の医学生を教育したが、その中には脚気の予防に貢献し慈恵会医科大学を創設した高木兼寛もいた。後年鹿児島大学医学部の前身となった。

この浄光妙寺跡即ち西洋医学院跡こそ後に西郷隆盛以下西南の役薩軍戦没者が眠る南洲墓地となるのである。

明治10年2月8日鹿児島県令大山綱良が、ウィリス邸を訪ね西郷が進発することを報らせた。2月11日には西郷自らウィリス邸を訪れているが、「下士卒の数は1万を超えるだろう。出発期日は未定」と告げたと云う。その4日後の大雪を蹴って薩軍進発。17日には西郷も出発している。

西南の役勃発するや、ウィリスは戦傷者を治療することを強く望んだが果たせなかった（中略）従軍した軍医はすべてウィリスの薫陶を受けた者で、進歩した手術縫合、包帯術には政府軍が大いに驚いたという。（日本医学の明瞭期に生きた英医ウィリアム・ウィリス－尾辻省悟著）

英国の長崎領事から退去勧告を受けた彼は明治10（1877）年3月12日に家族や使用人と共に鹿児島を離れた。

戦争中東京に戻ったウィリスは、戦況に関心を寄せ薩軍兵士たちに深い同情を示した。兄ファニー宛てた書簡（4月12日付）には「もしも薩軍が敗北すれば彼等は非常に過酷な処罰を受けることになるでしょうし、殆んど皆殺しとなるかもしれません。そのことを思うととても心が痛みます。（中略）もちろん私は薩軍側の勝利を願っています。彼等は私の友人ですから。政府軍が鎮圧に成功すれば、私は多かれ少なかれ薩摩の同情者と見なされていますのできっと冷たく扱われることになるでしょう」と書かれていた。（幕末維新を駆け抜けた英国人医師）

然し戦況は薩軍に不利になる一方だった。

人吉が陥落した頃（明治10年5月末）、木場貞政という人物が西郷の意を受けてウィリスに援助を依頼する書簡を送っていたことはあまり知られていない。西郷の依頼とは「奄美諸島の黒砂糖1万2千ビクル（約720トン）を売却してスナイドル銃1万丁と弾薬5千発（1丁につき）を購入して欲しい」というものだった。これにウィリスがどう応じたか不明だが、医師のウィリスに西郷の依頼が果たせたとはいえない。西郷とウィリスの交流はこれが最後となった。（南日本新聞H23年3月21日さつま人国誌）

ウィリスの我国医学の近代化に果たした役割は決して小さいものではなかったが、日本滞在中諸般に亘って薩摩と関係があった壮年期の華々しい経歴に拘わらず、西郷亡き後は一抹の淋しさに耐えていたのではなかったろうか。4年後の1881（明治14）年彼は帰国している。

第 37 回 西南の役薩軍戦没者段山慰霊祭

時 平成 26 年 11 月 10 日 (月)



晩秋の候、爽やかな秋晴れ。突き抜けるような青空の下、井芹川沿いに建立されている「薩軍戦没者慰霊碑」の前には、開式の 11 時前には既に会長・副会長を始め衆議院議員且つ防衛大臣政務官の木原稔様を入れて総勢 19 名が参列し用意された椅子に座り待たれていた。

温かい太陽の日差しが降り注ぎ、凜とした雰囲気を感じながら爽やかな秋空のもとに理事有村氏の司会で始まった。先ず竹内副会長の開式の「ただ今から第 37 回 西南の役 薩軍戦没者 段山慰霊祭を開催します」言葉あり。岳林寺住職の読経が流れ、やがて参列者各位の焼香と続く。

読経のお声が慰霊碑の周りを包み、焼香の香りも微かに感じられる中、国の行く末を憂いながら亡くなられた春秋に富む往時の若者の無念さを或るいは又、段山の壮絶な戦いの顛末も去来したのか、頭を垂れながら或いは慰霊碑に大きく刻まれた字句を凝視しながら、ご住職の読経に耳を傾ける参列者各位の姿がそこにあった。

第 37 回 西南の役薩軍戦没者段山慰霊祭

祭詞 熊本三州会会長 柏木 明

『山々は紅葉鮮やかに、菊薫る快晴に恵まれた本日、西南の役 薩軍戦没者 段山慰霊祭が岳林寺工藤御住職の尊いお導きの下厳粛に挙行されるに当たり、碑の前に額ずき、謹んで追悼の言葉を奉げます。

明治 10 年 2 月 15 日（南国には珍しい深雪^{みゆき}を蹴って）鹿児島城下を進発した薩軍は、2 月 20 日先発隊川尻到着、22 日熊本城総攻撃が開始されました。

午前 3 時川尻を出発し、5 方面に分れて夜明けと共に約 5,700 人の兵が一斉に攻撃にかかった。段山口は藤崎台に襲い掛かったのは薩軍一番大隊で之を率いる篠原国幹は、自ら太刀を振るって挺身し、直ちに三の丸下段の段山を奪取し、熊本城攻略の拠点としました。之に対し籠城軍は 3 月 12、13 日の両日に亘り激しい争奪戦を展開、遂に薩軍は敗れて段山一帯は籠城軍の手に返った。この戦いで薩軍は 73 名が戦死、城兵の死傷者も 225 名の多きに達し、段山の裾野を巡って流れる井芹川は血で染まったと伝えられ、籠城戦中最大の激戦でありました。

時は移り、昭和 50 年段山地区井芹川改修で川底より、薩軍将士と思われる多数の人骨が発掘され、昭和 52 年熊本三州会により、西南の役百周年記念事業として林 則行氏により提供された井芹川沿いの土地に碑が建立され、爾来毎年 11 月 10 日慰霊祭が行われ、本年第 37 回を迎えました。

本日、此処に会員有志相集い^{あいつど}、今を去る 137 年前憂国の情已み難きも志成らず異郷に若くして散った方々に思いを到し、慰霊の誠を捧げるものであります。最後に御霊安らかにお眠りあらん事を祈って追悼の言葉と致します。』

平成 26 年 11 月 10 日 熊本三州会会長 柏木 明

閉会の言葉 脇田副会長……秋晴れの好天気の中で厳かに第 37 回西南の役薩軍戦没者段山慰霊祭を挙行できました。有難うございました。

記念誌編集部

西南戦争—銃器の視点から—

1. 薩摩軍と「士分一統総筒の制」について

西南戦争は、その戦いのイメージとしては、刃や銃剣を交えての山野での阿鼻叫喚の激突が浮かぶ。しかし戦いの大半は鉄砲や大砲等の銃器で展開されている。当時最強の武士団と云われた薩摩隼人の私学校生徒達に西郷軍に加担する条件が「士分一統総筒の制」であった。

即ち、必ず銃を一丁携えることが軍隊に入る条件であつたのです。戊辰戦争に参戦した体験からも、槍や刀等での戦いは既に過去の戦いであり今や銃器の戦いであること。その銃器の善し悪しが勝敗をきめることは判っていたのではなかろうか。

しかし一人一銃主義で編成された薩軍であれ、予備の銃を殆ど持たないこと。しかもその銃は旧式銃が多かったので、その多くの銃は破損し或いは故障し、各自持参した3百発余りの弾丸もすぐに使い果たしたはずである。

一人一銃主義で編成された薩軍の泣き所は予備の銃をもたないところにあつた。補充するべき銃が無くなった時、彼らは必死になってありとあらゆる銃をかき集めた。その一例として今も〔田原坂資料館〕には薩軍が遺棄したであろう袖がらみが展示されている。長い柄の先に棘を付けたもので、敵兵の衣服等に引きかけて抑え込む武器。時代がかった捕物道具である。

2. 圧倒的な物量を投入した政府軍について

政府軍は、西郷軍に対して圧倒的な物量でせめかかった。その一例が大砲である。全体で118門。西郷軍の大砲の倍にあたる。

更に、最新鋭のスナイドル銃も大量に投入している。この銃は、西郷軍が使用する旧式の先込め銃に比べて、圧倒的な速さで次から次に発射することが出来る非常に性能の高い元込め銃なのである。

元込め銃は、火薬と銃弾が一体になった薬莢を使う。その為、弾込めにかかる時間は、わずか五秒にすぎない。一方、西郷軍の主力だったエンフィールド銃は、先込め式である。発射まで30秒もかかった。しかも銃身が焼けると冷えるまで使えない。その上銃剣を装着すれば、銃口から弾薬を装填する際に銃先で負傷する危険があるので、剣付きでは射撃が出来ない。西郷軍が一発撃つに、政府軍は6発撃つ計算になる。

弾薬の補給に関しても、政府軍は西郷軍を圧倒していた。弾薬工場をフル稼働させるだけでなく、海外からも大量に買い付け、3,500万発を用意した。西郷軍の実に7倍だった。

3. 政府軍と薩軍の銃器の性能について

元来、薩軍使用の小銃は、先装式の旧式エンフィールド銃である。一発発射するたびに、銃口を手元に引き寄せて、火薬と弾丸を銃口から詰め、遡杖で持って弾丸と火薬をしっかりと銃身に押し込まなければならない。それから銃を構え、撃針のバネを引き、やっとな引き鉄を引

くのである。更に問題なのはエンピール銃は、どうしても火薬が雨に濡れやすい。火薬が雨にぬれると発火しにくくなって、結局は弾丸は飛び出さないのである。

これに比べると、官軍使用の新式スナイドル銃は、後装式の施条銃であって、銃を構えたまま遊底の操作だけで、新しい弾薬を装填することが出来るから、薩軍使用のエンピール銃が、一発発射する間に、官軍使用のスナイドル銃は、五発も六発も発射することが出来るのである。そればかりでない。スナイドル銃のいま一つの特徴は、着剣したまま射撃することも、そのまま銃槍突撃に移ることもできるのであった。

4. 田原坂に学ぶことは何か

…田原坂の戦いは、出来たばかりの日本陸軍に戦術的に多大な影響を与えた。何しろ最新式の兵器を装備した徴兵制の軍隊が、西郷軍の抜刀隊にやられてしまうのである。最新兵器に依存するだけでは勝てない、気迫、精神力が大事だということが印象に残ったのであろう。

政府軍もその抜刀隊を組織し、大きな成果をあげた。……官軍が薩軍の白兵に対して、旧佐幕藩出身の士族で固めた警視抜刀隊は三月十四日は110名投入、十五日には36名が投入された。後に「抜刀隊」の歌が出来る程の激闘になった。両日で戦死22、負傷53。薩軍側もほぼ同程度と考えると、それほど刀ではお互いに敵にダメージを与えることが出来ない。戦場で兵器の性能の不足を気迫、精神力でカバーする。それは当時においてはある程度は可能であったろう。しかし、近代兵器の性能が飛躍的に高まっていく中で、いつまでも通用することでない。

田原坂から半世紀以上後に起った太平洋戦争では、精神力を過剰に評価し、そのため玉砕する戦場が相次いだ。その背景には、この田原坂の戦いも遠因の一つでないか？

5. 結び

戊辰戦争から、故郷に凱旋した官軍の薩摩兵は、エンピール銃を持ち帰った。この英国製の最新兵器は、今や最も新しい武術の道具でもあった。それを持って戦った人達は、より若い人達に、その使用法と極意とを教えた。郷と郷との間に、しばしば対抗試合が催された。射撃の名人村田経芳が帰郷したりすると、そのコーチを受け、彼らの射撃技術は高い水準に達していた。明治十年の薩軍は、決して刀槍甲冑の旧式軍隊ではなかった。

しかしこの間に、官軍の装備は、前装エンピール銃から、後装スナイドル銃に進んでいた。弾薬消費量が薩軍に十倍するという事は、威力が十倍有ると言うことだった。西南戦争は前装銃対後装銃の戦いだった。

どちらも前装銃であったら、高い射撃姿勢をとることは、百姓出身の鎮台兵の恐怖心を更にそそり立て、もっと薩軍に有利に展開していただろう。

戦いに勝った者は、ともすれば戦勝の原因を、武器が優秀だったからでなく、自分が強かったと思いたがる。戊辰戦争の官軍の中であって、薩軍の強さは、話にならない程素晴らしかったという。全く無敵だった。篠原も桐野も、自分の力を過信した。鎮台兵なんか蹴散らして通ると、彼らは本気で考えていた。しかし前装銃は結局後装銃に勝てなかった。薩軍は一時代前の抜刀突撃に抛らなければならなかった。そこに薩摩軍の敗因の多くがあるのでなかろうか。

記念誌編集部

旧細川藩医鳩野宗巴と 11 名の医師達が向き合った西南の役 ～戊辰の役・横浜軍陣病院での英国医師達との出会いを起点として～

何故に当時開業医だった鳩野宗巴が 11 名の医師達と敵味方別なく救護活動に踏み込めたのか？

1. 鳩野宗巴の性格と先代からの医師としての教え



写真・八世鳩野宗巴 古希 70 歳 妻「律子」61 歳

医師として真摯に医業に取り組んだ姿勢の一端は「1868（明治元）年、25 歳の時、戊辰戦争が起こり、藩命で熊本一番隊医長として上野戦争に参陣して、横浜軍陣病院で薩長土の三藩の兵士 300 人の救護を担当しその功績大なりと熊本藩より賞賜されている。

先代の父の教えを守り、医師として医は仁術の心で医業に励んだ鳩野宗巴である。父からの教え、学んだ医の心が、横浜軍陣病院でイギリス医ウィリアム・ウイリスやシドール（これからの医療は誰彼の為でなく、傷つき病める人のために為されなければならない。それこそ医師の天職なり）等の敵味方なく傷病兵の救護されている現場を見聞し、併せて 5 年前に欧州 16 ケ国から 36 名が出席し、10 カ条（赤十字規約）が採択された、国際赤十字精神について彼らから教示され、彼の心に強く根付いたと考えていい。・・戊辰の役から 10 年後の西南の役で、敵味方の別なく救護が出来るなら、「医師として引き受ける」理論的裏付けとなり、実践になったと考える。

※イギリス医ウィリアム・ウイリス・・明治 2 年に薩摩藩西郷隆盛に招かれ医学校（現在、南洲墓地、南洲神社のある区域の浄光明寺跡）及び滑川ほとりに煉瓦で赤倉病院を創設、医学校長兼病院長となった。これが後の鹿児島大学医学部の発祥となる。鹿児島滞在は 8 年足らずであるが、鹿児島に近代医学の基礎を築いた人である。

2. 鳩野家 家譜の記述に見る横浜軍陣病院での学び

鳩野宗巴が横浜軍陣病院に在籍していた期間は明治元年 5 月 25 日に入局更に新たな病院勤務が命じられ、10 月 24 日まで同病院で医療業務に着く。約 5 ヶ月間滞在している。そこで

国際赤十字の理念や考え方をイギリス医ウイリアム・ウイリスやシドール等々の西洋外科医から学び、彼らが病院で敵味方の別なく治療している現場にも立ち会い見聞を広めたはずである。

3. 西南の役での救護活動を鳩野家 家譜に見る

横浜軍陣病院での5か月間の滞在で、医術の進歩が著しく深化したということは、其れだけでなく、英国医等から、医者として患者を敵味方別なく治療する心を教わり又実際その救護治療現場に彼らと一緒に何度も立ち会っている。

立前論でなく、戊辰の役でのこの体験が、明治10年西南戦争時に10年間の時間の経過の中で鳩野宗巴の心の中に、吟味・再構築され「医師は敵味方別なく、傷ついた或いは病める兵士の救護に当たるべし」の信念が確固たるものとして出来上がっていた…と考える。

4. 結び

「国際赤十字社」が発足したのは1863（文久4）年。それから14年後に我が国で最後の内戦「西南戦争」が起きた。当時の庶民は勿論政府の高官さえも、味方の兵には救護の手を差し伸べても、敵兵救護することは、今日我々が考える領域を遥かに超えた行為であった。（江戸幕府が滅んで近代国家に代わって10年目、江戸時代の武士道が色濃く残っていたはず）

そして、多くの方々は日本の赤十字活動は西南戦争で田原坂の激闘の中で生まれた敵味方の別なく傷つき倒れた兵士達を救済する組織の「博愛社」と思い浮かべられると思う。

皇室を始め国の認可と支援を受けて立ち上げた「博愛社」は佐野常民、大給 恒の人道、博愛の精神の発露に違いない。敬愛と称賛の声を大にしたいと思う。

その一方で我が郷土熊本の開業医鳩野宗巴が中心になり11名の医師達と自らの意思と力でほぼ同時期に戦時医療を組織的に起ち上げ実践している。在野で「医は仁術なり」と救済の手を差し伸べたのである。民間医達が手弁当で薬剤、医療器具を持ちより救護団を起ち上げほぼ同時進行で医療実践をしたことは大いに称賛に値する。

そのことから熊本は現代ヒューマニズム発祥の地と称しても差し支えはなく、福祉の原点がそこにある。置かれた時代背景を視座に置きながら、今も大事に鳩野家に保管されている家譜を軸に更に埋もれた事実を今後とも明らかにしていきたい。

記念誌編集部

西郷小兵衛の戦没地碑に纏わる人々について

～妻松子を軸にして～

1. はじめに

以前何度か玉名の繁根木川の下流、左岸の堤防になる西郷小兵衛の戦没地碑を訪ねたことがあるので、玉名歴史研究会発行の「歴史玉名」第63号に掲載された「西郷小兵衛墓標異文」を読み、西郷小兵衛の妻松子の書簡6通が「玉名市立歴史博物館ころピア」に保管されていることが分かり調査研究を始めた。

・妻松子の書簡6通について

玉名の繁根木川の下流、左岸で西郷小兵衛は官軍側の銃弾を浴びて戦死する。その付近は永徳寺村で民家のほとんどは焼失。焼失を免れたのは橋本鶴松さん宅を含めて4戸のみだった。(中略) その内の橋本鶴松さん宅に薩兵数人が駆け込んできて、雨戸を一枚乞いた。その申し出に応じたことが縁になりその後、橋本鶴松さんは西郷小兵衛の戦没地碑が建つと、地碑の清掃墓守役を長年つづけられた。このことを知った西郷小兵衛の松子夫人が感謝の意を表す書簡を鶴松さんに寄せてた。(中略) 平成22年に橋本家から玉名市立歴史博物館ころピアに、それらの書簡は寄託されたことを知った。この書簡を具に見る事により、西郷小兵衛が戦死した時の想いや後の妻西郷松子の生き様を知る手がかりがあるのでないかと思ひ研究を始めた。

2. 西郷小兵衛の妻松子

西郷松子……安政4(1857)～昭和18年(1943)、父は有馬糺右衛門、母は大山巖の姉国子である。はじめはます子であったが、吉二郎の先妻がます子で有ったので同名を避けて松子と改名した。(中略) 2月27日の高瀬の戦いで敵弾を受けて戦死した(夫・西郷小兵衛31歳)。この時妻松子は21歳、幸吉2歳であった。

幸吉は大正7年、43歳で亡くなったが松子は昭和18年、86歳まで存命されたので、長年に亘り隆盛夫人糸子や吉二郎夫人園子を助け西郷邸とその家族達を守った。…戦後の西郷家では大変であった。その武村邸で西郷の妻糸子を中心に吉二郎の後妻園と西郷小兵衛の妻松子が心を合せ力を合わせ西郷一家の遺児達を育て、家事も献身的に果たした。

3. 西郷家の家屋・住まいの変遷

①加治屋町の屋敷

西郷隆盛生誕の地加治屋町の西郷屋敷(鹿児島市武町1792)は大世帯を抱え、赤貧洗うが如く、父母の療養の薬代、続く葬儀代、江戸への旅装費用等がかさみ下加治屋町居屋敷売却したのは安政2(1855)年12月。売却後は上之園に借り家住まいとなった。

②武村の屋敷

戊辰戦争で大総督参謀として功勞を立てた後、故郷に帰り、1869(明治2)年7月、上之

園の西郷家近くに住んでいた寄合並三崎平太左衛門が、武村に持っていた690坪の屋敷を購入した。実際は1000坪あった。

この説の他に明治3年島津藩家老二階堂氏から譲り受けたという説もある。

※廃藩置県や翌々年の明治天皇の西国巡幸等で、鹿児島にゆっくり腰を落ち着ける暇もなく、西郷がこの屋敷に多く起居したのは、1873（明治6）年の朝鮮への使節問題に破れて、11月10日に帰郷してからのことであった。参議・近衛提督を辞めて帰郷した西郷は、「武村」に戻り、この屋敷に住んで晴耕雨読に勤しんだ。武村から田上の奥の西別府に開墾した耕地まで通ったり、馬に肥料桶を負わせ、自ら馬を引いて肥料を貰って歩いたりもしたという。

※この武村の西郷屋敷は1877年6月24日西南戦争での官薩の激戦で全焼。「1880（明治13）年に、弟西郷従道が再建」当時住んでいた家族は12名・・・糸35歳、菊16歳、寅太郎12歳、午次郎8歳、酉三5歳、吉二郎妻園37歳、その子隆準14歳、光子15歳、小兵衛の妻松21歳その子幸吉2歳西郷家の執事役川口雪篷の面々でした。

※昭和20年の鹿児島空襲で焼失。その後は屋敷跡の主要部分は市の公園として保存されて現在に至る。

③永吉の屋敷（西南戦争で焼失した武村の西郷屋敷からの避難先）

此処永吉にも官軍の追探が、日に益々急となり、愈々嚴重の度を加へくるので、終に永吉に住むことが出来ず、西別府の別荘に移ることとなった。室数はようやく3室か4室住んでいた家族は12名にはとても狭くて窮屈であった。

④西別府の別荘

西別府の別荘から「幾谷々を隔てし東北1里半（6キロ）の彼方」城山での戦いの様子を伺い、夫隆盛の戦死を戦争の終結で知るのである。

…官軍の砲撃は日一日と熾烈を呈する。砲声は山谷を揺り動かして、日一日と盛んに聞こえてくる。斯くて愈々9月24日の総攻撃となった。

父や伯父の戦死をば、目のあたりに見学する。人生これくらい悲惨なことが有ろうか。（中略）能く世間では親の死に目に会えなかったと言って、痛嘆する者がある。されど寅太郎、午次郎の二少年は、父の死に目に会えなかった処の悲しみではなく、眼前、父を見殺しにしたのであった。されば其愛愁傷、其悼惜！其哀嘆！言ひ表すに言葉が無かったと記されている。

4. 亡き夫西郷小兵衛戦没地碑清掃墓守役を長年された橋本家に対するお礼の書簡を見る

西郷小兵衛の妻松子の文章力、書体の見事さ等々は長年西郷死した後も居候していた西郷家の執事役川口雪篷からの勉学であつたと思われる。彼の卓越した書体は今日、南洲墓地にある西郷隆盛の墓碑銘が物語っている。松子は長年の同居生活（約20年）の中で多くのことを彼に学んだと考えていい。

西別府の別荘に隠れ住んでいた折も「日夜の分かちなく、暇さえあれば絶えず雪篷翁より、漢書の素読を受け、孜々として勉学を怠らなかつた。そのことが書簡の文字に見事に表れている。

紙面は毛筆で、戦没地碑の管理清掃等に対する簡潔明瞭な、お礼と供物料として金子が添

えられた文章がほとんどだが、石碑が建てられた昭和10年2月27日建立以降の手紙には、自分（78歳以降）の体調不良であることも添えられた手紙もある。昭和18年3月6日86歳で没するまでに一度も夫小兵衛の戦没地碑を訪ねて玉名迄出向くことはなかったと考えられる。

5通目の手紙は日付が昭和15年2月13日・83歳の時である。最後の6通目は松子は昭和18年3月6日86歳で永眠しているのです、その間に書かれた。

5. 西郷松子の一生を思う

小兵衛は明治10年2月27日の高瀬の戦いで敵弾を受けて戦死した。この時妻松子は21歳、幸吉2歳（生後間もなく脳膜炎を患い病弱で肢体不自由）であった。

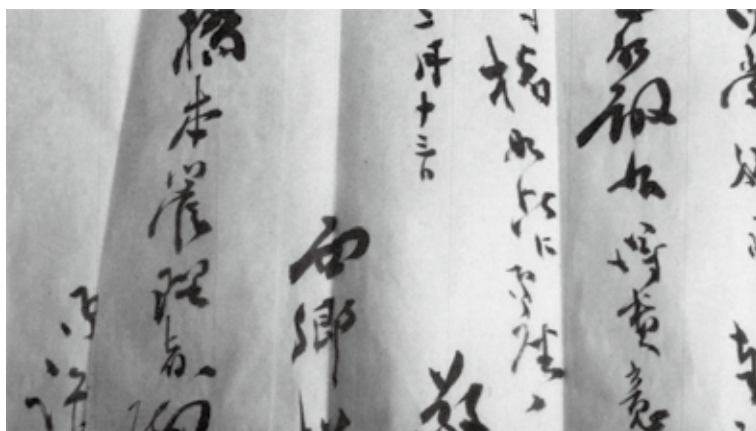
城山の戦いでは義父の西郷隆盛を失くす。又、生還したが片足を失った甥西郷菊次郎、叔父市来宗介（城山で戦死29歳）、甥大山辰之助（鹿児島・甲突川での戦闘で砲弾を受け2日後の明治10年5月7日戦死）、姻族の甥誠之助（長井村で負傷）等々身内親族が被った深い悲しみを共に体験した。

その後も続く日清・日露戦争・第一次世界大戦、日中戦争、最晩年に向き合った太平洋戦争。正に松子の人生86年その生活の多くは戦争に明け暮れた人生であった。

戦時下の苦しい生活を送る中も一人息子幸吉に先立たれた松子はどのような思いで我が国の有り様、政治そして戦争を思い、己の往時をどのように懐古していたのだろうか？住んでいた屋敷は死後2年目の昭和20年の鹿児島空襲で焼失した。我が国の敗戦を又我が家が空襲で焼失する惨事に遭遇しなかったのがせめても幸いかと思う。

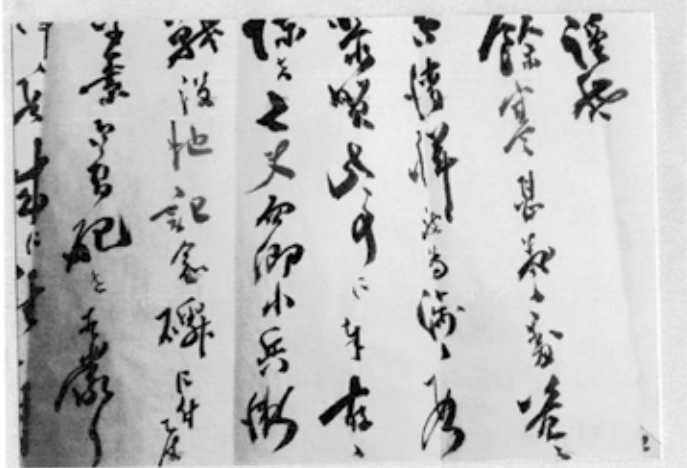


「西郷家の墓」…鹿児島市常磐町にある。西郷松子・幸吉の墓



①
 拝啓
 寒冷の頃、ますますお元気で過ごすごの事
 お慶び申し上げます。私も
 無事変わりなく暮らしておりますので、
 ご安心なさってください。
 さて、亡き小兵衛の建碑
 については、日頃よりお世話に
 なり、有難く
 感謝いたします。就きましては誠に
 些少ではございますが、花料
 として金貳円、別紙
 小為替券を同封しお送り
 いたしましたので、ご受納くださいませ
 ようお願いいたします。
 先ずは右を申し上げたく、お手紙
 のように認めました。
 敬具
 (昭和十二年)
 十二月二十八日 (加々)
 西郷松子
 橋本管理人殿
 侍史

②
 拝啓
 春風が肌寒く感じる頃、いよいよ
 お元気で過ごすごの事
 お慶び申し上げます。
 申し上げますに、故小兵衛の記念
 碑管理について、兼ねて
 ご高配を蒙りまして
 感謝の至りに存じます。
 就きましては、寸志まで花料として
 金三円、同封の郵便



西郷松子の書簡の一部

熊本協同隊主幹崎村常雄について

一天性の民主主義者

「諸君、諸君が長年月の間、幾多の^{かんなん}艱難と苦痛に耐えて^よ善く戦闘に努め、以て我が協同隊の名前を高からしめたるは、実に不肖が諸君と共に喜び、かつ誇るところである。然れども如何せん。大勢可ならずして、戦いの機は既に定まっているように思われる。全く水泡に帰する兆候を現している。否その失敗に終わる運命も共に明白である。

此処に至って、余は諸君に晩節を全うせられんことを強くない。諸君の中には老父母の在る方あらん。妻子の在る方もあらん。又兄弟ある方も在らん。帰ってその老父母妻子に対する義務を尽くすも、又人生の大任を果たす所以である。

余は故に諸君に明白に宣言する。……「余等と共に望みなき戦いを続けんとする者は留まれ、其の老父母妻子兄弟に対する責任を全うせんと思う者は帰れ。余は協同隊長としてその旅費と相当の手当をなすべし。敢えて情を制し、心を曲げて悔いを残さざらんことを望む」と。

主幹崎村の演説はかくのごとく誠意にあふれ、理路整然として聞く者すべて感涙したことであろう。崎村常雄は温かい心を持った天性の民主主義者であった。

万感胸に満ちて別れ行く三人にも感涙を誘われるが、「望みなき戦場」に敢然と立つ肥後武士の雄々しさにもこれまた低頭する思いがある。

「崎村^{ただ}乃ち帰省を請いし三人に対し各旅費を給し、之を論して曰く「必ず之を^{とひ}徒費することなく、帰りて切に孝悌の道を父母兄弟に尽くすべし」と。

「熊本協同隊戦記」に崎村と協同隊の態度を評して曰く、『古佳今来、兵を構へ戦をなすもの少なからず但し終末のは破局を洞察して、以てあらかじめ戦死に説示して、進退を自由に放任したる將軍幾何かある。崎村之を能くせり。世に戈を取りて戦を為すの兵士甚だ多し。但し、その破局の趨勢を宣言せられ、自由進退を容せられて然も猶、死を希ふて戦場に立つもの^{いくぼく}幾何かある。協同隊よくしたり』と。又長井村での降服時のこと……協同隊の方は、議論が大いに紛糾した。自殺しようと言う者、潜伏しようという者、戦って死のうという者、其々の論を主張して譲らなかった。元来、熊本人の議論倒れという語があるくらい、熊本人は頑固で、自説を譲らない。ましてや協同隊は言論を以って世に立とうという集まりである。議論が紛糾し出すと止めがなかった。其の時まで黙っていた協同隊主幹は手を挙げて皆を黙らせ、沈痛な表情で話した。

「我々が死を顧みずにこの戦いに参加したのは、国運の衰微、権臣の専横を^{ほこ}憤り敢て戈を執って国家の姦族を誅除し、3,500 万余の同胞を塗炭の中から救おうと欲してである。しかし、不幸にして謀が機に当たらず、百戦連敗、糧尽き、積年の志も空しく水泡に帰してしまった。これは千秋の恨事ではないか。我々は今日まで硝煙弾雨の間に立って確固として自らを信じた所以のものは、戦勝の機があることを信じたからこそである。然るに今や進退極まり、事やぶれたのは火を見るよりも明らかである。

事此処に至って一兵一士と雖も之を殺し、これを傷つけるは、其の道であるまい、もし従

来の考えに固執して屠腹したり、戦って死んだりするような醜態を見せては、独り我が帝国の恥辱であるのみならず、我が党の素志もまた世に知られずに消滅してしまう。

故に現在、文明各国に行われている「陣上虜」となって武器を納め、従容として縛に就き、各自が抱懐する処の志を法廷に陳述し、甘んじて国法に服そうでないか。諸君、此のことをよく考えてもらいたい」(中略) 崎村のその言葉で皆の騒ぎは静まった。

事此処に至って一兵一士と雖も之を殺し、これを傷つけるは、其の道であるまい。もし従来の考えに固執して屠腹したり、戦って死んだりするような醜態を見せては、独り我が帝国の恥辱であるのみならず、我が党の素志もまた世に知られずに消滅してしまうではないか。

戦後70年東条英機首相の昭和16年の「戦陣訓」と余りにも離れた宣言に「望みなき戦場」に敢然と立つ肥後武士の雄々しさに低頭する。

官軍に降服して後懲役刑を受け大分監獄に収監され、獄中で肺を病みて死す。時は明治10年8月17日 31歳没。

記念誌編集部

第九章

熊本三州会沿革



桜島遠景

熊本三州会沿革

会 長	年 度	回数	要 項	
吉永 吉次	明治 10 年 2 月下旬		薩軍は、川尻町に大本営を設け、延寿寺に衛戎病院を仮設した。(他寺は、後難を恐れた。) 延寿寺伝弘応師住職は、寺の一部を提供し戦死者戦傷歿者の場所、月日、姓名等を一人一人帳簿に記入し丁重に埋葬し読経廻向を修めた。 3 月 2 日より 4 月 4 日に至るまでの 853 名 伝弘応師住職は 28 才の若さであった。 以上の墓地を「薩州墓」と称していた。	
	大正 2 年 2 月 10 日		この年伝弘応師住職は、64 才で遷化され、この延寿寺に安らかに眠られる。	
	大正 5 年 2 月		この年、31 代伊藤顕俊師が転住して来られた。大正 5 年 2 月薩軍墓地の遺骨を集修し、合同碑として、大正招魂の祭を施行し、毎年参詣者が増加し、その後 1 ケ年も休んだことはない。 遺骨収集については、万町居住の材木樽丸商を営んでいた川添豊志(延寿寺先々代住職と懇意)により散乱していた遺骨を集め、「明治 10 年戦役薩軍戦死者埋葬の地」を大書した標木を建てた。 その後、該標木の由来を川添氏から知った熊本県内部部長堀口助治が感動した。 当時、在熊の会員の川路知事、堀口内部部長他重だった人々が延寿寺住職と川添豊志の志に共鳴し、更に、県下に散在する遺骨を調査、発掘して延寿寺境内に一大招魂碑を建立し、永く祭祀することに決し工事に着手し、大正 5 年に落成し、盛大落成式兼第 1 回招魂祭が執行された。 (大正 5 年 6 月 4 日)	
	大正 5 年 6 月 4 日		第 1 回	西南戦没後、薩摩・大隅・日向の熊本在住者が相集い「西南戦没薩軍将士の墓」を建立、第 1 回除幕碑祭、建立者を熊本三州会と称す。
	大正 6 年 昭和 5 年		2 15	丁丑役薩軍戦没者墓碑祭
昭和 6 年 9 月 25 日 12 月 13 日	16	熊本市出水町観水楼にて発会式 墓碑祭举行 熊本市公会堂大広間旧館にて第 1 回総会举行		

会 長	年 度	回数	要 項
山口 兼雄	昭和7年 3月27日	17	熊本県下川尻町延寿寺にて丁丑役薩軍戦没者墓碑祭兼第2回総会挙行
山口 兼雄	昭和7年 12月11日		熊本市公会堂大広間旧館にて第3回総会の折、第6師団は満州事変出兵の動員を受け渡満見送る
家村 末熊	昭和8年 11月25日	18	熊本県下川尻町延寿寺にて丁丑役薩軍戦没者墓碑祭兼第4回総会 熊本市公会堂大広間旧館にて三州会出身凱旋将士歓迎会兼第5回総会
	昭和9年 4月1日	19	熊本県下川尻町延寿寺にて丁丑役薩軍戦没者墓碑祭兼第6回総会挙行
池田 永稔	昭和10年 3月31日	20	熊本県川尻町延寿寺にて丁丑役薩軍戦没者墓碑祭兼第7回総会挙行
	昭和11年 3月17日	21	熊本県川尻町延寿寺に於て丁丑役薩軍戦没者60回記念事業墓碑改修竣工式を挙行
	3月29日		熊本県川尻町延寿寺にて丁丑役薩軍戦没者60回記念祭兼第8回総会挙行
家村 末照	昭和12年 3月27日 12月19日	22	川尻町延寿寺に於て丁丑役薩軍戦没者墓碑祭兼第9回総会 藤崎八幡宮に於て三州出身皇軍将兵諸士の武運長久祈願祭挙行
	昭和13年 4月24日	23	川尻町延寿寺に於て丁丑役薩軍戦没者墓碑祭執行兼第10回総会挙行 昭和13年中、会員を4班に分ち、熊本陸軍病院療養中の三州出身傷病勇士慰問回数実施
鬼塚 正治	昭和14年 4月2日 5月28日	24	川尻町延寿寺に於て丁丑役薩軍戦没者墓碑祭兼第11回総会挙行 熊本陸軍衛戍分病院療養中の三州出身傷病勇士を主として運船組一行携同慰問実施
	昭和15年 4月7日 4月27日	25	熊本県川尻町延寿寺にて丁丑役薩軍戦没者墓碑祭兼第12回総会挙行 熊本市偕行社大広間に於て三州出身帰還将校（准慰以上）及び補充隊勤務将校（准慰以上）の慰安歓迎会（本会三州実業会共同主催にて挙行）
	9月21日		熊本陸軍病院藤崎分院、午後健軍分院慰問、鈴木舞踊、文楽座の漫才を行う。
	11月3日		玉名郡高瀬町西郷小兵衛先生墓に代表墓参
	昭和16年 4月13日 12月10日	26	川尻町延寿寺に於て丁丑役薩軍戦没者墓碑祭並びに第13回総会挙行 熊本陸軍病院慰問本院藤崎台、健軍両分院入院中の三州出身将兵を慰問す
	昭和17年 4月13日	27	川尻町延寿寺に於て丁丑役薩軍戦没者墓碑祭並びに第14回総会挙行

会 長	年 度	回数	要 項
西郷 一恵 (昭和 20 年)	昭和 18 年	28	川尻町延寿寺に於て丁丑役薩軍戦没者墓碑祭並びに第 15 回総会挙行
佐藤 秀盛 (昭和 25 年)))	
西郷 一恵 (昭和 26 年)			
石島 浩志 (昭和 27 年)	昭和 27 年 4 月 13 日 10 月 19 日	37	延寿寺に於て薩軍戦没者第 37 回慰霊祭及び定期総会を行う 菊池郡加茂川村字西郷に於て西郷南洲先生祖先発祥地記念碑除幕式を執行
長峰 正次 (昭和 28 年)	昭和 28 年	38	延寿寺に於て薩軍戦没者第 38 回慰霊祭及び定期総会を行う
六反田藤吉 (昭和 30 年)))	
玉利 薫 (昭和 33 年)			
玉利 薫 (昭和 40 年)	昭和 38 年	48	第 48 回慰霊祭・総会
年度不明 (井上睦朗 白男川史朗 山下太利)))	
	平成 3 年 6 月 10 日)	76	第 76 回慰霊祭・総会 西合志より遺骨を南洲神社へ 9 月 22 ~ 23 日、鹿児島方面戦跡巡りツアー
白男川史朗	平成 10 年 8 月 10 日	83	第 83 回慰霊祭・総会 「西南の役」遺徳を偲ぶツアー、八代古鹿方面 (23 名参加)
	平成 11 年 8 月 1 日	84	慰霊祭・総会 (85 名参加) 八代方面戦跡めぐりツアー
	平成 12 年 4 月 9 日 (日) 7 月 23 日 (日) 11 月 10 日 (金)	85	慰霊祭・総会 西南の役戦跡巡りツアー、人吉・球磨方面 (23 名) 島崎、段山慰霊祭 (22 名)
	平成 13 年 4 月 8 日 10 月 7 日 (日) 11 月 10 日 (金)	86	慰霊祭・総会 (76 名) 西南の役戦跡巡りツアー、菊池・山鹿方面 (28 名) 島崎、段山慰霊祭 (13 名)

会 長	年 度	回数	要 項	
西郷恵一郎	平成 14 年	87	田原坂慰霊祭（4名）	
	2月20日		慰霊祭・総会（93名）	
	4月13日		西南の役戦跡巡りツアー、延岡方面（26名）	
	9月23～24日		島崎、段山慰霊祭（14名）	
	平成 15 年	88	慰霊祭・総会（97名）	
	4月13日		西南の役戦跡巡りツアー、鹿児島（25名）	
	9月22～23日		島崎、段山慰霊祭（11名）	
	柏木 明	平成 16 年	89	田原坂慰霊祭（2名）
		3月20日		慰霊祭・総会
		4月11日		西南の役戦跡巡りツアー、沖永良部（27名）
7月5～6日		島崎、段山慰霊祭（14名）		
平成 17 年	90	田原坂慰霊祭（2名）		
11月10日		第90回慰霊祭・延寿寺、総会・ホテルキャッスル（113名）		
3月20日		西郷南洲顕彰の旅、山形・仙台（23名）		
平成 18 年	4月10日	90	三州会第90回慰霊祭記念誌発行	
	7月5～7日		役員会・新年会（メルパルク）（70名）	
	1月26日		慰霊祭（延寿寺）	
	1月27日		総会及び懇親会（交通センター）（75名）	
	4月9日		理事会（慰霊祭、総会の反省会）（25名） ホテルキャッスル	
	5月19日		段山慰霊祭（20名）	
	11月10日		役員会、新年会	
	11月15～16日		慰霊祭（延寿寺）	
平成 19 年	1月	93	総会及び懇親会（交通センター）	
	4月13日		理事会（慰霊祭、総会の反省会）	
	5月		段山慰霊祭	
	11月10日		「西南の役」戦跡探訪の旅	
柏木 明	平成 20 年	93	御船 八代方面（22名）	
	1月28日		役員会、新年会 メルパルク熊本（38名）	
	4月13日		慰霊祭・延寿寺（165） 総会・懇親会 熊本交通センターホテル（90名）	
	5月17日		慰霊祭・総会・懇親会の反省会 メルパルク熊本（21名）	
	11月10日		島崎・段山慰霊祭（20名）	
11月15・16日	戦跡巡り研修旅行、高千穂・日向方面（16名）			

会 長	年 度	回数	要 項
柏木 明	平成 21 年	94	役員会、新年会 メルパルク熊本 (32名)
	1月28日		慰霊祭・延寿寺 (120名) 総会・懇親会 熊本交通センターホテル (60名)
	4月12日		慰霊祭・総会・懇親会の反省会 熊本交通センターホテル (21名)
	6月9日		島崎・段山慰霊祭 (30名)
	11月10日 11月14・15日		戦跡巡り研修旅行、西都原・日南方面 (12名)
柏木 明	平成 22 年	95	役員会・新年会、熊本交通センターホテル (25名)
	1月19日		役員会 交通センターホテル (24名)
	2月16日 4月11日		慰霊祭・延寿寺 (120名) 総会・懇親会 熊本交通センターホテル (65名)
柏木 明	平成 23 年	96	役員会・新年会 熊本交通センターホテル (23名)
	1月18日		慰霊祭・延寿寺 (100名) 総会・懇親会 熊本交通センターホテル (54名)
	4月10日		慰霊祭・総会・懇親会の反省会 東急イン地下雑魚屋 (23名)
	5月24日		島崎・段山慰霊祭 (26名)
柏木 明	平成 24 年	97	役員会・新年会 熊本交通センターホテル (26名)
	1月18日		慰霊祭・延寿寺 (110名) 総会・懇親会 熊本交通センターホテル (52名)
	4月8日		慰霊祭・総会・懇親会の反省 東急イン地下雑魚屋 (20名)
	5月29日		島崎・段山慰霊祭 (21名)
	11月10日 11月27日		池満淵様尚綱学園理事長就任 崎元達郎様熊本市教育委員会委員長就任のお祝い 熊本交通センターホテル (有志 35名)
柏木 明	平成 25 年	98	役員会・新年会 熊本交通センターホテル (29名)
	1月16日		慰霊祭・延寿寺 (120名) 総会・懇親会 熊本交通センターホテル (63名)
	4月14日		慰霊祭・総会・懇親会の反省会 熊本市民会館大会議室 (24名)
	10月29日		島崎・段山慰霊祭 (18名)
柏木 明	平成 26 年	99	役員会・新年会 熊本交通センターホテル (39名)
	1月24日 4月13日		慰霊祭・延寿寺 (100名) 総会・懇親会 熊本交通センターホテル (64名)

会 長	年 度	回数	要 項
柏木 明	5月20日	100	慰霊祭・総会・懇親会の反省会 東急イン地下雑魚屋 (22名)
	11月10日		島崎・段山慰霊祭 (18名)
	平成27年 1月24日		役員会・新年会 熊本ホテルキャッスル (27名)
	2月28日		第100回慰霊祭記念行事 崎村常雄墓碑修復工事
	4月19日		第100回慰霊祭記念事業 薩軍戦没者銘碑建立除幕式 延寿寺境内 (200名)
	4月19日		第100回慰霊祭・延寿寺 (200名) 懇親会 ホテルキャッスル (107名)
	4月20日		第100回慰霊祭記念ゴルフ大会 御船チサンカントリークラブ (21名)
崎元 達郎	4月21日	第100回慰霊祭記念 戦跡巡り研修日帰り旅行(8名)	
	6月17日	総会・懇親会 熊本交通センターホテル (46名)	
	6月28日	柏木 明様米寿祝い並びに慰労会 熊本ホテルキャッスル (有志39名)	

現在の熊本三州会の活動

平成26年度の行事を活動例として挙げておく。

年 度	月 日	行事内容	会 場
26	1・11	熊本在住鹿児島県人会反省会	鶴屋東館7階呉竹
	1・24	熊本三州会役員会・新年会	熊本交通センターホテル
	3・20	田原坂顕彰会 慰霊祭	田原坂公園 慰霊碑前
	4・13	西南の役薩軍戦没者慰霊祭	川尻延寿寺 (第99回)
	4・13	総会・懇親会	熊本交通センターホテル
	4・19	熊本城顕彰会西南の役記念会	熊本市民会館 大会議室
	4・26	山鹿口戦跡顕彰会 慰霊祭	市立博物館庭 慰霊碑前
	4・26	八代おはら会総会・懇親会	ホテルセレクトロイヤル八代
	5・20	熊本三州会役員会・反省会	熊本東急イン地下 雑魚屋
	9・21	八代おはら会研修旅行	鹿児島市内・知覧・指宿
	9・23	全国鹿児島県人会 総会	鹿児島 城山観光ホテル
	9・24	南洲神社秋季例大祭	南洲神社
	10・11	熊本在住鹿児島県人会総会	鶴屋東館7階
	10・25	西南の役丁丑会 慰霊祭	健軍神社
	11・10	熊本三州会 段山慰霊祭	島崎慰霊碑前 (第37回)
	11・11	熊本在住宮崎県人会総会	メルパルク熊本

第 99 回までのあゆみ (写真集)



故山を想う



大西郷を偲ぶ



延寿寺本堂



延寿寺正門



第 97 回慰霊祭西郷隆文様挨拶



薩軍戦没者墓碑と満開の桜



平成 21 年慰靈祭風景



焼香風景



来賓席 西郷先生 星子市長 倉重先生 山下・椎井副会長



第98回慰霊祭 慰霊祭終了後の記念撮影



崎元達郎会長代行・副会長開会の挨拶



慰霊祭当日掲げられる三州旗の前に西郷隆文様挨拶



第97回慰霊祭焼香風景





段山慰霊祭
岳林寺工藤住職様を迎えての慰霊祭



慰霊祭終了後の記念撮影



関ヶ原に建つ島津隊案内書
関ヶ原古戦場島津戦跡巡り



関西鹿児島県人会総連合会との交流
関ヶ原視察研修旅行に参加



山形荘内南州会との交流
水前寺公園にて記念撮影



八代おはら会記念撮影

第十章

関連団体の紹介

三州倶楽部

荘内南州顕彰会

福岡鹿児島県人会 福岡南州会

和泊西郷南洲会

西郷南洲顕彰会

西南の役従軍者遺族会

鹿児島県人会 八代おはら会

西南の役 山鹿口戦跡顕彰会

西南戦争 田原坂顕彰会

熊本城顕彰会

西南の役 丁丑会

日本の赤十字活動発祥の地を顕彰する会

熊本在住鹿児島県人会

熊本在住宮崎県人会

関連団体の紹介

公益社団法人 三州倶楽部

- 1 名称 公益社団法人 三州倶楽部
 - ① 事務局所在地 東京都品川区上大崎一丁目 20 番 27 号
 - ② T E L 03-3447-6776
- 2 創立年月日 1918 年 2 月
- 3 役員
 - (1) 会長 本田 勝彦
 - (2) 常務理事 伊藤 蕃
 - (3) 事務局長 宮本 康生
- 4 会員数 464 名 (平成 26 年 3 月末現在)
- 5 会の目的
会員相互の親睦向上を図り、薩摩、大隅、日向の三州古来の伝統・文化、先人の事績・史実、その他公益に関する事項などを調査研究するとともに、郷土の進歩発展に資し、併せて国家社会の進運に寄与することを目的としています。
- 6 沿革
 - 1918 年 京橋三十間堀畔に設立。初代会長伯爵海軍大将樺山資紀
 - 1920 年 社団法人設立許可。初代総裁公爵島津忠重
 - 1923 年 関東大震災における三州出身罹災者の救援活動
 - 1937 年 三州倶楽部が中心になり建立の計画を推進した南洲翁銅像の除幕式
 - 1957 年 5 月杉並区の大圓寺にて戊辰役薩摩並佐土原藩戦歿者慰霊法要を営む。
9 月戊辰役薩摩戦歿者顕彰会を設置
 - 1999 年 育英事業運営委員会発足。育英基金設立を決定し募金活動開始
 - 2007 年 育英基金目標額達成。(育英基金募金活動継続)
- 7 会の主な行事
三州祭典、鹿児島懇談会、育英学生懇談会、講演研修会、戊辰役薩摩並佐土原藩戦歿者慰霊法要、新入会員歓迎会、温故知新の集いなど
- 8 補足事項

公益財団法人 荘内南洲会

- 1 名称 公益財団法人荘内南洲会
 - ①事務局所在地 山形県酒田市飯森山二丁目 304-10
 - ②T E L 0234-31-2364
- 2 創立年月日 昭和 50 年 9 月

3 役員

- (1) 理事長 水野貞吉
- (2) 常務理事 阿曾 昇
- (3) 事務局長 阿曾 昇

4 会員数

5 会の目的

- 社会教育に関する事業を行い、地方風教の作興につとめることを目的とする。
- 三つの願い
- 1. 西郷南洲先生の大徳の顕揚
 - 2. 「南洲翁遺訓」の講究と弘布
 - 3. 社会風教作興への貢献

6 沿革

- 昭和 50 年 9 月財団法人荘内南洲会設立
- 昭和 51 年 6 月南洲神社創建西郷南洲翁、菅臥牛翁の御霊を合祀
- 昭和 51 年 9 月南洲会館、南洲文庫建設竣工
- 平成 13 年 9 月「徳の交わり」銅像建立
- 平成 25 年 4 月公益財団法人荘内南洲会となり現在に至る。

7 会の主な活動行事

- 1. 資料展示 常時展示と例月展示
- 2. 人間学講座開催 毎月第二土曜日
- 3. 機関紙「敬天」発行 年 2 回
- 4. 教学と歴史の研修会 年 2 回
- 5. 西郷南洲翁の大徳を偲ぶ会開催 毎年 9 月

福岡鹿児島県人会 福岡南洲会

1 名称

- 福岡鹿児島県人会 福岡南洲会
- ①事務局所在地
〒 810-0014 福岡市中央区平尾 5 丁目 5-30
 - ②電話 092-523-2206 (FAX 兼用)

2 創立年月日

- 福岡鹿児島県人会 昭和 27 年 4 月
福岡南洲会 昭和 37 年 11 月

3 役員

- (1) 名誉会長 牧之内繁男 久保 長
- (2) 会 長 宮田 可成
- (3) 副会長 福迫 隆 有田 紘義 有馬 毅 窪 望
出口 康夫 西谷 和武
- (4) 幹事長 野田 勝己
- (5) 事務局長 園田 慶一

- 4 会員数 福岡鹿児島県人会 1,000 名
福岡南洲会 270 名

5 会の目的

福岡鹿児島県人会……会員の親睦を温め友情を厚くすることをもって目的とする。
福岡南洲会……西郷南洲翁を敬愛し、その遺徳を慕い継承すると共に、会員相互の交誼を図りながら各種行事、事業活動を通じ郷土、社会への貢献を目的とする。

6 沿革

昭和 27 年、37 年にそれぞれが平成 24 年に 50 周年、60 周年を迎え新たなスタートをいたしました。

年間にも例会、総会の開催を始め、西南の役行事、治水神社例大祭、南洲神社、おはら祭り参加、東郷神社…枚挙に暇がないほどの行事をこなしながら、会員相互の信頼関係の構築、そして鹿児島県の観光経済の発展に少しでも寄与できるように運営を致しており、今日に至っております。

7 主な活動行事

2月上旬	総会・新年会（福岡市内）
3月中旬	西南の役田原坂戦没者追悼式（熊本県植木町）
4月中旬	西南の役薩軍戦没者慰霊祭（熊本市）
4月25日	治水神社春の例大祭参拝（岐阜県海津市）
5月27日	東郷神社例大祭参拝（福津市）
8月下旬	夏季懇親会（福岡市内）
9月下旬	全国鹿児島県人会連合会懇親ゴルフ会、総会・懇談会（鹿児島市）
9月24日	南洲神社秋季例大祭参拝（鹿児島市）
9月24日	在福OB会員と福岡南洲会との懇談会
11月2・3日	おはらまつり参加（鹿児島市）
12月中旬	新会員と役員の交流会（福岡市内）
12月22日	東郷神社誕辰祭（福津市）
役員会…	毎月開催

8 補足事項

この度の「西南の役 第100回慰霊祭記念誌」の発行、誠におめでとうございます。
熊本三州会のますますご発展と会長様はじめ会員の皆様方のますますのご健勝を祈念申し上げます。

和泊西郷南洲顕彰会

1 名称 和泊西郷南洲顕彰会

- ① 事務局所在地 鹿児島県大島郡和泊町和泊 591
- ② TEL 0997-92-0290

2 創立年月日 昭和 52 年 12 月 10 日

3 役員

- (1) 常任顧問 大山 安弘
- (2) 名誉会長 竿田 富夫
- (3) 会長 逆瀬川勝久
- (4) 副会長 西口 福恒・本部 忠孝・島田香代子
- (5) 事務局長 玉野 憲治

4 会員数 290 名

5 会の目的

この会は、沖永良部牢居中に、敬天愛人の大精神を築きあげられた西郷南洲の遺訓と盛徳を顕彰し、現代社会に高揚することを目的とする。

6 沿革

- ・昭和 52 年…西郷南洲百年祭を機に西郷南洲顕彰会を設立
- ・昭和 53 年…南洲神社境内に西郷南洲翁の立像を建立
- ・昭和 59 年…西郷南洲翁牢屋復元
- ・昭和 62 年…西郷南洲翁座像を牢屋に安置
- ・平成 3 年…土持政照翁、操 坦勁翁の胸像を建立・南洲文庫跡碑を建立
- ・平成 15 年…敬天愛人発祥の地記念碑の建立
- ・平成 19 年…創立 30 周年記念事業
- ・平成 23 年…西郷南洲記念館開館
- ・平成 24 年…西郷南洲翁遠島 150 周年記念事業

7 会の主な活動行事

- ・西郷南洲翁を偲ぶ会（9月24日）
- ・公民館講座における「西郷塾」の実施
- ・西郷南洲翁についての教育（各小学校）
- ・えらぶ南洲だよりの発行
- ・和泊西郷南洲顕彰会総会
- ・西郷南洲翁生誕記念グラウンドゴルフ大会
- ・西郷南洲剣道大会

公益財団法人 西郷南洲顕彰会

1 名称 公益財団法人西郷南洲顕彰会

- ①事務局所在地 〒892-0851 鹿児島市上竜尾町 2-1
②TEL 099-247-1100 FAX 099-247-3373

2 創立年月日 昭和 57 年 12 月 1 日

3 役員

- | | | | | | |
|---------|-------|-------|-------|-------|--|
| (1) 理事長 | 桂 久昭 | | | | |
| (2) 評議員 | 玉川 哲生 | 野田健太郎 | 萩元美恵野 | 古木 圭介 | |
| (3) 理事 | 寺田 洋一 | 武田 敏郎 | 大堂 洋 | 西郷 隆文 | |
| | 諏訪 秀治 | 鶴田伊都雄 | 高柳 毅 | 徳永 和喜 | |
| (4) 監事 | 久保 武徳 | 濱田 純逸 | | | |

4 会員数 677 名

5 会の目的

西郷南洲翁を中心とする明治維新先覚者の偉業遺徳を顕彰するとともに、その事績及び精神的遺産を後世に継承するための研究調査並びに一般への啓発活動を行いながら、青少年の教育と健全な育成に寄与する。

6 沿革

西郷隆盛没後 100 年に当たる昭和 52 年、全国から寄せられた協賛金によって「西郷南洲顕彰館」が建設され、記念事業の精神を次の 100 年に向けて継承するべく、県と市から出捐を仰ぎ、一般篤志のご寄附と共に昭和 57 年 12 月 1 日「財団法人西郷南洲顕彰会」を創立。平成 24 年 4 月 1 日より「公益財団法人西郷南洲顕彰会」として公益法人に移行。現在に至る。

7 会の主な活動行事

毎月第4土曜日に「遺訓学習会」を開催。「西郷南洲顕彰館」を鹿児島市より委託を受けて運営。9 / 23 秋分の日には毎年「西郷どんの遠行」を開催。遺族会と共に「西南の役を偲ぶ旅」を主催。

西南の役従軍者遺族会

1 名称 西南の役従軍者遺族会

①事務局所在地 〒892-0851 鹿児島市上竜尾町 2-1 西郷南洲顕彰館
②TEL 099-247-1100

2 創立年月日 昭和52年8月20日

3 役員

(1) 会長 桂 久昭
(2) 理事 寺師礼四郎 野間 清光 吉盛 貞夫
(3) 幹事 西 進次郎
(4) 顧問 鶴田伊都雄 高柳 毅 中村 三郎

4 会員数 279名

5 会の目的

西南の役西郷軍に従軍した者の遺族の親睦を図り、南洲神社並びに同墓地及び西南の役の遺跡、招魂碑などの浄化に奉仕協力し、南洲精神の昂揚を図ることを目的とする。

6 沿革

西南の役百年記念事業として昭和52年に結成。
南洲神社の奉賛並びに戦没者従軍者の顕彰活動に奉仕しながら現在に至る。

7 会の主な活動行事

- ・他団体と協力して南洲翁月命日に墓地一帯の清掃
- ・毎年9月23日（秋分の日）西郷どんのエンコに参加
- ・南洲神社大祭の奉仕協力及び参拝
- ・遺族調査及び情報収集

鹿児島県人会八代おはら会

1 名称 鹿児島県人会八代おはら会

①事務局所在地 〒869-5151
八代市敷川内町 2469-2 (株)八代プレハブ内
②TEL 0965-32-0515

2 創立年月日 平成元年4月15日

3 役員

(1) 会長 大里昭吾
(2) 副会長 松山和紀・永田克孝
(3) 事務局長 満岡 泰

4 会員数 78名

5 会の目的

八代おはら会は会員相互の親睦をはかり、あわせて熊本県・鹿児島県との善隣友好の発展に寄与するとともに県民像の美風を後世に結ぶ。

6 沿革

八代おはら会は、戦後、鹿児島県出身者で八代において建設業を創業した先輩の皆さんが親睦会を開いたのが始まりで、紹介により会員数が増え、昭和58年1月の例会において役員が選出され会則による会の運営の準備を進め、平成元年4月15日の総会で鹿児島県人会八代おはら会として承認・創立されて当時の会員数116名から、毎年4月の総会、秋の観月会には鹿児島方面に史跡めぐりの旅行も実行して、会員相互の親睦を深めてきた。昭和30年代初めからの歴史は60年以上になる。

7 会の主な活動行事

- ① 会員名簿の発刊
- ② 総会を4月に開催
- ③ 観月会は講演会または史跡巡り旅行を開催

8 補足事項

熊本三州会との交流は、西南の役薩軍戦没者慰霊祭・総会には、八代おはら会より毎回会長、役員が出席している。

平成9年4月第82回西南の役薩軍戦没者慰霊祭にはマイクロバスで参列して先人の遺徳を偲んだ。

平成14年9月延岡方面西南の役戦跡巡り親睦ツアー、平成15年9月鹿児島方面戦跡巡り、平成16年7月西郷南州翁顕彰沖永良部島親睦ツアーにも参加して研修と親睦を深めた。

平成19年11月、熊本三州会の八代の戦跡地探訪の旅で、出町光徳寺内の西南の役薩軍本陣跡・萩原堤防の宮崎八郎記念碑の現地案内をし松浜軒の獅子舞見学後、昼食時親睦を深めた。

熊本三州会役員の方には八代おはら会に入会され総会・観月会に毎回ご出席いただき友好と親睦を深め会に華を添えて頂いていて、今後とも友好団体としての交流を一層深めて行きたい。

※担当者

〒866-0834

八代市錦町18-5 松山和紀

TEL 0965-32-7316

私は、八代おはら会に昭和30年代に入会して先輩のご指導を頂きながら昭和58年1月の例会で事務局長を命ぜられ、五代の会長の下で会の運営に務め、平成20年4月現事務局長に引継ぎ、平成21年4月の総会において副会長に選任されました。

八代おはら会も高齢化による会員の減少に対処するため、今春の総会で役員改選に当り、若手会員の中から新理事に5名選任され今後の会の活性化に努力して行く体制で取り組んでいます。

西南の役山鹿口戦蹟顕彰会

1 名称等

- (1) 名称：西南の役山鹿口戦蹟顕彰会
- (2) 事務局所在地：山鹿市鍋田 2085 山鹿市立博物館
- (3) T E L：0968-43-1145

2 創立年月日 昭和 56 年 12 月 2 日

3 役員

- (1) 会 長 徳永 義智
- (2) 副会長 野満 郁夫
- (3) 事務局長 江崎 勝義
- (4) 顧 問 河村 修

4 会員数 60 名

5 会の目的

西南の役山鹿口の戦跡を顕彰し、理解を深めることを目的とする。

6 沿革

昭和 55 年当時 博物館において西南戦争展を開催したのが契機となりかねて薩軍の慰霊を念じておられた 山鹿市小群の田上宗人氏（鹿児島出身）が資材を投じて 慰霊碑の建立を發起された。市議会において、川野議員（当時議長）の紹介があり、市は大いにその趣旨に賛同し、田上氏の諒解のもとに、市の事業として、政薩両軍戦没者の、慰霊碑を、建立することになった。

7 会の主な活動の行事

- ① 慰霊碑前において住職をお願いし、地元（川辺校区、平小城校区）の区長、および議員団・友好団体を案内し、毎年官薩両軍の慰霊祭を行なっています。
- ② 薩軍と共に戦った 飢肥隊について日南市長との懇話会の後、合同慰霊碑に、献花、献吟しました。
- ③ 御船・甲佐における、大分佐土原隊戦闘状況の顕彰
- ④ 郷土における協同隊について顕彰について
- ⑤ 記念碑の管理

西南戦争田原坂顕彰会

1 名称 西南戦争田原坂顕彰会

（平成 27 年 4 月 1 日から「西南戦争田原坂顕彰会」へ改称予定）

- ①事務局所在地 熊本市北区植木町岩野 238 番地 1（熊本市北区役所総務企画課内）
- ②T E L 096-272-1110

2 創立年月日 平成 3 年 12 月 19 日

3 役員

- (1) 会 長 藤井修一
- (2) 副会長 牧野光明、藤田信雄

(3) 事務局長 澤田宏明

4 会員数 158名 (H 26. 8 末現在)

5 会の目的

西南戦争史跡田原坂の保存、顕彰に務め、理解を深め、地域の活性化に寄与することを目的とする。

6 沿革

平成3年12月19日 発足

毎年3月20日に西南の役田原坂戦没者追悼式を田原坂公園慰霊塔前で開催
(3月20日は西南戦争最大の激戦地である田原坂の戦いが終結した日)

7 会の主な活動

- ・西南の役田原坂戦没者追悼式の開催 (毎年3月20日)
- ・田原坂公園その他西南の役関連史跡の清掃活動
- ・西南の役関連史跡等への研修視察

8 補足事項

植木町合併特例区の終了 (平成27年3月22日) に伴い、本会は平成27年4月より新事務局体制に移行する必要があると見られ、事務局所在地など変更となる可能性があります。そのため、今回の記念誌発行時期 (平成27年10月) には、今回記載の内容と相違する場合があります。今回は、現時点での情報を記載しております。

熊本城顕彰会

1 名称 一般財団法人 熊本城顕彰会

① 事務所所在地 熊本市中央区花畑町3-1 熊本市役所花畑別館

② TEL 096-352-2975

2 創立年月日 昭和2年7月8日

3 役員

(1) 会長 三角 保之

(2) 副会長 小堀 富夫

(3) 事務局長 柳川 彰也

4 会員数 購読会員 500名

5 会の目的

熊本城を顕彰することによって、郷土熊本の歴史や文化の保護発展に寄与することを目的に、熊本城に関する資料の収集、編集及び貸付、熊本城を中心とする文化財の保存及び活用に関する調査研究、会誌「熊本城」の刊行等の事業を行う。

6 沿革

当時の荒れ果てた熊本城址を保存するために、昭和2年7月、会長を熊本県知事佐竹義文、副会長を熊本市長辛島知己として、「財団法人熊本城址保存会」として設立された。その後、文部省から熊本城の管理団体に指定され熊本城の保存整備に努めてきたが、昭和26年熊本城の管理権を熊本市に移管した。その後名称を「財団法人熊本城顕彰会」と改称し、顕彰活動を続け、平成25年4月現在に至る。

7 会の主な活動行事

- ① 会誌「熊本城」の発刊
在熊の方の熊本城に関する真摯な研究論文を掲載することを中心に年4回発刊している。
- ② 熊本城顕彰会所蔵資料の貸付
当法人所蔵の貴重な歴史資料を熊本市博物館に貸し付け、博物館では博物館本館と分館（熊本城天守閣）に展示、一般に公開している。
- ③ 西南の役記念会開催
西南の役の犠牲者を弔い、歴史を正しく後世に伝えるため、毎年4月に、熊本市民会館で講演会等を実施している
- ④ 熊本城めぐり
熊本市と共催で、熊本城域外周を夜間徒歩で廻りながら、四季折々の熊本城の素晴らしさを堪能する。夜桜、納涼、仲秋の名月、厳寒と年4回実施。

西南の役丁丑会

1 名称等

西南の役丁丑会（平成12年「丁丑感舊会」を改称）

（丁丑：明治10年の干支）

（1）事務所 熊本市西区京町本丁2-56 森崎方

（2）電話 096-352-8199

2 創立年月日

明治13年10月26日

3 役員

（1）会長 内藤 儀彦（熊本隊3番小隊軍監 内藤儀十郎曾孫）

（2）副会長 杉田 成（熊本隊1番小隊軍監 古閑俊雄曾孫）

（3）事務局長 森崎 淳一（熊本隊3番小隊軍監 内藤儀十郎曾孫）

（4）顧問 佐々 淳行（熊本隊1番小隊長 佐々友房孫）

4 会員数 69名

5 会の目的

西南の役熊本隊遺族を基に本役に参戦した薩軍及び政府軍関係者を主体として、祖先の遺徳顕彰にあたる。

6 沿革

- （1）明治10年8月、薩軍と行動をともにしていた熊本隊は、日向長井村で政府軍に降伏
- （2）10月 長崎の九州臨時裁判所で、隊長池辺吉十郎、副隊長松浦新吉朗、参謀櫻田惣四郎・大里八郎ら熊本隊幹部は死刑判決を受け、26日斬首となる。その他多くは裁判後に東京・広島等の監獄へ護送されたり、軍事病院に収容された。
- （3）明治13年、監獄にいた同志が免罪となり相次いで帰郷した。
- （4）一番隊長の佐々友房ら生存者が、池辺隊長以下の命日にあたる明治13年10月26日、熊本隊出陣の地である健軍神社において、戦死者270余人の第1回慰霊祭を挙行了。
- （5）慰霊祭には、遺族や同志千数百人が参列した。
- （6）これら遺族・同志による会が「丁丑感舊会」であり、以来130年以上にわたり、毎年慰霊祭が行われている。
- （7）明治18年熊本隊の生存者により、慰霊塔「丁丑感舊碑」が、熊本市手取本町に建立されたが、大正12年熊本市電敷設に伴う道路拡張のため、熊本市立田の官軍墓地（現市営小峰墓地）横に移転した。

- この際、同志の決起の趣旨と行動を知らせる池辺吉十郎執筆の「自誓書」と宇野東風執筆・揮毫の「拳兵始末」の2基を新たに設置した。
- (8) 昭和2年、西南の役50年にあたり、宇野東風が「丁丑感舊録」を編集・刊行
 - (9) 昭和43年、熊本県護国神社に熊本党薩諸隊（熊本隊・人吉隊・竜口隊・協同隊・川尻鎮撫隊）330名の戦没者が合祀された。
 - (10) 平成12年10月「西南の役丁丑会」と改称
 - (11) 昭和62年 大口市高熊山「池辺吉十郎・辺見十郎太奮戦の地碑」建立に協力 除幕式に代表参列
 - (12) 平成2年 高熊山山麓の「熊本隊墓地碑銘」建立に協力 除幕式に代表参列
 - (13) 平成4年「高熊山慰霊碑」建立に協力 除幕式に会員多数参列

7 会の主な活動

慰霊祭 毎年10月（健軍神社又は丁丑感舊碑前で）
熊本三州会を始めとする西南の役の関係諸団体との交流

8 その他

会員の高齢化及び会員の減少で、会勢は沈降化

日本の赤十字活動発祥の地を顕彰する会

1 名称 日本赤十字活動発祥の地を顕彰する会

- ① 事務局所在地 〒861-8072 熊本市北区室園町12-53 拝聖院
- ② TEL 096-343-0015

2 創立年月日

有志相集い「日本の赤十字活動発祥の地を顕彰する会」が平成10年発足。
平成14年11月28日 NPO法人として認可され、以後顕彰活動を行っている。

3 役員

- (1) 会長 柏木 明
- (2) 副理事長 行徳 勝明
米満 弘之
港 敏一
佐藤 義雄
- (3) 事務局長 坂口 寛治
- (4) 顧問 福田 稠
福島 啓祐
蒲島 郁夫

4 会員数 36名

5 会の目的

定款3条に定める「博愛と人道」の精神が敷衍し、社会の平和と繁栄に寄与する活動を実施する。

6 沿革

毎年 拝聖院に咲く彼岸桜の開花時期に合わせて理事会、碑前祭並びに会員相互の親睦を図るための観桜会を開催。5月中下旬に、総会を開催し併せて講演会を開き会員の研修の場としている。部外者に門戸を開き啓蒙と会員拡大をも図っている。

日帰り歴史探訪の旅を11月頃に毎年企画し実施している。

機関紙を年2回を目途に発行している。

7 会の主な活動行事

- ① 拝聖院に「鳩野宗巴を始め11名の医師達の西南の役での活躍状況」パネル常時掲載
- ② 広報活動の一環として年二回機関紙発行
- ③ 総会・講演会等を実施
- ④ 会員研鑽の場として日帰り歴史探訪の旅 実施
- ⑤ 理事会・碑前祭・観桜会 実施
- ⑥ 新会員の募集を強化し、会の充実発展を図る

熊本在住鹿児島県人会

1 名称 熊本在住鹿児島県人会

- ①事務局所在地 熊本市東区尾ノ上一丁目47-27 (有)ナイスリヴ内
- ②TEL 096-381-5333

2 創立年月日 昭和55年10月16日

3 役員

- (1) 会長 池満 淵
- (2) 副会長 後藤 久敬 杉本 統美 竹内 義雄 樋口 信夫 本坊 幸吉
- (3) 事務局長 徳留 和憲

4 会員数 名簿上は362名ですが年会費納入者は約200名

5 会の目的

本会は、会員相互の親睦をはかり併せて熊本県・鹿児島県との善隣友好の発展に寄与するとともに県民像の美風を後生に結ぶ。

6 沿革

7 会の主な活動行事

総会・懇親会及び年間数回の役員会
全国鹿児島県人会総会参加
熊本三州会慰霊祭・総会参加
宮崎県人会懇親会参加
つばめ会・錦江会

熊本在住宮崎県人会

1 名称 熊本在住宮崎県人会

- ①事務局所在地 熊本県菊池郡菊陽町原水1136-15
- ②TEL 096-232-4071

2 創立年月日 県人会会則制定施行 昭和44年6月26日

3 役員

- (1) 会 長 二見郁男
- (2) 顧 問 川越忠信 藤間富士斎
- (3) 副会長 梅北兼弘、黒木三治、豊岡芳子、八重尾徳文、年見隆男
- (4) 事務局長 山本省一

4 会員数 約 70 名

5 会の目的

会員相互の親睦をはかり、宮崎県及び熊本県の進歩発展に寄与する。

6 沿革

昭和 30 年頃、当時熊本県議の井上陸朗氏等により組織され、宮崎県人会として毎年、春秋の 2 回懇親会を実施して親睦活動を始め、昭和 44 年に県人会則を制定し年 1 回総会・懇親会を実施、現在に至っている。

歴代会長

初代：井上陸朗、2 代：押川秀臣、3 代：大浦辰夫、4 代：和田日出夫、5 代：西岡鐵夫、6 代：川越忠信

7 会の主な活動行事

- (1) 親睦会の開催
- (2) 宮崎県広報紙等の配布
- (3) 熊本県進出企業との交流支援
- (4) 他団体との交流（熊本三州会、鹿児島県人会、広島宮崎県人会）
- (5) 宮崎県庁主催のみやざき応援隊交流会参加

第十一章

會員名簿・会則

熊本三洲会役員名簿

(五十音順)

顧 問	
1	池満 淵
2	木原 稔
3	木村 仁
4	西郷恵一郎
5	酒匂 光郎
6	中山 峰男
7	藤間富士齋
8	二見 郁男
9	本坊 幸吉
10	本坊 雄一
11	三浦 一水

相 談 役	
1	三浦 牧子
2	

会 長	
1	柏木 明

会長代行・副会長	
1	崎元 達郎

副 会 長	
1	竹内 義雄
2	脇田 五典
3	梅北 兼弘
(就任順)	

監 事	
1	杉本 統美
2	濱口 直也

理 事		
1	有村 謙一	
2	鬼崎 行男	
3	柏木 信義	
4	亀田 哲也	
5	木通 啓子	
6	木村 良子	
7	黒木 三治	
8	是枝 仁	
9	坂口 寛治	
10	柴田 章子	
11	杉安 初喜	
12	瀬戸口章三	事務局長
13	玉田 順士	
14	寺地 靖	
15	徳留 和憲	
16	中尾 桂子	
17	中野 揚子	
18	二宮 勉	
19	濱田 義記	
20	樋口 信夫	会 計
21	測上 勝	
22	松下 数雄	
23	松田 茂男	
24	満岡 泰	
25	山本 省一	
26	吉津 俊子	

熊本三州会会員名簿

平成27年八月一日現在

No.	氏名
1	相藤 克秀
2	青柳 英幸
3	秋月 孝行
4	浅谷 友信
5	荒木 正文
6	有川 孝一
7	有村 謙一
8	有村 嘉人
9	家村 茂美
10	池田 篤
11	池田 博司
12	池満 淵
13	石塚 燈
14	一ノ瀬良利
15	伊藤 竜彦
16	井上 英俊
17	岩下 栄一
18	岩元 克雄
19	岩本スナオ
20	上田 厚
21	上野 修一
22	上野 廣行
23	植村生三郎
24	魚住 汎輝
25	内倉 薫
26	梅北 兼弘
27	浦門 操
28	江川 友親
29	江藤 公俊
30	柄本 剛志
31	大木マリ子
32	大代 純市
33	大橋 克
34	大丸 祐子
35	岡田兼二郎
36	沖園 宗治
37	押川 幸市
38	鬼崎 行男
39	楓 靖子
40	柿塚 純男
41	柿元 良一
42	柏原 博秋
43	柏木 明
44	柏木 信義
45	片山 文子
46	上岡 隆規
47	上岡 利子
48	上岡 龍一
49	神園 三郎
50	亀田 哲也
51	假屋 勝彦
52	假屋 浩一
53	河内 時和
54	川口 茂樹
55	川越 忠信

No.	氏名
56	神田 舟
57	菊地 則夫
58	木佐貫國孝
59	木佐貫浩一
60	貴島 武之
61	北里 敏明
62	木通 啓子
63	木原 稔
64	木原由紀子
65	木村 仁
66	木村 良子
67	久木元健一
68	楠元 伸一
69	工藤 征英
70	窪川 正文
71	久保園洋至
72	熊谷 伸子
73	熊谷 博文
74	倉重 剛
75	倉重 徹
76	黒木 昭信
77	黒木 三治
78	郡山 正利
79	児島 森良
80	御書 一
81	後藤 祐盛
82	後藤 聖子
83	木場 ゆみ
84	小橋口幸紀
85	小牧 一郎
86	小森 哲郎
87	是枝 仁
88	西郷恵一郎
89	三枝 是雄
90	坂口 寛治
91	坂口ミヤ子
92	坂下 陸男
93	坂元 昭彦
94	阪本 祐子
95	崎元 達郎
96	柞木 昭二
97	酒匂 和彦
98	酒匂 光郎
99	佐藤 哲三
100	佐藤 典子
101	佐野 弘之
102	篠原 公人
103	柴田 章子
104	柴田 正樹
105	島 卓郎
106	島田 稔
107	清水 玲司
108	下田 正士
109	白石 典光
110	城山 博幸

No.	氏名
111	新田 洋海
112	新富 良照
113	菅原 孝二
114	杉田 成
115	杉本 統美
116	杉本 勇治
117	杉安 初喜
118	鈴木ツルエ
119	瀬戸口敬介
120	瀬戸口章三
121	瀬戸口龍雄
122	瀬戸口順子
123	瀬戸山千秋
124	外木場孝蔵
125	高木 英一
126	高城 秀一
127	高瀬 義人
128	高田 博彰
129	高野 征男
130	高野 瑞代
131	田上 弘子
132	竹内 浩二
133	竹内 義雄
134	竹下 純照
135	武田 匡弘
136	竹本 純一
137	竹山 武夫
138	立石 徳隆
139	立神 勝
140	谷 幸弘
141	田原 昌明
142	玉田 順士
143	千々岩廣志
144	千代盛虎文
145	坪久田 豊
146	津留今朝寿
147	出来田耕介
148	寺地 靖
149	寺園 秋美
150	寺辻 勉
151	堂原 富子
152	堂原 秀文
153	陶山亜矢子
154	遠山 峻
155	徳留 和憲
156	年見 隆男
157	富島 三貴
158	富島 ヨシ
159	豊岡 幸夫
160	豊岡 芳子
161	鳥濱 運栄
162	中尾 桂子
163	中尾テル子
164	中島 耕二
165	永田 四郎

No.	氏名
166	永谷 正輝
167	永友 三好
168	中野 稔
169	中野 揚子
170	中村 賢二
171	中村 一郎
172	永盛 晃
173	永山 博美
174	中山 峰男
175	西 広明
176	西 まり子
177	錦戸 至
178	西 聖一
179	西前 誠
180	西山 利雄
181	二宮 勉
182	野口みどり
183	野原 眞藏
184	野間 四郎
185	波江野 薫
186	橋口 明公
187	橋口 隆雄
188	橋口由布子
189	橋本 絹江
190	橋本 正勝
191	馬場口一利
192	濱口 直也
193	濱田 義記
194	濱邊 優
195	林 卓哉
196	林田 末行
197	原口 和輝
198	春成 政行
199	東 俊二
200	東 正孝
201	樋口 信夫
202	日高三喜男
203	平野 公一
204	福留 晃
205	福村 巖
206	藤田トキエ
207	藤間富士齋
208	二見 郁男
209	淵上 勝
210	古庄 昌雄
211	外蘭 秀夫
212	本田 武也
213	本田 泰晴
214	本坊 幸吉
215	本坊 雄一
216	舞蘭 昌之
217	前田 積男
218	前野 正伸
219	前原 優博
220	町田 國重

No.	氏名
221	松下 数雄
222	松下 承生
223	松田 茂男
224	松野 国策
225	松葉 成生
226	松山 和樹
227	松山 和紀
228	三浦 貴子
229	三浦 牧子
230	三浦 一水
231	右田 重生
232	満岡 泰
233	南 安憲
234	峯山秀次郎
235	宮川いつ子
236	宮里 六郎
237	宮嶋 泰子
238	宮田 和政
239	宮竹 克英
240	宮原 勝巳
241	村上 勇
242	村田 昭
243	村山 利子
244	持永 瑞恵
245	森上 大右
246	森川 俊雄
247	森山 秋彦
248	八重尾徳之
249	八郷 一利
250	山口慶二郎
251	山口 鉄郎
252	山崎 利幸
253	山下 力男
254	山田 一郎
255	山田 一隆
256	山永 敏夫
257	山本 省一
258	湯田 節子
259	湯田 秀生
260	湯の上 勉
261	用之丸 聡
262	吉津 俊子
263	吉永 一夫
264	吉丸 良治
265	米丸 義行
266	米満 弘之
267	六反田 学
268	轆轤 健治
269	脇田 五典
270	和田 雄司
271	渡辺 正剛
272	和田 龍三

(アイウエオ順)

住所等連絡先が必要な方は
事務局まで

熊本三州会会則

第1条 (名 称)

本会は熊本三州会と称す。

第2条 (会 員)

会員は熊本在住三州（薩摩、大隅、日向・鹿児島県、宮崎県）出身及びそのゆかりの者、そのほか本会へ入会を希望する者を会員とする。

第3条 (目 的)

本会は西南の役戦士の志を引継ぎ、会員相互の親睦と会員の発展向上を目的とする。

第4条 (事務局)

本会の事務局は、事務局長宅又は会長の指定する場所に置く。

第5条 (事 業)

本会は目的達成の為、次の事業を行う。

1. 毎年、熊本市川尻町延寿寺と熊本市段山において、西南戦役戦没者の慰霊祭を行う。
2. 毎年、山鹿口（山鹿市）、田原坂（植木町）、南洲神社大祭（鹿児島市）などの慰霊祭に代表者を派遣する。
3. 年1回、親睦会を行う。（会員家族知人等参加）
4. 理事会で決定した行事に参加する。
5. その他、理事会で決定した行事の開催。

第6条 (役 員)

本会に下記の役員を置く。

会長1名 副会長5名 事務局長1名 事務局次長1名 会計1名
理事45名以内 監査2名 顧問、相談役、参与各々若干名

第7条 (役員選出)

1. 会長及び副会長は理事の中より理事会の推薦により選出し、総会で承認を得るものとする。
2. 事務局長、事務局次長、会計は会長が理事の中より推薦し、理事会の承認を得て総会に報告する。
3. 理事及び監査は会長、副会長、事務局長、理事が理事会に推薦し、理事会の承認を得て総会に報告する。
4. 顧問、相談役、参与は会長が選出委嘱する。

第8条 (職務及び職務代行)

会 長：本会を代表し、会務全般を統括運営する。

副 会 長：会長を補佐し、会務を推進する。

事務局長：総会、役員会の運営、日常活動行事、その他全般の運営を行う。

会 計：会の会計を行う。

理 事：理事会を構成し、会務を運営する。

監 査：会計を監査し、総会において報告する。理事会に出席し、運営に協力する。

顧問、相談役、参与：会長の要請により諸会議に出席し、諮問に応じ進言する。

代 行：①会長が都合により、会長の職務を遂行出来ない場合、その間、副会長の中より理事会で会長代行を選出する。

②事務局長が都合により、事務局長の職務を遂行出来ない場合、理事会で局長代行者を選出する。

第9条（任期及び欠員の補充）

1. 役員の任期は2年とする。再任を妨げない。
2. 任期中、欠員を生じた場合、前任者の残任期間を任期期間とする。
3. 補充新役員の選任について総会の開催が困難な場合、理事会で承認決定し、事後の総会で事後承認を受けるものとする。

第10条（総会及び会議：評決）

- 総 会：定期総会は毎年1回開催する。必要あるときは臨時総会を開催する。
総会は会長が召集し開催する。
- 理事会：理事会は会長が必要に応じ召集開催する。
- 委員会：会長が必要に応じ委員を指名し、委員会を設置開催する。
- 表 決：各会議の議決は出席会員の過半数の賛成をもって決定する。

第11条（会計及び会費）

1. 本会の会計年度は1月1日より12月31日までとする。
2. 会費は年間2,000円とする。
3. 諸会議開催時に実費を徴収する。
4. 会の運営について、必要に応じて寄付金の募金活動を行う。
5. 参与については、会費の納付を免除する。
6. 会員で会費を2年以上滞納した場合、会員の資格を失うものとする。
7. 会の運営に必要な経費の支出については別途内規で定める。

第12条（会則の改定その他）

1. 本会則の改訂は、理事会で討議し、総会で承認を得るものとする。
2. 会の活動に必要と認めた場合、理事会の承認を得て分会を設置することが出来る。

内 規

第17条7による費用の支出は次のとおりとする。

1. 役職手当 次の役職にあり職務を遂行するものに役職手当を支給する。
(1) 事務局長 (2) 事務局次長 (3) 会計責任者
役職手当の変更が必要な場合、総会前の理事会で討議決議する。
2. 出張旅費
総会の用務で（会長及び事務局長の協議）会より出張を命じられ出張したものに旅費を支給する。
(1) 旅費
① 出発地より目的地までJRまたはバス、船（公共交通機関）を利用した者に普通等級往復料金を支給する。
② 出張に際し自家用車を使用したものについては①で算出した普通等級往復料金を支給する。
③ 飛行機を利用した場合は一般料金を支給する。但し割引料金を利用できた場合割引料金の実費を支給する。
④ タクシー利用については原則として認めないものとする。但し行き先が分かりにくい場所、天候の悪いとき等一出張につき、5,000円程度を限度として費を支給する。
⑤ 熊本市内の出張旅費は支給しないものとする。
3. 宿泊費
(1) 出張する会合が2日以上に亘る場合は宿泊費を支給する。
全国 1泊 10,000円
(2) その他の宿泊費については会長事務局長協議の上決定支給する。

附 則

1. 本会の経費は概ね下記の通りとする。
 - (1) 慰霊祭及び総会並びに役員会に必要な経費
 - (2) 会員の弔慰、災害見舞金
 - (3) 会の運営に関する諸経費
2. 本会に下記の帳簿を備え付けるものとする
 - (1) 会員名簿 (2) 現金出納帳 (3) 会費徴収簿 (4) 会議議事録 (5) 行事記録

改 変

- (1) 本会則は平成4年6月23日より之を施行する。
- (2) 平成12年4月9日一部改正 (3) 平成13年4月8日一部改正
- (4) 平成14年1月25日一部改正 (5) 平成17年4月10日一部改正追加
- (6) 平成21年4月12日一部改正熊本三州会会則

資 料

記念銘碑に刻まれた戦没者名簿

第 100 回慰霊祭参列者

記念事業募金趣意書

記念事業寄付者名

記念銘碑に刻まれた戦没者名簿

山本利平太	鮫島彦太郎	田中良九郎	橋口彦五郎	高野嘉之助
中野 傳藏	和泉卯之助	有馬仙次郎	徳永 周親	四元矢之助
鎌田金之進	森田源左衛門	岩崎源太郎	本田 親敏	武 和助
郷休 太郎	大熊莊次郎	川崎休之助	金丸十郎次	外山平次郎
日置 静二	東郷 彦二	鮫島 積助	竹下 清吉	田中仲右衛門
長野 祐常	斎藤伊左衛門	土師 六郎	岩崎 政行	桑幡傳左衛門
有川 繁藏	久保田忠右衛門	大野剛之助	山田 正一	伊牟田太兵衛
久木田栄之助	西 直助	田尻岩次郎	有留 清信	前田 盛真
平瀬太郎右衛門	松元傳四郎	三好猪平次	左近充清高	外山傳太郎
小出 健藏	三坂 彦六	坂元 盛恒	川俣正之進	平田袈裟太郎
松崎 直介	平山 武雄	稲田仲之丞	伊地知成之助	内田直太郎
三浦 精平	牧元吉右衛門	篠田 政治	徳永治兵衛	泊 半次郎
松田 助七	篠原東左衛門	樋口 兼澄	相良 敬治	橋本 源八
富永 岩吉	有川 貞良	坂元 郁二	岩永 諒輔	谷山 彦介
有馬 純常	小野村三袈裟	阪元 勇吉	白坂善之助	瀬戸口孫太郎
春成 兼致	前田庄九郎	下村 栄二	佐藤 眞信	濱島栄之丞
米良四郎助	濱田 林助	東郷 恕助	石神 重次	黒木 孫次
河野 壯七	樺山 泰助	園田藤左衛門	隈崎 才二	斎藤長太郎
鮫島芳次郎	野村 壯助	伊地知一郎左衛門	葉師 良助	松崎甚太郎
高田吉太郎	二階堂五次郎	田邊 岩熊	久保伊惣次	宇都 重藏
上原 助一	木場喜藤次	岩切 兼武	蓑輪 惟貞	松下 兼種
川口喜一郎	服部正左衛門	川原正之助	岩切 吉藏	伊集院半次郎
谷山 資信	津曲七次郎	郡山 直助	長野 祐記	高城 要藏
山崎藤兵衛	山口善次郎	黒田 市次	国生藤左衛門	中馬治右衛門
長崎 壯一	肥後 九助	山口林右衛門	鮫島 新吾	岩元 秀實
藤野 兼行	山口彦一郎	満尾仲之丞	唐仁原十九郎	田島彦太郎
丸尾 強助	田爪 傳助	山ノ内彦七	白濱 重里	鹿島 守次
吉峰 宗壽	西田喜四郎	瀬戸山省三	樋渡傳左衛門	藤田八次郎
郡 栄六	荒武 五郎	朝隈 九郎	大迫喜之助	有馬藤兵衛
恵利幸太郎	川上 新助	長濱徳次郎	藤崎 十郎	新納正五郎
片之坂勘熊	丸山角之助	寺尾 玄吉	小城松之丞	神宮郷右衛門
竹内新兵衛	竹下傳之助	牧 源兵衛	新橋傳太郎	園田万太郎
梶原源十郎	堀口 貞由	佐々木常一郎	別府勘四郎	染川 庄七
岩下伸之丞	川越善五郎	鹿屋一郎次	八代 次助	財部傳五左衛門
入来 愛助	長束 八二	蓑毛 長祥	加藤新之丞	長濱甚左衛門
小牧彌一郎	福崎善次郎	山口万左衛門	米田一之助	右田傳之丞
林 甚藏	朝隈助太郎	新原 兼吉	永峯 傳作	永田 東
有村 傳平	郡司 善作	藤崎 金藏	富 満徳	飯尾 文藏
井上 市二	小川内福太郎	平山孫四郎	西牟田武福	岩城 七郎
児玉用五郎	薬師寺松次郎	池田 早苗	長野喜左衛門	青出来惣助
成相 力藏	三座小平次	古川 将楽	長谷場純明	中原勇次郎
木場直右衛門	斎藤 甚平	重信 政一	酒匂 次助	赤池強兵衛
山城勘四郎	深瀬 實知	勝目 安之	森弥五郎兵衛	山口熊次郎
伊地知太郎次	青山 尚邸	平賀平之進	宮本 栄次	猿渡孝之進
山下 利葉	内田 悠藏	谷山 通法	曾山 義尚	日高猛之助
岡松今朝吉	児玉成之助	完野嘉右衛門	四本 十内	山下源五左衛門
金田勇太郎	野間 恒記	牧瀬 権助	石原利右衛	上村 源助
黒木文八郎	日高 勇八	郡山 繁秀	大迫林兵衛	岩下左左衛門
綾部 克己	田中 平吉	西郷甚右衛門	原田守之助	牧元小次郎
日高 弾藏	唐仁原民次郎	山口喜右衛門	池田彦兵衛	山野 猪鹿
一木惣二郎	荻野彦八郎	向江直右衛門	山口喜右衛門	吉川 清次
東條武一郎	深江 周助	岩城良右衛門	野口 鎮雄	有馬市郎二
紫 義光	清 軍藏	山下 才助	伊集院賤雄	窪田正兵衛
本村 孫六	児玉 万次	東 幸之輔	徳丸藤次郎	山田 健

日高 良助
荒武金之進
赤塚 為一
上村源兵衛
鮫島太郎左衛門
有馬早右衛門
松田 俊藏
山元 可也
八ヶ代宗右衛門
山口 一二
窪田 安昌
佐多 広二
松田助右衛門
海老原源之丞
山口宗次郎
前田平十郎
貴島 順介
前田伊十郎
新穂 利貞
有川 清次
阿多 吉藏
原田強兵衛
家村源右衛門
東條萬之進
勝目三次郎
折田渡次郎
濱田半次郎
河野喜八郎
松方彦次郎
河野 真一
馬場 篤
福田 彦八
大山 三太
徳永周左衛門
緒方 彦二
山下浅右衛門
帖佐吉之丞
野元 清香
濱田矢之助
山本市之助
児玉林次郎
上井 仲吾
日高岷次郎
石黒 兼善
山本庄兵衛
西田鐵之進
佐渡 皆人
川村喜佐衛門
谷川留次郎
椎葉 富作
北川 堅藏
曾山 岩熊
福崎喜十郎
犬童 金助
曾木彦四郎
大保 道記

神瀬 鹿三
山崎良之進
篠崎 甚内
犬童弥四郎
鬼塚 助一
杉田傳右衛門
木通藤太郎
原口金太郎
是枝傳太郎
溝口 元馬
上野甚左衛門
柚木彦四郎
立山 矢助
安楽 兼孝
柿元金之丞
上野 甚助
倉野 範清
佐多 兵助
土橋 彌助
寺師 宗治
家村 當一
龍波見直吉
谷口弥次郎
野村左源太
松山 為徳
市来伊之助
入田助次郎
高木 秀浄
海江田綱良
重信平右衛門
松下 兼七
押領司甚藏
中島四郎吉
稲留 彦熊
西牟田才之助
山村 金助
木藤 武介
白石慶一郎
益淵 文助
帖佐作十郎
池田 平助
桑山 政敏
中馬 彌助
中村休左衛門
西村四郎八
税所悦之助
浅江直之進
藤田 景三
大山源之助
山口 平
加世田源四郎
肝付 西藏
山口 盛一
本田泰之助
日高彦十郎
横山 盛喜

中村半太郎
秋山 庄二
武石 胤重
樋口 兼之
日高 剛健
木場 敬介
中村 量吉
野口常右衛門
野間 重一
鮫島 清春
野元 綱記
曾山仙次郎
川原八左衛門
永田吉之丞
木村 豊介
宮ノ原新之丞
緒方 平吉
児玉伊八郎
岩本太三次
佐久間正次郎
二ノ宮彌十郎
王利次兵衛
阿世知唯七
古市 又一
本田 新之
初野五左衛門
大島孫右衛門
池田 秋遊
有村 熊男
野崎源二郎
中村壯左衛門
葛城 武雄
迫田三袈裟
日高巳之助
宮里 良介
竹下壯吉郎
肥後 周馬
今村 侃
郡山喜十郎
横山 贊
渡司孝十郎
石神万右衛門
藤山平右衛門
伊勢 貞雄
鮫島 省吾
岩元甚兵衛
岩下與右衛門
児玉 八郎
山口孝右衛門
相良吉之助
児玉 十郎
土橋七之丞
山之内種國
谷山 静介
川崎 祐清
田中郷八郎

遠矢 良宝
上山 金治
酒匂彦五郎
藤本三五郎
馬章田金五郎
肝付喜八郎
吉井 友道
山田 豊彦
河野伊八郎
有馬榮之助
勝目彦左衛門
宮地 勇吉
平山堅次郎
田島 季武
鮫島藤太郎
市来太郎兵衛
三嶋 行吉
伊地知吉次郎
財部 勇七
岩崎徳次郎
園田 傳吉
新保 彦次
黒木 藤七
村山次兵衛
中村 勘市
上別府藤一郎
谷山壯五郎
犬童小次郎
土屋 直清
湯田弥七郎
折田 森藏
徳田謙之丞
山下 頼徳
車田 了助
浅谷龍之丞
平田 八郎
山元 細助
岩元幸之助
竹下善五郎
大山 弥五
肝付 英輔
小倉仲八郎
井上 徳次
平部 俊彦
江川喜藤次
松本 武元
米良 直七
白尾 國次
山上弥太郎
山下金太郎
落合半左衛門
児玉喜平太
谷口 弥七
永野 堅輔
武川 直進
石井 盛年

永山 金次
松元甚五郎
吉國才次郎
稲垣彦五郎
服部佐太郎
仁禮喜佐衛門
木道 敬甫
肥後 盛武
古川 善九
杳田藤次郎
川原藤太郎
比志島巳之助
市来喜之助
松下 兼美
木脇 彌藏
牧元壯五郎
領家巳之助
隈元 道行
木原伊之助
大熊 尚常
土橋庄右衛門
瀬ノ口孝謙
重久 篤
伊勢 松資
村上源五郎
小山 静雄
山崎 六郎
河内五右衛門
別府 景包
有馬 休矢
鱒坂彌次郎
山野田政治
金田次左衛門
伊藤 憲助
瀬戸山綱平
鶴木 政輔
荻野市左衛門
有馬宗之助
伊地知末吉
新納左平太
鶴田嘉太郎
白坂 生一
東郷 英
藤井 八郎
宮原半兵衛
石神 安村
市来 伴藏
萩平 義里
竹下 喜藏
犬童仁之助
榊 健雄
壹岐 幸平
泊嘉右衛門
山内源之丞
向江善之丞
山下 村雄

向江助左衛門	山口 房次	和泉 湛	田中新左衛門	青木 正盛
古江 清二	岩元 吉賢	山内喜兵衛	高橋 誠一	松元伸之丞
黒田治右衛門	野元徳四郎	池亀喜左衛門	中尾与之助	武田 嘉七
鮫島吉十郎	石牟禮市介	内田剛太郎	前田 隼米	四元乘之助
山形 頼幸	立本新兵衛	米田甚太郎	木場 政光	有留 孫六
市来源次郎	加治木喜一郎	宮原宗之助	美坂 常範	石原 信廣
貴島吉十郎	伊地知四郎太	丸山 惠	鬼塚 盛之	村尾 信一
永野伊之助	永井太郎吉	竹下 直助	麻木孫三郎	江夏五郎兵衛
児玉喜右衛門	江田覺右衛門	春田喜間二	鬼塚仁右衛門	鮫島半之助
鱒坂左左衛門	柏田金兵衛	染川 善八	井上新之丞	横山 清
仁禮助太郎	加世田景國	内田喜之助	白尾勝次郎	澁谷 壯介
測上仲右衛門	大岐 綱記	川崎新五郎	小玉 久八	國分嘉藤次
川島弥藤太	本田 親愛	相良 時武	井野仙次郎	長谷場幸吉
内之倉成正	山内万兵衛	弓削 研	谷口万次郎	田上 喜三
渡邊彌次郎	藺牟田覺之助	源田 秀一	阿萬南八郎	愛甲喜兵衛
萩原佐次郎	鮫島才太郎	中村 宗平	鮫島仲太郎	坂元彦九郎
末吉善右衛門	瀬戸山彦之進	堅山晟之助	黒木敬次郎	鹿ノ子木正治
石神 近敬	矢野宗太郎	勝目 安懷	横山宗之助	村原 長安
有田新之丞	坂元忠兵衛	山崎 六郎	宮里正兵衛	山内 静馬
永山 盛武	久米興三右衛門	山下萬次郎	山ノ上矢五郎	遠藤 喜八
酒匂三之介	竹下半之進	重久 岩穂	東條藤太郎	吉永喜之丞
鳥濱 軍記	有村 武則	山本素太郎	時任蔵之丞	柳田勇次郎
貴島七左衛門	永田 庚	上山佐左衛門	井上 勘六	吉瀬 源内
二宮太市郎	安田宗太郎	尾上小太郎	伊地知重君	境田 登二
東郷鉄次郎	甲斐 君平	山下 勝茂	森山孝右衛門	中島喜兵衛
海江田健介	黒川 源蔵	川畑万左衛門	前田 賢造	坂本 清緝
大津喜右衛門	金丸 忠彌	弓削新之丞	川上 乙彦	小濱長太郎
有馬新五左衛門	沼津小彌太	恒吉 國方	小倉 健蔵	田代彦次郎
山口善之助	佐土原藤吾	有馬 彦助	三輪眞三郎	濱田 萬蔵
瀬戸口良右衛門	矢野 勝之	深川 幸蔵	丸田新十郎	竹下與右衛門
富岡 勘介	川田 喜蔵	上妻三之助	宮永次兵衛	本田助次郎
西田 甚七	徳永銀太郎	小山新次郎	伊地知武二	吉留 藤内
山田 清隆	塩田助太郎	鹿子木小平次	大内田順輔	古市直太朗
川崎傳左衛門	野崎 野七	永友 安盛	有馬 七二	伊地知季幸
重久嘉右衛門	野元乙次郎	土橋 直八	満尾 早二	大河平隆満
榎本 六蔵	高野 重彦	河野助之進	深見 休八	若松善五左衛門
東郷 藤助	津崎 兼徳	中原 親友	三島幸之助	内田 昌秀
石踊萬之介	小幡長兵衛	斎藤七郎右衛門	池畑郷之丞	林甚右衛門
岩下 活計	田中 虎吉	松田助次郎	清藤 義行	肱岡正次郎
山下 頼尚	別府次郎兵衛	竹迫岩太郎	野崎 静一	伊藤清之丞
押川市之進	相良 周延	中馬 平蔵	大山彌四郎	有馬量左衛門
高城丈左衛門	岩重 小吉	石塚市太郎	木元 清蔵	前田 太一
乙守 隆嘉	斎藤 徹齊	矢野甚次郎	三谷 与吉	榎本嘉右衛門
有屋田助二	前田良太郎	阿万与一郎	木山 直記	河内五左衛門
津崎金太郎	諏訪昶四郎	松田 親吉	田代太次右衛門	川上 要市
松元彦右衛門	藤田四郎兵衛	二見 安臣	本山甚太郎	山元直左衛門
川崎 榮	安楽 彦市	吉松 兼親	四元 兼一	西田慶一郎
永山 清一	池邊 宗吉	松岡五兵衛	黒木梅太郎	西田矢之助
三原雄五郎	税所 彦二	井上宇平次	古川 正蔵	西田 経一
花川 次郎	村田 岩	日高正右衛門	知覧 和助	橋口 住治
川崎次郎太	瀬戸口喜之介	鮫島 盛應	土橋 正吉	淵脇 踈時
山田 直二	二木良右衛門	本田 武志	宮田 清経	松尾 彦助
羽田孫次郎	野村 久助	宇和島宇助	薬丸 軍六	川村 甫介
藤井 南糖	村岡覺兵衛	樺山 謙助	二之方覺之丞	黒田 清張
宮島半之進	浅川 一	永井 助二	森 八郎	
浅谷榮之丞	樺山 静彦	山地津太郎	鬼塚吉一郎	

第 100 回慰霊祭参列者

熊本三州会	会長	柏木 明
西郷隆盛公奉仕会	理事長	西郷 隆文
西南の役従軍者遺族会	会長	桂 久昭
鹿児島県	副知事	布袋 苛之
宮崎県	副知事	稲用 博美
熊本県知事公室	室長	田嶋 徹
陸上自衛隊西部方面	総監	番匠幸一郎
陸上自衛隊第 8 師団	師団長	山之上 哲郎
自衛隊熊本地方協力本部	本部長	山中 敏弘
陸上自衛隊西部方面総幹部	総務部長	永田 伸二
前参議院議員		木村 仁
同	令夫人	木村 良子
山鹿市長		中嶋 憲正
元参議院議員		三浦 一水
熊本県議会議員		岩下 栄一
鹿児島県議会議員		井上 章三
衆議院議員 野田毅 代理		吉岡 祐晃
衆議院議員 木原稔 代理		後藤 啓眞
熊本市観光文化交流局	次長	田上 聖子
熊本城顕彰会	会長 元熊本市長	三角 保之
熊本城顕彰会	幹事	玉真 勇一
熊本丁丑会	会長	内藤 儀彦
同	理事	木部 省吾
同	事務局長	森崎 淳一
福岡南州会	会長	宮田 苛成
同	副幹事長	大橋 昭仁
同	幹事	国分 友貴
田原坂顕彰会	副会長	牧野 光明
山鹿口戦跡顕彰会	会長	徳永 義知
同	副会長	野満 郁夫
同	事務局長	江崎 勝義
鹿児島神社宮司		山下 剛
西郷隆盛公奉賛会	専務理事	新宅 和正
西郷隆盛公奉賛会	理事	久留 俊彦
熊本在住鹿児島県人会	会長	池満 淵
熊本在住宮崎県人会	会長	二見 郁夫
八代おはら会	会長	大里 省吾
八代おはら会	副会長	松山 和紀
八代おはら会	副会長	永田 克孝
八代おはら会	理事	水由 正夫
延寿寺総代		續 征雄
元南九州コカ・コーラ	社長	本坊 幸吉
川尻校区自治会連合会	会長	中村 亮一
川尻校区寿楽会連合会	会長	村田 利博
川尻町文化の会	会長	荒金 鍊一
くまもと工芸会館	館長	宅野雄二朗
川尻校区 1 町内自治会	会長	永田 啓介
川尻校区 2 町内自治会	会長	深川 勇吉

熊本三州会第 100 回慰霊祭 記念事業募金趣意書

熊本三州会は明治 10 年の西南の役薩軍戦没者の慰霊祭を毎年行っており、熊本在住鹿児島、宮崎両県出身者、(薩摩、大隅、日向、即三州会) と縁の方を主体に約 350 余名の会員で運営しております。

明治 10 年川尻に本営を置き政府軍との戦いで戦死者、戦傷者が続出し担架で川尻まで運ばれてきましたが、後難を恐れどの寺も埋葬の提供を拒む中、延寿寺の住職 30 世伝弘応師は「たとえ賊名を被っても死者を成仏させ、おもむろに供養するのが僧の務め」と寺院の一部を提供し丁重に埋葬され、その数 850 余名に及びました。

その後熊本在住三州出身者の会員が組織を立ち上げ、県下に散在する遺骨を発掘すると共に募金を募り、東郷平八郎を始め多くの方々が協力して延寿寺境内に西南の役薩軍戦没者墓碑を建立しました。

大正 5 年 6 月 4 日盛大に落成式兼第 1 回慰霊祭を開催、以来毎年熊本三州会により終戦時の混乱期にも中断すること無く慰霊祭が続けられ、毎年 4 月厳粛の中にも盛大に開催しており、平成 27 年は記念すべき第 100 回を迎える事と成ります。

その記念事業として銘碑の建立と記念誌の発行、西郷小兵衛、他個々に葬られた薩軍兵士の荒廃した墓地の補修、整備その他を企画致しました。

特に銘碑の建立は時勢を憂い決起して雄途戦陣に散った若者たちの名が一部の名簿に残るのみで田原坂や山鹿口の様に表わされておらず、今回墓碑に並列して銘碑を建立したいとの念願によるものです。

皆様には本趣旨に御理解戴き是非ご支援、ご協力を賜りますよう切にお願い申し上げます。

発起人

顧問	池満 淵 木村 仁 木原 稔 倉重 剛 倉津 純一
	西郷恵一郎 酒匂 光郎 中山 峰男 藤間富士齋
	二見 郁男 本坊 雄一 本坊 幸吉 三浦 一水
会長	柏木 明
会長代行	崎元 達郎
副会長	竹内 義雄 脇田 五典 米丸 義行 梅北 兼弘

第100回慰霊祭記念事業寄付者名

寄付額 氏名(敬称略)

- 300万円 柏木 明
30万円 崎元 達郎
25万円 福山 正子
15万円 (株)竹内工務店会長 竹内 義雄
11万円 西南の役従軍者遺族会会長 桂 久昭、池田 京子
10万円 西郷恵一郎、西郷隆盛公奉賛会 西郷 隆文
7.1万円 寺池 靖
7万円 瀬戸口章三
6万円 西南の役山鹿口戦蹟顕彰会会長 徳永 義智、中野 揚子、福岡南洲会会長 宮田 可成
5万円 梅北 兼弘、樋口 信夫、二見 郁男、本坊 幸吉、本坊 雄一、脇田 五典、
(株)八代プレハブ 満岡 泰、他匿名1名
4.8万円 三浦 一水
3万円 熊本在住鹿児島県人会会長 池満 淵、学校法人君が淵学園崇城大学 中山 峰男、
木村 仁、熊本城顕彰会会長 三角 保之、倉津 純一、酒匂 光郎、杉本 統美、富島 ヨシ、
中村 稜子
2万円 浦門 操、鹿児島県副知事 布袋 嘉之、柏木 義信、木通 啓子、木村 良子、
公益社団法人 三州倶楽部、是枝 仁、坂口 寛治、西南の役従軍者遺族会、
西南の役丁丑会会長 内藤 儀彦、徳留 晃、徳留 和憲、中尾 佳子、松下 数雄、
松田 茂男、山本 省一、吉津 俊子、米丸 義行、(株)亀田建装代表取締役 亀田 哲也、
上岡 龍一・利子
1.6万円 佐藤 義和
1.5万円 濱田 義紀、八代おはら会会長 大里 昭吾
1万円 安仁屋妙子、有川 藏亮、有村 謙一、ありむら歯科医院、市来 修、井上 章三、
岩切 羊子、上田 厚、植村正三郎、江川 友視、延寿寺住職 藏原 恒海、尾辻 清幸、
鬼崎 行男、河内 時和、川尻校区自治会連合会会長 中村 亮一、河村 修、
熊本機能病院 米満 弘之、齋藤 郁子、齋藤 叡子、柴田 章子、島 卓郎、島田 稔、
西南戦争田原坂顕彰会、瀬戸口啓介、高瀬 義人、立石 徳隆、出来田耕介、
山鹿口戦蹟顕彰会会長 徳永 義智、豊岡 芳子、永田 四郎、西 聖一、野間 清光、
伯耆流居合熊本水月会 上村 博孝、春成 政之、藤田トキエ、藤間富士齋、
北里綜合法律事務所 北里 敏明、牧之内繁男、松山 和紀、右田 重生、峯山秀次郎、
村田 経容、村山 利子、八重尾徳之、八代遺族 高木 孝子、山本 キミ、
(株)パオプラーン熊本代表取締役 中島 耕二、(株)南日本銀行熊本営業部、景行 邦子、
(有)オー・エス収集センター代表取締役 野原 雅浩、他匿名6名
6千円 千代盛虎文
5千円 入江賀寿子、岩元 吉子、上野 修一、大茂勢津子、蒲生 伸、
株式会社カワゴエ 川越 忠信、河崎 良和、川尻校区老人クラブ楽寿会連合会、
黒木 三治、椎原 幸喜、白石 純一、種子島一弘、延寿寺総代 續 征雄、野間 廣子、
濱田 良次、伴 兼弥、古川 良英、本田 寿恵、松下 保、満留 隆志、吉丸 良治、
他匿名1名
3千円 くまもと工芸会館館長 宅野雄二郎、瀬戸口龍雄、山鹿市長 中嶋 憲正
2千円 島田 正和、町野 淳子

総額 6,294,000 円

編集後記

「第100回の慰霊祭を基軸に、世界の偉人西郷隆盛翁の叡智と勇気と人柄により残された「敬天愛人」の広い心、西南の役の足跡、そして、熊本三州会100年の歴史を辿れる資料とするとともに、100年脈々と続けてきた熊本三州会の活動と会員諸氏および関係者の情熱と真心を伝える」という編集方針を掲げ、平成24年7月に第1回の編集部会を開催しましたが、第100回慰霊祭を終えた平成27年10月に、この記念誌を発刊することができました。

お忙しい中に時間を割いて、ご祝辞を頂いた関係各位の皆様方、特別寄稿文をお寄せ頂いた方々、また、会員始め多くの方々のご協力を得て、記念誌を刊行できましたことを深く感謝いたしております。本当にありがとうございました。

編集作業においては、中野揚子委員が編集された90周年記念誌が大いに参考になりました。今回の新企画は、坂口編集長提案の記念座談会であります。願わくは、当初の編集方針をいくばくかは実現できているとのご意見がいただければ、編集部会として、これに勝る喜びはありません。

最後に、発行までに多大なご協力をいただきました田中浩之様ほかコロニー印刷の関係者の皆様に、感謝申し上げます。

編集 部 会 長 崎元 達郎
〃 副 部 会 長 脇田 五典
編 集 長 坂口 寛治
編 集 委 員 鬼崎 行男, 柴田 章子, 瀬戸口章三, 中野 揚子

平成27年10月吉日

協賛広告



協賛広告

本年は、西南の役戦没者慰霊祭 100 回目に当たり、熊本三州会として記念誌の発行を計画いたしましたところ、企業会社の皆様方には、三州会活動について深い御理解と御協力を頂きまして誠に有難うございました。心からお礼申し上げます。

平成 27 年 10 月吉日

熊本三州会一同

「誠の心」で98年



www.ideta.or.jp

since 2008



since 1917



医療法人出田会

眼科

呉服町診療所

〒860-0035 熊本市中央区呉服町1-21
TEL 096(325)0200 FAX 096(325)0211



日本医療機能評価機構認定

出田眼科病院

〒860-0027 熊本市中央区西唐人町39
TEL 096(325)5222 FAX 096(311)5512

医療法人 社団 上野会

熊本博愛病院

博愛ホームヘルプサービス

熊本市北区楠 6-6-60

TEL(096)338-7117 FAX(096)338-7116

博愛居宅介護支援事業所 (介護サービス計画作成等)

TEL(096)338-9993

介護老人保健施設

ぎんなんの里

熊本市北区榎木 1-3-70

TEL(096)337-2700 FAX(096)337-2743

グループホーム

にれのき荘

熊本市北区龍田 4-12-12

TEL・FAX(096)337-1277



KUMAMOTO
KINOH
HOSPITAL

熊本機能病院

KUMAMOTO KINOH HOSPITAL



24時間救急受付

会長：米満弘之 理事長：米満弘一郎

整形外科・形成外科・小児形成外科・リウマチ科・外科・救急科
神経内科・リハビリテーション科・脳神経外科・内科・血管外科
循環器内科・麻酔科(矢野敏之)・放射線科

熊本市北区山室6丁目8番1号

TEL 096-345-8111

熊本機能病院

検索

肛門内科 肛門外科 内科 消化器内科 外科
消化器外科 大腸・肛門リハビリテーション科
リハビリテーション科 心療内科 泌尿器科

熊本県指定がん診療連携拠点病院
熊本県へき地医療支援病院
(財)日本医療機能評価機構認定優良病院



理事長 高野 正博 院長 山田 一隆
<http://www.takano-hospital.jp> 熊本市中央区帯山4丁目2-88
平成28年、大江（JT跡地）に新築移転予定

診療受付時間 月～金 午前8:30～11:30
午後13:30～16:30
土 午前8:30～11:30
※肛門と消化器の診療は日・祝日も午前の診療を受付けて
おります（午後休診）。

高野病院理事
高野瑞代（鹿児島市）



京塚支店

〒862-0952 熊本市東区京塚本町 7-12
TEL 096-381-1137

「熊本から世界へ」
健やかな未来をつくる

私たちは、ワクチンや血漿分画製剤など
生物学的医薬品に特化した「製薬メーカー」です。



健やかな未来をつくる



〒860-8568 熊本市北区大窪一丁目6番1号
TEL.096-344-1211 FAX.096-345-1345

化血研

介護老人保健施設 みつぐ苑

理念 **共に支え 共に生きる**

私たちは、地域社会の一員として、
ご利用者のご家族のかたわらで尊厳を守り、
自立支援・在宅支援を誠心誠意行います



《関連事業所》

- 通所リハビリテーション みつぐ苑
- 認知症対応型通所介護 みつぐ苑
- 訪問リハビリテーション みつぐ苑
- 居宅介護支援事業所 みつぐ苑
- グループホーム茜

介護老人保健施設 みつぐ苑

お気軽にご相談ください

☎ 096-323-6123

〒861-5535 熊本市北区頁町135番地

熊本田原坂線 崇城大学から車で約3分



平成26年4月
リニューアルオープン
しました

■ みつぐまち診療所

一般診療の他、もの忘れ外来（認知症専門外来）・禁煙外来と訪問診療に取り組んでいます。

高齢者診療（もの忘れ外来）は診断だけでなく「暮らしのお悩み」まで対応いたします。

お気軽にご相談ください。

先ずはお電話を ※完全予約制

☎ 096-323-6122 (直通)



■ 津野田内科医院

～ 地域の皆様と共に50年 ～

お陰様で昨年、開院50周年を迎えました。
これからも地域の皆様と共に歩んでまいります。

☎ 096-361-5259 〒862-0923 熊本市東区東京塚町1-32 東京塚バス停より徒歩1分

●診療科目 / 内科、呼吸器科、循環器科
特定健診(予約制)、予防接種、訪問診療、訪問看護、禁煙治療

●診療時間 / 月～金 (午前) 9:00～13:00
(午後) 15:00～19:00
土 (午前) 9:00～14:00
※土・午後、日、祝は休診です



医療法人 医誠会

<http://www.iseikai.info/>

内科・循環器科・胃腸科・小児科

柏木医院

名誉院長 柏木 明
院長 柏木 孝史

熊本市中央区坪井2-8-17
Tel.096-343-5108・5109
Fax.096-343-9084

崇城大学創立50周年記念事業

未来人育成特待生制度《通称 ミライク》

卒業迄の授業料がすべて無料に ミライク プレミアム	4年間の授業料 0円	芸術学部：初年度授業料が無料に アートミライク プレミアム	初年度の授業料 0円 <small>NEW</small>
国立大学よりも安い授業料に ミライク 50	4年間の授業料 50万円/年	芸術学部：初年度授業料が50万円に アートミライク 50	初年度の授業料 50万円 <small>NEW</small>

※ 芸術学部は6年間、また入学金・実習費等は別途必要になります



崇城大学
SOJO UNIVERSITY

〒860-0082 熊本市西区池田 4-22-1

問い合わせ

TEL:096-326-6810 (入試課直通)

そうじょう大学 検索

薬学
応用微生物工学科
応用生命科学科
機械工学科
ナノサイエンス学科
建築学
宇宙航空システム工学科
情報学
美術学
デザイン学

しよら けい
尚 綱



学校法人
尚綱学園

尚綱大学 尚綱大学短期大学部
尚綱高等学校 尚綱中学校 (中高一貫)
尚綱大学短期大学部附属幼稚園

九品寺キャンパス 熊本市中央区九品寺2丁目6-78 TEL 096-364-0116
楡木キャンパス 熊本市北区楡木6丁目5-1 TEL 096-338-8840



こころの味覚へ。

株式会社 **たからや蒲鉾**

〒896-0046 鹿児島県いちき串木野市西薩町17番地27
TEL 0996-32-2538 FAX 0996-33-1020



**海の恵みに
おいしい恩返し**

鹿児島串木野名産さつま揚げ
全国発送承ります。

さつまあげ・かまぼこ

ご注文はフリーダイヤルをご利用ください。

TEL ☎ 0120-71-2538 ●日・祝日休み
AM8:00~PM5:00
FAX ☎ 0120-73-2538 ●24時間受付

ヨネザワは、専門店として全力で
お客様の笑顔のために、
「見る」「聞く」のお手伝いを
させていただきます。

メガネのヨネザワ
本店



取扱商品

メガネ・補聴器・福祉機器・コンタクトレンズ

お問い合わせは

本店 ☎ 096-383-5111 熊本市中央区水前寺6丁目1-38 フリーダイヤル 0120-114-692

メガネの
ヨネザワ

ヨネザワ
補聴器

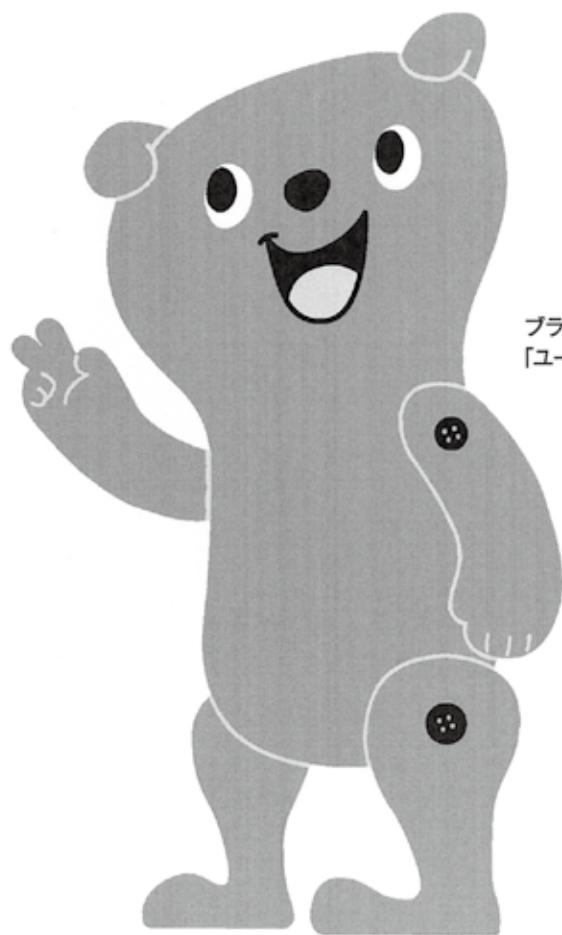
ヨネザワ
コンタクト

<http://www.yonezawa-web.co.jp/>

(株)ヨネザワ

熊本・福岡・大分・佐賀・長崎・宮崎・鹿児島・山口

あなたのいちばんに。



ブランドキャラクター
「ユーモ」

FFG 福岡フィナンシャルグループ

K 熊本銀行

優れた技術と信頼で奉仕する



Takeuchi



総合建設業

株式会社 **竹内工務店**

代表取締役社長 竹内浩二

取締役会長 竹内義雄

建築工事・土木工事〔設計・施工〕
公共工事(国、県、市町村)
民間工事(マンション、賃貸アパート、
一般工事、各種リフォーム等々)

本社/熊本市東区尾ノ上4丁目20番11号
TEL(096)365-3366(代) FAX369-0562

営業所/鹿児島市西田3丁目1番1

TEL(099)204-0435

E-mail:info@takeuchi-k.com

熊本三州会様の益々のご発展を祈念致します



KAWAGOE

総合建設業

株式会社

カワゴエ

代表取締役 川越一弘

〒861-8031

熊本市東区戸島町920-6

TEL 096-389-5577

FAX 096-389-5579



建設業許可一般(22)第13698号

製造メーカー
株式会社 **八代プレハブ**

代表取締役

満岡 泰

（取扱品目）
プレハブ住宅・体育館・大型工場・ガレージ
事務所・店舗・倉庫・エクステリア全般
増改築・太陽光発電ソーラーシステム

本社展示場 〒869-5151 熊本県八代市敷川内町2469番地2号
(代)Tel (0965)32-0515 Fax 32-1526
工場Tel (0965)38-2588
年中無休24時間受付 (緊急連絡先)0965-38-2872

★趣味・特技★

英会話・民謡・詩吟・海外旅行・人々を元気付ける事
H18年8月 倫理の実践により、
熊本県民謡大会グランドチャンピオン受賞
H21年10月 民謡刈干切唄全国大会 男子成年の部で第3位
H23年10月 日本民謡協会全国大会壮年部優秀賞受賞(両国国技館)

★今、大好きな言葉★

「社長よ、自分自身をリストラせよ！」

「どうせ逃げられん、どんと行け!!!」

「人生は 今日がはじまり!!!」

年中無休 24 時間受付の精神で人生を楽しんでいます。

前野胃腸科クリニック

院長 前野 正伸

胃腸科・外科・肛門科・内科

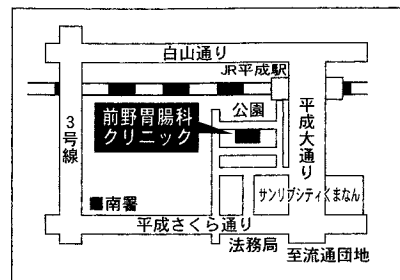
診療時間

平日 午前9:00～1:00

午後2:30～6:00

土曜 午前9:00～1:00

休診 日曜・祝日



〒 860-0833 熊本市南区平成 2 丁目 7-21
TEL (096) 370-1511

**創業50年を迎え皆様に感謝
皆様の御陰です。これからも安全・安心で
満足度110%を目標に頑張ります。**

地球環境を大事にしましょう

株式会社 **亀田建装**

熊本県塗装防水仕上業協同組合員

塗装・防水工事
&
リフォーム工事業

代表取締役会長

亀田 哲也 (鹿児島市出身)

〒862-0969 熊本市南区良町 1 丁目13番34号

☎(代表)378-5551 FAX(096)378-5553

E-mail: info@kameken.jp

携帯: 090-8288-8830



graceful
CAMELLIA
グレースフル カメリア

カメリアは、落ち着いた雰囲気のある店内で「大人のリゾート地」をテーマに、癒し・楽しさを提供する場所です。

セット料金 (60分) ¥5,000

●営業時間 PM8:00～AM1:00 ●日曜日・祭日休み

〒860-0806 熊本市中央区花畑町11-18 第一银杏ビル2F

TEL 096-355-8188

代表 瀬戸口 玲子

相続・離婚・交通事故・債務整理・後見事件・医療事故・民事全般・刑事事件

親切・丁寧・迅速に対応します



北里綜合法律事務所

弁護士 北里敏明 弁護士 石部雄一

〒860-0822 熊本市中央区本山町119

TEL096-375-3888 FAX096-375-3889

医療法人 回生会

リハビリテーションセンター



熊本回生会病院

理事長 鬼木 泰博

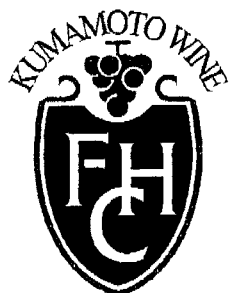
院長 大橋 浩太郎

診療科目：整形外科・リハビリテーション科・内科
脳神経外科・外科・神経内科・循環器科
放射線科・リウマチ科・歯科

〒861-3193 熊本県上益城郡嘉島町鯉1880

電話 096-237-1133 FAX096-237-2252

日本で飲む最高のワイン 2015にて国産ベストワイン受賞



熊本ワイン株式会社



TEL096-275-2277 FAX096-275-2228
<http://www.kumamotowine.co.jp>

お酒は20歳をすぎから



本伝 東肥赤酒 純米酒 瑞鷹

瑞鷹株式会社
熊本市南区川尻四丁目6-67

江戸時代末期
肥後の国川尻で
酒造りを始めて
百四十五年
清酒「瑞鷹」
「東肥赤酒」
くまもの水と
くまもの米
伝統ある
老舗の技で醸し出す
くまもの地酒です



熊本市川尻 瑞鷹川尻本蔵前の風景 (景観重要建造物指定)

伝統と
風土が
織りなす
匠の酒

官公庁・一般 土木工事

総合建設業

三州建設株式会社

代表取締役 神田 舟

〒862-0926 熊本市東区保田窪5丁目4番18号

TEL 096-382-0193 FAX 096-382-0197

おかげさまで
125th
歴史を誇り続けて 創業125周年



田苑

薩摩焼酎 田苑芋黒麹仕込み
濃厚な香りと骨太な味わい



薩摩焼酎 田苑芋白麹仕込み

田苑

お酒は二十歳になってから

田苑酒造株式会社

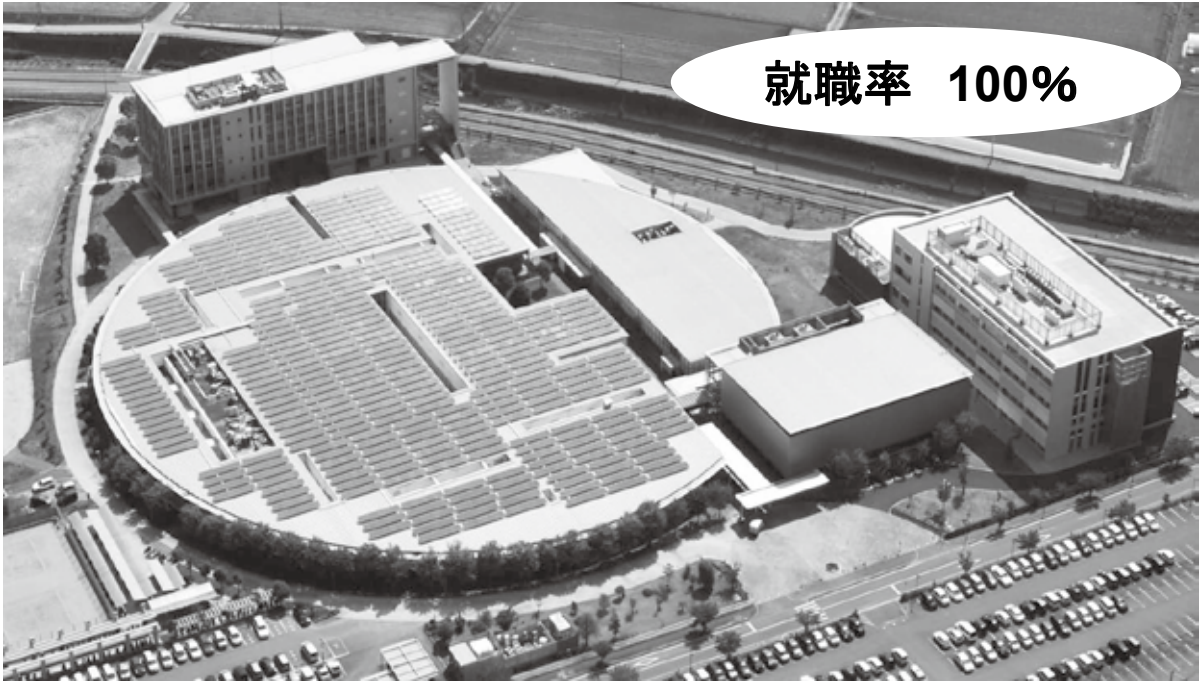
鹿児島県薩摩川内市薩摩町塔之原 11356 番地 1
URL:<http://denen-shuzo.co.jp/>



熊本保健科学大学

Kumamoto Health Science University

設立母体：一般財団法人 化学及血清療法研究所



就職率 100%

【保健科学部】

- 医学検査学科 100名
- 看護学科 100名
- リハビリテーション学科

- 理学療法学専攻 40名
- 生活機能療法学専攻 40名
- 言語聴覚学専攻 40名

【助産別科】（1年課程） 20名

入学資格：看護師免許取得者

【大学院】

10名

- 保健科学研究科 保健科学専攻（修士課程）
- 臨床検査領域・リハビリテーション領域

【キャリア教育研修センター】

認定看護師教育課程（6ヵ月課程）

脳卒中リハビリテーション看護 15名

慢性心不全看護 15名

問合せ先 〒861-5598 熊本市北区和泉町325 学校法人 银杏学園 熊本保健科学大学
TEL 096-275-2111(代) FAX 096-245-3126 URL <http://www.kumamoto-hsu.ac.jp>



Support of
Employment,
Living and
Participation

社会就労センター

ポスター
プログラム
パンフレット
カレンダー
チラシ
包装紙
記念誌
会社案内
学校案内
統計資料
広報紙
自費出版



私たちは お客様の想いと夢をデザインします…



社会福祉法人

熊本県コロニー協会
(コロニー印刷)

〒860-0051 熊本市西区二本木3丁目12-37

TEL.096-353-1291 FAX.096-353-1294

Home page <http://www.colony-k.or.jp/>

E-mail eigy@colony-k.or.jp

新登場
KURO SHIRANAMI

黒白波
薩摩焼酎



ふほ
わお
つう
ふん
わの
りり
。

薩摩酒造株式会社

飲酒は20歳を過ぎてから。飲酒運転は法律で禁止されています。妊娠中や授乳期の飲酒は、胎児・乳児の発育に悪影響を与えるおそれがあります。お酒は適量を。

熊本三州会第 100 回慰霊祭を祝し 更なるご発展を祈念致します

南日本銀行株式会社 熊本営業部

〒860-0807 熊本市下通1丁目7-20

TEL 352-7131

レントオール フランチャイズチェーン
街とビジネスを
レンタルサポート **RENT ALL**



- イベント
- お祭り
- 展示会
- 式典
- スポーツ
- 遊藝
- セールス
- 会議
- 福祉大会



レンタルとイベントのことなら
おまかせください!

何をいくつ借りればいいのか?

お祭り・展示会・イベントの担当者になったけれど...



イベント&レンタルのプロが
ご相談にお答えします!



問い合わせは全国チェーンの……

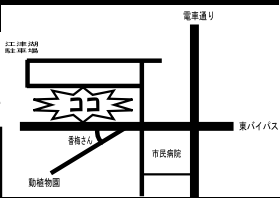
レントオール熊本

〒862-0955 熊本市東区神水本町26-12

営業時間 日・祝を除く 9:00~18:00

TEL 096-369-7651

FAX 096-369-7349



久吾

熊本県山鹿市山鹿49-3

TEL 0968-44-4792

0968-44-1966

Facebookもご覧ください

寿し
会席
仕出し
大小宴会

お陰様で創業40周年を

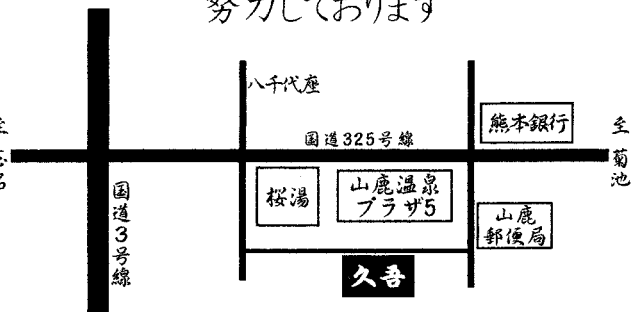
迎えることができました

日頃より気持ちの良い接客を心掛け

新鮮な魚を一つ一つ丁寧にお出し

皆様に満足と寛ぎを提供できるよう

努力しております



至 熊本市内

アクセス

植木インターから山鹿方面へ20分

山鹿市 中央通り交差点右折し

2つ目の信号(桜湯手前)を右折

T字路を左折すると50m先右側です

SINCE 1961

MONDE SELECTION
BRUXELLES
INTERNATIONAL QUALITY FESTIVAL
2013
GOLD AWARD

世界に認められた熊本の銘菓
2010・2011
2012・2013 モンドセレクション
4年連続金賞受賞

月下の
熊本城

熊本県産の栗と阿蘇・小国
ジャージー牛乳を使った餡を
ミルクたっぷりの生地で包み
しつとりと焼上げました。
甘さ控えめの上品な味わいを
お楽しみ下さい。

清正製菓
KITOMASA SEIKA
熊本市北区真町537-18 (フードパル熊本内)
TEL 096-275-2300・FAX 096-245-5602

 タオル・和手拭・のれん・ハッピ
五月幟・神社幟・宣伝幟・横断幕
社旗・部旗・その他各種染物

染元 (有) 宮崎染織

〒861-4115
熊本市南区川尻1丁目3-22
TEL/FAX 096-357-9109
E-mail: miyazaki@se.kcn-tv.ne.jp
ホームページ [宮崎染織](#) 検索

貸事務所・貸マンション

日星天神ビル

〒862-0971

熊本市中央区大江5丁目8-17

日星商事株式会社

代表取締役 杉本統美

電話 096-366-9755

樋口信夫公認会計士事務所

Nobuo Higuchi Certified Public Accountant Office

法人税	消費税
税務申告・相談	
所得税	相続税・贈与税

お気軽にご相談ください



〒862-0949

熊本市中央区国府4丁目5番22号

TEL (096) 366-8877 (代表)・FAX (096) 372-5415

<http://n-higuchi-cpa-office.tknf.com>

E-mail: up-kfp@tknf.or.jp

経営革新等支援機関の認定事務所

放送大学はあらゆる人に
「学び」のチャンスを提供
します！

入学時期は年2回！（4月、10月）
※大学院は4月

「学位取得」、「資格取得」を
目指す方、興味ある科目だけを
学びたい方、様々な目的に応じ
た「学び」をサポートします。

テレビ、インターネット、
全国の学習センターで学べます。

全国規模のメリットを生かし、
一流の講師陣が授業を提供し
ています。

授業料は1科目(2単位)
11,000円(教材費含む)



放送大学





日常を
非日常に。

ビジネスからレジャーまで
ホテルゲートイン鹿児島

 HOTEL GATE IN
KAGOSHIMA

鹿児島 ホテル ゲートイン

検索

鹿児島市船津町5-20 TEL 099-223-9100

株式会社原口商事 代表取締役 崎元秀紀

親子四代

お墓専門の店

お墓の

- ・建替え
- ・クリーニング
- ・修理
- ・リフォーム
- ・文字彫り
- ・その他

石の事なら何でも御相談下さい。

労働大臣認定 一級技能士

(有)島田石材店

熊本市東区新南部2丁目1-64
(東海大星翔高校通り)

TEL 096-382-0449
FAX 096-382-0649

熊本三州会記念誌
西南の役 第100回慰霊祭記念

平成27年10月発行

編集発行 熊本三州会

編集委員

編集部会長	崎元 達郎
編集副部長	脇田 五典
編集長	坂口 寛治
編集委員	鬼崎 行男, 柴田 章子, 瀬戸口章三, 中野 揚子

事務局 熊本市南区日吉1丁目9-18
(瀬戸口章三 方)

印刷 コロニー印刷
〒860-0051
熊本市西区二本木3丁目12-37
TEL 096-353-1291
FAX 096-353-1294